津軽

太宰治

津軽 こな雪 かたっ っ っ ぶ雪 雪 雪 雪

(東奥年鑑より)

所川原、 に生れ、さうして二十年間、 年の生涯に於いて、 そ三週間ほどかかつて一周したのであるが、それは、 或るとしの春、 青森、 弘前、 私は、 かなり重要な事件の一つであつた。 浅虫、 生れてはじめて本州北端、 大鰐、 津軽に於いて育ちながら、 それだけの町を見ただけで、 津軽半島を凡 私の三十幾 金木、 私は津軽 五.

その他の町村に就いては少しも知るところが無かつたのである。

金木は、

私の生れた町である。

津軽平野のほぼ中央に位し、人

津軽 る。 る。 青森、 がこれくらゐの小さい町にも既に幽かに忍びいつてゐる模様であ が在る。この地方の産物の集散地で人口も一万以上あるやうだ。 悪く言へば、 よつと気取つた町である。善く言へば、水のやうに淡泊であり、 無い。 い町である。農村の匂ひは無く、 それから三里ほど南下し、岩木川に沿うて五所川原といふ町 大袈裟な譬喩でわれながら閉口して申し上げるのであるが、 六千の、これといふ特徴もないが、どこやら都会ふうにち 弘前の両市を除いて、人口一万以上の町は、この辺には他 善く言へば、 底の浅い見栄坊の町といふ事になつてゐるやうであ 活気のある町であり、 都会特有の、 悪く言へば、さわが あの孤独の戦慄

かりに東京に例をとるならば、

金木は小石川であり、

五所川原は

がて、 ので、 化の虚構に満ちてはゐるが、けれども、 感じで、 がゐる。 ものだつたと思つてゐる。すなはち、 中学校にはひるまでは、この五所川原と金木と、二つの町 軽 の町に就いて、 四時間の旅であつた筈なのに、私にとつては非常な大旅行の といつたやうなところでもあらうか。ここには、 その描写は必ずしも事実そのままではなく、 青森の中学校に入学試験を受けに行く時、それは、わづか 実にしばしばこの五所川原の叔母の家へ遊びに来た。 その時の興奮を私は少し脚色して小説にも書いた事があ 幼少の頃、 私は生みの母よりも、この叔母を慕つてゐた ほとんど何も知らなかつたと言つてよい。や 感じは、だいたいあんな かなし 私 の他は、 いお道 の叔母

私は、

津軽 掛けのやうにも見えます。でも、少年は悲しく緊張して、 ぶせてゐるのと、そつくり同じ様式で、着物の襟の外側にひつぱ ゐたものとみえて、やはり、そのときも着てゐました。し り出し、 の襟を、 こんどのシャツには蝶々の翅のやうな大きい襟がついてゐて、 でありました。白いフランネルのシヤツは、よつぽど気に入つて 出掛けたときの、そのときの少年の服装は、 なれた県庁所在地の小都会へ、中学校の入学試験を受けるために 夫に富み、 誰にも知られぬ、このやうな佗びしいおしやれは、年一年と工 着物の襟に覆ひかぶせてゐるのです。なんだか、よだれ 夏の開襟シヤツの襟を背広の上衣の襟の外側に出してか 村の小学校を卒業して馬車にゆられ汽車に乗り十 あはれに珍妙なもの その風 里は

るやうに、あやふく羽織つて、さうしてそれを小粋な業だと信じ 生きることのすべて、人生の目的全部がそれに尽きてゐました。 せられぬことを涙が出るほど口惜しく思ふのでした。『瀟洒、 くしてもらつて、嫂が笑ふと本気に怒り、少年の美学が誰にも解 編上のピカピカ光る黒い靴。それからマント。父はすでに歿し、 久留米絣に、白つぽい縞の、短い袴をはいて、それから長い靴下、 俗が、そつくり貴公子のやうに見えるだらうと思つてゐたのです。 マントは、わざとボタンを掛けず、小さい肩から今にも滑り落ち でした。少年は、嫂に怜悧に甘えて、むりやりシヤツの襟を大き 母は病身ゆゑ、少年の身のまはり一切は、やさしい嫂の心づくし 』少年の美学の一切は、それに尽きてゐました。いやいや、

津軽 10 た。 少年はすこし拍子抜けがしました。 やつぱり少年の生れ故郷と全く同じ、津軽弁でありましたので、 踏みこむのでしたから、少年にとつては一世一代の凝つた身なり か 十里も離れてゐないのでした。」 れども宿に落ちつき、その宿の女中たちの言葉を聞くと、ここも いたとたんに少年の言葉つきまで一変してしまつてゐたほどでし であつたわけです。興奮のあまり、その本州北端の一小都会に着 の本能といふものは、手本がなくても、おのづから発明するもの てゐました。どこから、そんなことを覚えたのでせう。おしやれ も知れません。ほとんど生れてはじめて都会らしい都会に足を かねて少年雑誌で習ひ覚えてあつた東京弁を使ひました。け 生れ故郷と、その小都会とは、

すると共に、 旅人にとつては、 道 どとさかんに船で交通をはじめて次第に栄え、外ヶ浜に於いて最 ざつと三百二十年ほど前である。当時、すでに人家が千軒くらゐ も殷賑の要港となり、 あつたといふ。それから近江、 .|函館との間の鉄道連絡船などの事に到つては知らぬ人もあるま この海岸の小都会は、 現 在戸数は二万以上、人口十万を越えてゐる様子であるが、 外ヶ浜奉行がその経営に着手したのは寛永元年である。 県庁所在地となつていまは本州の北門を守り、 あまり感じのいい町では無いやうである。たび 明治四年の廃藩置県に依つて青森県の誕生 青森市である。 越前、 越後、 津軽第一の海港にしよう 加賀、 能登、 若狭な

北海

たびの大火のために家屋が貧弱になつてしまつたのは致し方が無

12

津軽 何事 が いとしても、旅人にとつて、市の中心部はどこか、さつぱり見当 つかぬ気持で、そそくさとこの町を通り抜ける。けれども私は、 つかない様子である。 も旅人に呼びかけようとはしないやうである。 奇妙にすすけた無表情の家々が立ち並び、 旅人は、 落ち

この青森市に四年ゐた。さうして、その四箇年は、 たいへん重大な時期でもあつたやうである。 その頃の私の 私の生涯に於

に書かれてある。 生活に就いては、 「いい成績ではなかつたが、 「思ひ出」といふ私の初期の小説にかなり克明 私はその春、 中学校へ受験して合格

での毛布をよして羅紗のマントを洒落者らしくボタンをかけずに 私は、 新しい袴と黒い沓下とあみあげの靴をはき、いまま

前をあけたまま羽織つて、その海のある小都会へ出た。そして私 になることになつてゐたのである。 口にちぎれた古いのれんのさげてあるその家へ、私はずつと世話 のうちと遠い親戚にあたるそのまちの呉服店で旅装を解いた。入

時は銭湯へ行くのにも学校の制帽を被り、袴をつけた。そんな私 の姿が往来の窓硝子にでも映ると、私は笑ひながらそれへ軽く会 私 は何ごとにも有頂天になり易い性質を持つてゐるが、入学当

らたい公園で、浪の音や松のざわめきが授業中でも聞えて来て、 それなのに、 にあつて、 学校はちつとも面白くなかつた。 しろいペンキで塗られ、すぐ裏は海峡に面したひ 校舎は、 まちの

釈をしたものである。

14

津軽 あくびは大きいので職員室で評判である、とも言はれた。 くびをしたとか、さまざまな理由から罰せられた。授業中の私の ののちも私は色んな教師にぶたれた。にやにやしてゐるとか、あ その人であつただけに、私のこころはいつそう傷つけられ らう、と私に情ふかい言葉をかけて呉れ、私もうなだれて見せた 係りであつたが、お父さんがなくなつてよく勉強もできなかつた だといふのであつた。この教師は入学試験のとき私の口答試問の 廊下も広く教室の天井も高くて、私はすべてにいい感じを受けた んな莫迦げたことを話し合つてゐる職員室を、をかしく思つた。 のだが、そこにゐる教師たちは私をひどく迫害したのである。 私は入学式の日から、或る体操の教師にぶたれた。 私が生意気 私はそ た。

れた。 なに殴られてばかりゐると落第するにちがひない、と忠告して呉 服の袖で額の汗を拭いてゐたら、鼠色のびつくりするほど大きい り家路を急いだ。靴底を浪になめられつつ溜息ついて歩いた。 山の陰に呼んで、 私と同じ町から来てゐる一人の生徒が、或る日、 私は愕然とした。その日の放課後、 君の態度はじつさい生意気さうに見える、あん 私は海岸づたひにひと 私を校庭の砂

公園といふのは、合浦公園の事である。さうしてこの公園は、 とんど中学校の裏庭と言つてもいいほど、中学校と密着してゐ この中学校は、 いまも昔と変らず青森市の東端にある。ひらた

帆がすぐ眼の前をよろよろととほつて行つた。」

15 私は冬の吹雪の時以外は、学校の行き帰り、この公園を通り

津軽 16 抜け、 いてゐない。 海岸づたひに歩いた。 私には、この裏路が、 謂はば裏路である。あまり生徒が歩 すがすがしく思はれた。

0)

朝は、

殊によかつた。

なほまた、

私の世話になつた呉服店とい

初夏

父さんに実の子以上に大事にされた。忘れる事が出来ない。 老舗である。ここのお父さんは先年なくなられたが、 ふのは、 寺町の豊田家である。二十代ちかく続いた青森市屈指の 私はこのお この

てもらふならはしである。 お父さんのお墓へおまゐりして、さうして必ず豊田家に宿泊させ 二、三年来、 私が三年生になつて、春のあるあさ、 私は青森市へ二、三度行つたが、その度毎に、 登校の道すがらに朱で染 この

めた橋のまるい欄干へもたれかかつて、

私はしばらくぼんやりし

てゐた。

橋の下には隅田川に似た広い川がゆるゆると流れてゐた。

れるかしら。

津軽

ふ脅迫めいた考へからであつたが、じじつ私は勉強してゐたので なにはさてお前は衆にすぐれてゐなければいけないのだ、とい (中略

そのやうな嘲りを受けなかつた許りか、級友を手ならす術まで心 ある。三年生になつてからは、いつもクラスの首席であつた。て んとりむしと言はれずに首席となることは困難であつたが、 私は

教室の隅に紙屑入の大きな壺があつて、私はときたまそれを指さ 得てゐた。蛸といふあだなの柔道の主将さへ私には従順であつた。 蛸、つぼへはひらないかと言へば、蛸はその壺へ頭をいれ

て笑ふのだ。笑ひ声が壺に響いて異様な音をたてた。クラスの美

つそ死んでやつたらと思ふことさへあつた。私の顔に就いてのう

誰も可笑しがらなかつた程なのである。 形や六角形や花の形に切つた絆創膏をてんてんと貼り散らしても 少年たちもたいてい私になついてゐた。私が顔の吹出物へ、三角

れたふうにして言はなければいけなかつたのである。 出物を欲情の象徴と考へて眼の先が暗くなるほど恥しかつた。い いのである。私はそれを薬屋へ買ひに行くときには、 の有様をしらべた。いろいろな薬を買つてつけたが、ききめがな よ数も殖えて、毎朝、 薬の名を書いて、こんな薬がありますかつて、と他人から頼ま 私はこの吹出物には心をなやまされた。そのじぶんにはいよい 眼をさますたびに掌で顔を撫でまはしてそ 紙きれへそ 私はその吹

津軽 いちばん上の姉は、 治のところへは嫁に来るひとがあるま

とまで言つてゐたさうである。

私はせつせと薬をつけた。

弟も私の吹出物を心配して、なんべんとなく私の代りに薬を買

が中学へ受験する折にも、 S に行つて呉れた。私と弟とは子供のときから仲がわるくて、弟 かうしてふたりで故郷から離れて見ると、 私にも弟

気質がだんだん判つて来たのである。弟は大きくなるにつれて無 口で内気になつてゐた。私たちの同人雑誌にもときどき小品文を 私は彼の失敗を願つたほどであつたけ のよい

学校の成績がよくないのを絶えず苦にしてゐて、私がなぐさめで 出してゐたが、みんな気の弱々した文章であつた。私にくらべて

て聞 糸がむすばれてゐて、それがするすると長く伸びて一方の端がき 話合つた。 峡を渡つてくるいい風にはたはたと吹かれながら赤い糸について どちらかであつたのである。私たちはなんでも打ち明けて話した。 がせまいから頭がこんなに悪いのだと固く信じてゐたのである。 富士のかたちになつて女みたいなのをいまいましがつてゐた。 ときには、 私はこの弟にだけはなにもかも許した。 もするとかへつて不気嫌になつた。 秋のはじめの或る月のない夜に、 かせたことであつて、私たちの右足の小指に眼に見えぬ赤い それはいつか学校の国語の教師が授業中に生徒へ語つ みんな押し隠して了ふか、みんなさらけ出して了ふか、 私たちは港の桟橋へ出て、 また、 私はその頃、人と対する 自分の額の生えぎはが

津軽 あるいてる、ときまり悪げに言つた。大きい庭下駄をはいて、 をした。お前のワイフは今ごろどうしてるべなあ、と弟に聞いた 私たちはその夜も、波の音や、かもめの声に耳傾けつつ、その話 るのである。私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮 ふたりがどんなに離れてゐてもその糸は切れない、どんなに近づ して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた。 い、さうして私たちはその女の子を嫁にもらふことにきまつてゐ いても、たとひ往来で逢つても、その糸はこんぐらかることがな つと或る女の子のおなじ足指にむすびつけられてゐるのである。 弟は桟橋のらんかんを二三度両手でゆりうごかしてから、 庭 寸

月見草を眺めてゐる少女は、いかにも弟と似つかは

る 色いあかりをともして、 に注ぐ。川といふものは、 で埋つて景色どころではない。 二人でこの桟橋に行つた。深い港の海に、雪がひそひそ降つてゐ この桟橋に行く事を好んだ。冬、雪の降る夜も、傘をさして弟と つて来る連絡船が、大きい宿屋みたいにたくさんの部屋部屋へ黄 つたまま、赤い帯しめての、とだけ言つて口を噤んだ。 しく思はれた。 のはいいものだ。最近は青森港も船舶輻湊して、 ふのは、 この弟は、それから二、三年後に死んだが、当時、 青森市の東部を流れる堤川の事である。すぐに青森湾 私のを語る番であつたが、私は真暗い海に眼をや ゆらゆらと水平線から浮んで出た。」 海に流れ込む直前の一箇所で、奇妙に それから、 隅田川に似た広い川 この桟橋も船 私たちは、 海峡を渡

津軽 0) ||躇して逆流するかのやうに流れが鈍くなるものである。 い流れを眺めて放心した。きざな譬へ方をすれば、 私 私はそ の青春

も川 るであらう。青森に就いての思ひ出は、だいたいそんなものだが、 年間は、 から海へ流れ込む直前であつたのであらう。 その故に、私にとつて忘れがたい期間であつたとも言へ 青森に於ける 兀

け 次のやうな一節がある。 れられない土地である。 この青森市から三里ほど東の浅虫といふ海岸の温泉も、 「秋になつて、私はその都会から汽車で三十分くらゐかかつて行 る海岸の温泉地へ、弟をつれて出掛けた。そこには、 やはりその「思ひ出」といふ小説の中に 私には忘 私 の母と

病後

の末の姉とが家を借りて湯治してゐたのだ。

私はずつとそこ

私は、 が満ちて陸つづきだつた筈のその岩が、いつか離れ島になつてゐ さへ、葡萄酒をのんだ。弟は声もよくて多くのあたらしい歌を知 必ずピクニツクにでかけた。海岸のひらたい岩の上で、肉鍋をこ らぬ名誉のために、どうしても、中学四年から高等学校へはひつ へて歌つた。遊びつかれてその岩の上で眠つて、眼がさめると潮 つてゐたから、私たちはそれらを弟に教へてもらつて、 かよつた。日曜毎に友人たちが遊びに来るのだ。私は友人たちと になつて、いつそうひどかつたのであるが、何かに追はれてゐる て見せなければならなかつたのである。私の学校ぎらひはその頃 へ寝泊りして、受験勉強をつづけた。私は秀才といふぬきさしな それでも一途に勉強してゐた。私はそこから汽車で学校へ 声をそろ

津軽 26 ある。 るので、 いよいよ青春が海に注ぎ込んだね、と冗談を言つてやりたいと 私たちはまだ夢から醒めないでゐるやうな気がするので

それは当然の事で、決してとがむべきではないが、それでゐて、 井の中の蛙が大海を知らないみたいな小さい妙な高慢を感じて閉

旅館は、必ずしもよいとは言へない。寒々した東北の漁村の趣は、

ころでもあらうか。この浅虫の海は清冽で悪くは無いが、しかし、

口したのは私だけであらうか。自分の故郷の温泉であるから、 思

泉地に泊つた事はないけれども、宿賃が、おやと思ふほど高くな ゐるやうな、妙な不安が感ぜられてならない。 ひ切つて悪口を言ふのであるが、田舎のくせに、どこか、すれて 私は最近、この温

る。 ゐるだけで、 の家々を眺め、さうして貧しい芸術家の小さい勘でものを言つて に酔はせた事があるのではあるまいかといふ疑惑がちらと脳裡を この寒々した温泉地を奇怪に高ぶらせ、 つつましい保養の町として出発し直してゐるに違ひないと思はれ の直覚など信じないはうがいいかも知れない。 の直覚を読者に押しつけたくはないのである。 に於いてここに宿泊した事は無く、ただ汽車の窓からこの温泉町 かつたら幸ひである。これは明らかに私の言ひすぎで、 河 原の宿もまたまさにかくの如きかと、茅屋にゐて浅墓の幻影 青森市の血気さかんな粋客たちが、 他には何の根拠も無いのであるから、 宿の女将をして、 或る時期に於いて、 むしろ読者は、 浅虫も、 私は自分のこ 私は最近

私

28

かすめて、

津軽 だけ 出 津 の温泉地を汽車で通過しながら、 軽に於いては、 の話なのである。 旅のひねくれた貧乏文士は、 浅虫温泉は最も有名で、 敢へて下車しなかつたといふ 最近たびたび、この思ひ つぎは大鰐温泉とい

の県境に近いところに在つて、 ふ事になるのかも知れない。大鰐は、 温泉よりも、 津軽の南端に近く、 スキイ場のために日 秋田と

0) 津 本 |軽藩 温泉地へも、しばしば湯治に来たので、 中に知れ渡つてゐるやうである。 の歴史のにほひが幽かに残つてゐた。 山麓の温泉である。ここには、 私も少年の頃あそびに 私の肉親たちは、

虫のかずかずの思ひ出は、 鮮やかであると同時に、 その思ひ出の

浅虫ほど鮮明な思ひ出は残つてゐない。

けれども、

つたが、

か。 思はれぬ。さらにまた、最後のたのみの大綱は、ここから三里北 ろがあつて、そこは旧藩時代の津軽秋田間の関所で、 やうに都会の残杯冷炙に宿酔してあれてゐる感じがするであらう 相違ないのだから、そんなに易々と都会の風に席巻されようとは この辺には史蹟も多く、昔の津軽人の生活が根強く残つてゐるに のみの綱である。また、この温泉のすぐ近くに碇ヶ関といふとこ 東京方面との交通の便は甚だ悪い。そこが、まづ、私にとつてた 二十年ちかくも大鰐温泉を見ないが、いま見ると、やはり浅虫の 出は霞んではゐても懐しい。海と山の差異であらうか。私はもう、 ことごとくが必ずしも愉快とは言へないのに較べて、大鰐の思ひ 私には、それは、あきらめ切れない。ここは浅虫に較べて、

方に弘前城が、

いまもなほ天守閣をそつくり残して、

年々歳々、

津軽 城 陽 が 春 控 には桜花に包まれその健在を誇つてゐる事である。 へてゐる限り、 大鰐温泉は都会の残瀝をすすり悪酔ひする この 弘前

は、 将軍宣下と共に、 などの事はあるまいと私は思ひ込んでゐたいのである。 弘前城。 関 ケ原の合戦に於いて徳川方に加勢し、 ここは津軽藩の歴史の中心である。 徳川幕下の四万七千石の一侯伯となり、 慶長八年、 津軽藩祖大浦為信 徳川家康 ただち

石に分家させて、弘前、 り代々の藩主この弘前城に拠り、 弘前高 やうやく完成を見たのが、この弘前城であるといふ。 .岡に城池の区劃をはじめて、二代藩主津軽信牧の時 黒石の二藩にわかれて津軽を支配し、 四代信政の時、 一族の信英を黒 それよ に . 到 元

結ぶ事にする。

弘前 は、 ると共にまた、 飢饉は津軽一 禄 ここに現在の青森県が誕生したといふ経緯は、 を脱し、 に藩勢の回復をはかり、十一代順承の時代に到つてからくも危機 極度に達し、 面目をあらたにしたけれども、七代信寧の宝暦ならびに天明の大 七名君の中の巨擘とまでうたはれた信政の善政は大いに津軽の に就 ま た後のペエジに於いて詳述するつもりであるが、 いての私の昔の思ひ出を少し書いて、 つづいて十二代承昭の時代に、めでたく藩籍を奉還し、 前途暗澹たるうちにも、 円を凄惨な地獄と化せしめ、 津軽の歴史の大略でもある。 八代信明、 藩の財政もまた窮乏の 津軽の歴史に就いて この津軽の序編を 弘前城の歴史であ 九代寧親は必死 ま

坂、 師匠 科に三年ゐたのであるが、その頃、 何やら、 それから紙治など一とほり当時は覚え込んでゐたのである。 の家へ立寄つて、さいしよは朝顔日記であつたらうか、 甚だ異様なものであつた。学校からの帰りには、 いまはことごとく忘れてしまつたけれども、 私は大いに義太夫に凝つてゐ 弘前高等学校の文 義太夫の女 野崎村、 何が 壺

どうしてそんな、がらにも無い奇怪な事をはじめたのか。 の責任の全部を、 その責任の一斑は弘前市に引受けていただきたいと思つてゐ この弘前市に負はせようとは思はないが、しか 私 にはそ

る。

義太夫が、不思議にさかんなまちなのである。ときどき素人

まちの劇場でひらかれる。

私も、

いちど聞き

の義太夫発表会が、

ゐてゐる抜け目のない人さへあるらしく、つまらない芸事に何と 者たちから、 も気障なところが無く、 に行つたが、まちの旦那たちが、ちやんと裃を着て、 のである。 この弘前市には、 旦那は、 いふ事もなく馬鹿な大汗をかいて勉強致してゐるこの様な可憐な てゐる。 太夫を唸つてゐる。いづれもあまり、上手ではなかつたが、少し または、 青森市にも昔から粋人が少くなかつたやうであるが、 弘前市の方に多く見かけられるやうに思はれる。 永慶軍記といふ古書にも、 自分の粋人振りを政策やら商策やらの武器として用 兄さんうまいわね、と言はれたいばかりの端唄の稽 未だに、ほんものの馬鹿者が残つてゐるらしい 頗る良心的な語り方で、大真面目に唸つ 「奥羽両州の人の心、愚に 真面目に義 つまり、

津軽 賤しきものなるぞ、ただ時の武運つよくして、威勢にほこる事に 威強き者にも随ふ事を知らず、彼は先祖の敵なるぞ、 是は

して世のもの笑ひになるといふ傾向があるやうだ。 私もまた、こ

弘前の人には、そのやうな、ほんものの馬鹿意地があつて、負け

随はず。」といふ言葉が記されてゐるさうだが、

こそあれ、とて、

ても負けても強者にお辞儀をする事を知らず、自矜の孤高を固守

こに三年ゐたおかげで、ひどく懐古的になつて、 義太夫に熱中し

づこんなものであつた、と苦笑しながら白状せざるを得ないので 次の文章は、私の昔の小説の一節であつて、やはりおどけた虚構 には違ひないのであるが、しかし、凡その雰囲気に於いては、 てみたり、また、次のやうな浪曼性を発揮するやうな男になつた。

ある。

烹店へ、二度、三度、ごはんを食べに行つてゐるうちに、少年の お洒落の本能はまたもむつくり頭をもたげ、こんどは、それこそ 高尚な趣味であると信じてゐました。城下まちの、古い静かな割 を食べることなど覚えたのです。少年はそれを別段、 うちに割烹店へ、のこのこはひつていつて芸者と一緒に、ごはん ねえさん、けふはめつぽふ、きれえぢやねえか、などと言つてみ 大変なことになりました。芝居で見た『め組の喧嘩』の鳶の者の とも思ひませんでした。粋な、やくざなふるまひは、つねに最も 「喫茶店で、葡萄酒飲んでゐるうちは、よかつたのですが、その 割烹店の奥庭に面したお座敷で大あぐらかき、おう、 わるいこと

津軽 36 紺の腹掛。 ワクワクしながら、その服装の準備にとりかかりました。 あれは、すぐ手にはひりました。あの腹掛のドンブリ

だか、 に、 しらへてもらひました。鳶の者だか、ばくち打ちだか、お店ものたな 博多の帯です。 唐 桟 の単衣を一まい呉服屋さんにたのんで、こ くざに見えます。角帯も買ひました。締め上げるときゆつと鳴る 古風な財布をいれて、かう懐手して歩くと、いつぱしの、や わけのわからぬ服装になつてしまひました。 統一が無いの

です。 素足に麻裏草履をはきました。そこまではよかつたのですが、ふ だつたら、少年はそれで満足なのでした。初夏のころで、少年は と少年は妙なことを考へました。それは股引に就いてでありまし とにかく、芝居に出て来る人物の印象を与へるやうな服装 ろで、少年は、汗だくで捜し廻り、たうとう或る店の主人から、 あの左官屋さんなんか、はいてゐるぢやないか、ぴちつとした紺 から端まで走り廻りました。どこも無いのです。あのね、ほら、 と言つて、ぱつと裾をさばいて、くるりと尻をまくる。あのとき ゐるやうですけれど、あれを欲しいと思ひました。ひよつとこめ、 と店の人たち笑ひながら首を振るのでした。もう、だいぶ暑いこ の股引さ、あんなの無いかしら、ね、と懸命に説明して、呉服屋 いけません。少年は、その股引を買ひ求めようと、城下まちを端 に紺の股引が眼にしみるほど引き立ちます。さるまた一つでは、 紺の木綿のピツチリした長股引を、芝居の鳶の者が、はいて 足袋屋さんに聞いて歩いたのですが、さあ、あれは、いま、

津軽 れてありました。纏もあります。なんだか心細くなつて、それで 即座に答へて持つて来たものは、紺の木綿の股引には、ちがひ無 も勇気を鼓舞して、股引ありますか、と尋ねたら、あります、と た横丁の店に飛び込みました。店には大小の消火ポンプが並べら で言へば消防だ、なるほど道理だ、と勢ひ附いて、その教へられ とは気がつかなかつた。鳶の者と言へば、火消しのことで、いま たらわかるかも知れません、といいこと教へられ、なるほど消防 の家がありますから、そこへ行つてお聞きになると、 それは、 けれども、股引の両外側に太く消防のしるしの赤線が縦にずん うちにはございませぬが、 横丁まがると消防のもの専門 ひよつとし

と引かれてゐました。流石にそれをはいて歩く勇気も無く、少年

榎小路、 小路、 この、 浜町である。その名に個性がないやうに思はれる。 るから、 に相当する青森の商店街は、大町と呼ばれてゐる。 も繁華な商店街である。それらに較べると、青森の花街の名は、 かも知れない。書き写しながら作者自身、すこし憂鬱になつた。 に汗だくで歩き廻つたところは、 さすがの馬鹿の本場に於いても、これくらゐの馬鹿は少かつた 芸者たちと一緒にごはんを食べた割烹店の在る花街を、榎 とは言はなかつたかしら。何しろ二十年ちかく昔の事であ といふところだつたと覚えてゐる。また、 記憶も薄くなつてはつきりしないが、お宮の坂の下の、 土手町といふ城下に於いて最どて 紺の股引を買 これも同様の 弘前の土手町

思はれる。ついでだから、

弘前の町名と、

青森の町名とを

津軽

次に 屋町、 師 きりし 町、 列記してみよう。 て来るかも知れない。 銅屋町、 鉄砲町、 若党町、 茶畑町、 この二つの小都会の性格の相違が 小人町、 代官町、 本町、 萱町、 鷹匠町、 在府町、 百石町、 五十石町、 土手町、 上鞘師町、 紺屋町、 住吉町、 案 外は 下 な 鞘 桶

々の名は、 次のやうなものである。 浜 町、 新浜町、 大町、 米町

どといふのが弘前市の街の名である。それに較べて、

青森市

0

街

栄町。 新 町、 け れども私は、 柳 町、 寺町、 弘前 堤町、 市を上等のまち、 塩町、 蜆貝町、 青森市を下等の町だと思 新蜆貝町、 浦 町、 浪打、

つてゐるのでは決してない。 鷹匠町、 紺屋町などの懐古的な名前

く見えるんだ。自惚れちやいけないぜ。」 あの山は、ざらにあら。 の名手、 青森市の八甲田山よりも秀麗である。けれども、津軽出身の小説 必ず、そんな名前の町があるものだ。なるほど弘前市の岩木山は、 たくさんあるのに、どうして弘前の城下町の人たちは、 山の周囲に高い山が無いからだ。他の国に行つてみろ。あれくら は何も弘前市にだけ限つた町名ではなく、日本全国の城下まちに 「自惚れちやいけないぜ。 歴史を有する城下町は、日本全国に無数と言つてよいくらゐに 葛西善蔵氏は、 周囲に高い山がないから、あんなに有難 郷土の後輩にかう言つて教へてゐる。 岩木山が素晴らしく見えるのは、 あんなに

41 依怙地にその封建性を自慢みたいにしてゐるのだらう。ひらき直

津軽 か をそびやかしてゐる。さうして、どんなに勢強きものに対しても、 藩 が出たか。 にこそあれ、とて、随はぬのである。この地方出身の陸軍大将一 ゐのものなのだ。全国に誇り得るどのやうな歴史を有してゐるの この津軽地方などは、 つて言ふまでも無い事だが、九州、 れは賤しきものなるぞ、ただ時の運つよくして威勢にほこる事 の驥尾に附して進退しただけの事ではなかつたか。どこにいつ 誇るべき伝統があるのだ。けれども弘前人は頑固に何やら肩 近くは明治御維新の時だつて、この藩からどのやうな勤皇家 藩の態度はどうであつたか。露骨に言へば、ただ、他 ほとんど一様に新開地と言つてもいいくら 西国、大和などに較べると、

戸兵衛閣下は、

帰郷の時には必ず、

和服にセルの袴であつたとい

葉」を求められて、 出来ずにゐるのだ。 な仕末のわるい骨が一本あつて、そのためばかりでもなからうが、 らぬ稜々たる反骨があるやうだ。 運つよくして、などと言ふのがわかつてゐたから、 の時は和服にセルの袴ときめて居られたといふやうな話を聞 はすくさま目をむき肘を張り、彼なにほどの者ならん、ただ時の ふ話を聞いてゐる。 ないと思はれるほど、弘前の城下の人たちには何が何やらわか 全部が事実で無いとしても、このやうな伝説が起るのも無理 おかげで未だにその日暮しの長屋住居から浮かび上る事が 将星の軍装で帰郷するならば、 その返答に曰く、 数年前、 私は或る雑誌社から「故郷に贈る言 何を隠さう、実は、 賢明に、 郷里の者たち 私にもそん

帰郷

津軽

44 汝を愛し、汝を憎む。

々、 だいぶ弘前の悪口を言つたが、これは弘前に対する憎悪ではな 津軽藩の百姓であつた。 作者自身の反省である。 謂はば純血種の津軽人である。だか 私は津軽の人である。 私の先祖は代

を見くびつたら、私はやつぱり不愉快に思ふだらう。なんと言つ ら少しも遠慮無く、このやうに津軽の悪口を言ふのである。 の人が、もし私のこのやうな悪口を聞いて、さうして安易に津軽 他国

ても、 弘前市。 私は津軽を愛してゐるのだから。 現在の戸数は一万、人口は五万余。

弘前城と、

最勝院

日本一と田山花袋が折紙をつけてくれてゐるさうだ。 の五重塔とは、 国宝に指定せられてゐる。桜の頃の弘前公園は、 弘前師団の

過し、 ばかりである。私はこの旧津軽藩の城下まちに、こだはりすぎて けなかつたひどい悪口など出て来て、作者みづから途方に暮れる らしむるものを描写したかつたのであるが、どれもこれも、たわ うな事が書かれてある。けれども私は、 これと年少の頃の記憶をたどり、何か一つ、弘前の面目を躍如た て、それだけでは、どうしても不服なのである。それゆゑ、あれ りに参詣する人、数万、参詣の行き帰り躍りながらこのまちを通 月一日に到る三日間、津軽の霊峰岩木山の山頂奥宮に於けるお祭 司令部がある。お山参詣と言つて、毎年陰暦七月二十八日より八 無い思ひ出ばかりで、うまくゆかず、たうとう自分にも思ひが まちは殷賑を極める。 旅行案内記には、まづざつとそのや 弘前市を説明するに当つ

46

津軽 ば ゐるのだ。ここは私たち津軽人の窮極の魂の拠りどころでなけれ ならぬ筈なのに、どうも、それにしては、

花に包まれた天守閣は、 だけでは、この城下まちの性格が、 何も弘前城に限つた事ではない。日本全 まだまだあいまいである。 私のこれまでの説明 桜

包まれた天守閣が傍に控へてゐるからとて、大鰐温泉が津軽の匂 国たいていのお城は桜花に包まれてゐるではないか。その桜花に

ひを保守できるとは、きまつてゐないではないか。 弘前城が

らしない感傷にすぎないやうな気がして来て、 いろ考へて、考へつめて行くと、それもただ、 あるまい、とついさつき、ばかに調子づいて書いた筈だが、いろ てゐる限り、大鰐温泉は都会の残瀝をすすり悪酔するなどの 作者の美文調のだ 何もかも、 事は

たより

は、 旧藩 く下手な文章ながら、 歯がゆいのである。 けではない。 新興のまちに奪はれてゐる。日本全国、たいていの県庁所在地は、 だらしないのだ。 とさへ私は思つてゐる。 に持つて行かざるを得なかつたところに、 である。 ただ、この弘前市の負けてゐながら、 の城下まちである。 心細くなるばかりである。いつたいこの城下まちは、 私は何とかして弘前市の肩を持つてやりたく、 新興のまちの繁栄を見るのも、また爽快である。 旧藩主の代々のお城がありながら、県庁を他の 負けてゐるものに、 あれこれと工夫して努めて書いて来たので 私は決して青森市を特にきらつてゐるわ 青森県の県庁を、 加勢したいのは自然の人 青森県の不幸があつた のほほん顔でゐるのが 弘前市でなく、 青森市 まつた

私

津軽

この、 生だつた私は、ひとりで弘前城を訪れ、お城の広場の一隅に立つ はつきりこれと読者に誇示できないのが、くやしくてたまらない。 どころである。 に予感してゐるのであるが、それが何であるか、形にあらはして、 事はつひに出来なかつた。 つからぬ特異の見事な伝統がある筈である。私はそれを、たしか あれは春の夕暮だつたと記憶してゐるが、 もどかしさ。 木山を眺望したとき、ふと脚下に、夢の町がひつそりと展 何かある筈である。日本全国、どこを捜しても見 重ねて言ふ。ここは津軽人の魂の 弘前高等学校の文科 拠 ij

開してゐるのに気がつき、ぞつとした事がある。

私はそれまで、

かり

弘前を、 はず深い溜息をもらしたのである。万葉集などによく出て来る を並べ、 まで見た事もない古雅な町が、何百年も昔のままの姿で小さい軒 にならぬかも知れないが、弘前城はこの隠沼を持つてゐるから稀 もまた私の、いい気な独り合点で、読者には何の事やらおわ 弘前は決して凡庸のまちでは無いと思つた。とは言つても、これ んなところにも町があつた。年少の私は夢を見るやうな気持で思 り思つてゐたのだ。けれども、見よ、お城のすぐ下に、 この弘前城を、 「隠 沼」といふやうな感じである。私は、こもりぬ 息をひそめてひつそりうずくまつてゐたのだ。 津軽を、 弘前のまちのはづれに孤立してゐるものだとばか 理解したやうな気がした。 なぜだか、その時、 この町の在る限 ああ、 私のいま

津軽 お 試 事 無言で立つてゐるとしたら、その城は必ず天下の名城にちが 代の名城なのだ、といまになつては私も強引に押切るより他はな いみて、 のか、 の 原、 る事も容易に出来る業ではない。 は無いであらうと、ちかごろの言葉で言へば「希望的観測」を さうして、その名城の傍の温泉も、 れ 隠 |沼のほとりに万朶の花が咲いて、さうして白壁の天守閣 の肉親を語る事が至難な業であると同様に、 森、 私はこの愛する弘前城と訣別する事にしよう。 わからない。 弘前、 浅虫、大鰐に就いて、 私はこの津軽の序編に於いて、 ほめていいのか、 永遠に淳朴の気風を失ふ 私の年少の頃の思ひ出 故 金木、 けなしてい 郷 思へば、 の核心を ひな 五所

を展開しながら、

また、

身のほど知らぬ冒涜の批評の蕪辞をつら

け 定した町であるから、 過去に於いて最も私と親しく、 当るべき暴言を吐いてゐるかも知れない。この六つの町は、 ねたが、 て適任者ではなかつたといふ事を、いま、はつきり自覚した。以 ころがあるかも知れない。これらの町を語るに当つて、 それを考へると、おのづから憂鬱にならざるを得ない。 或るとしの春、 たい気持である。 本編に於いて私は、この六つの町に就いて語る事は努めて避 果して私はこの六つの町を的確に語り得たか、 私は、 私は、 かへつて私はこれらの町に就いて盲目なと 生れてはじめて本州北端、 他の津軽の町を語らう。 私の性格を創成し、 津軽半島を凡 私の宿命を規 罪万死に 私は決し

私の

51 そ三週間ほどかかつて一周したのであるが、といふ序編の冒頭の

津軽 52 文章に、 いよいよこれから引返して行くわけであるが、 私はこの

旅行に依つて、 つたのである。小学校の頃、遠足に行つたり何かして、 である。 の幾つかの部落を見た事はあつたが、それは現在の私に、なつ それまでは私は、本当に、 まつたく生れてはじめて他の津軽の町村を見たの あの六つの町の他は知らなか 金木の近

か 暑中休暇には、金木の生家に帰つても、 しい思ひ出として色濃く残つてはゐないのである。 二階の洋室の長椅子に寝 中学時代の

高等学校時代には、 を手当り次第に読み散らして暮し、どこへも旅行に出なかつたし、 ころび、 サイダーをがぶがぶラツパ飲みしながら、 休暇になると必ず東京の、 すぐ上の兄(この 兄たちの蔵書

兄は彫刻を学んでゐたが、二十七歳で死んだ)その兄の家へ遊び

行は、 きり十年も故郷へ帰らなかつたのであるから、このたびの津軽旅 に行つたし、 私にとつて、なかなか重大の事件であつたと言はざるを得 高等学校を卒業と同時に東京の大学へ来て、それつ

ない。

政、 りの意見は避けたいと思ふ。私がそれを言つたところで、 しく知 夜勉強の恥づかしい軽薄の鍍金である。それらに就いて、 私はこのたびの旅行で見て来た町村の、 沿革、 りたい人は、 教育、 衛生などに就いて、専門家みたいな知つたかぶ その地方の専門の研究家に聞くがよい。 地勢、 地質、 天文、 所詮は、 私に くは

呼んでゐる。人の心と人の心の触れ合ひを研究する科目である。

また別の専門科目があるのだ。

世人は仮りにその科目を愛と

私はこのたびの旅行に於いて、主としてこの一科目を追及した。

54

津軽

どの部門から追及しても、結局は、

津軽の現在生きてゐる姿を、

昭和の津軽風土記とし

そのまま読者に伝へる事が出来たならば、

て、

まづまあ、及第ではなからうかと私は思つてゐるのだが、

それが、うまくゆくといいけれど。

巡礼

ね、 「苦しいからさ。」 なぜ旅に出るの?」

55

「正岡子規三十六、尾崎紅葉三十七、斎藤緑雨三十八、 あなたの(苦しい)は、 おきまりで、ちつとも信用できません

国木田独

歩三十八、

長塚節三十七、芥川龍之介三十六、嘉村礒多三十七。」

「それは、

何の事なの?」

津軽 「あいつらの死んだとしさ。ばたばた死んでゐる。 おれもそろそ

ん大事で、」 ろ、そのとしだ。作家にとつて、これくらゐの年齢の時が、一ば

「さうして、苦しい時なの?」

「何を言つてやがる。ふざけちやいけない。お前にだつて、少し

気障になる。おい、おれは旅に出るよ。」 わかつてゐる筈たがね。もう、これ以上は言はん。言ふと、

気障な事のやうに思はれて、(しかも、 私もいい加減にとしをとつたせゐか、 それは、たいていありふ 自分の気持の説明などは、

れた文学的な虚飾なのだから)何も言ひたくないのである。

れ から言はれてゐたし、 た地方の隅々まで見て置きたくて、或る年の春、 津軽の事を書いてみないか、と或る出版社の親しい編輯者に前 私も生きてゐるうちに、いちど、 乞食のやうな 自分の生

姿で東京を出発した。

奉 観的の意味で使用したのであるが、しかし、客観的に言つたつて、 仕の作業服があるだけである。 五. り立派な姿ではなかつた。 月中旬の事である。乞食のやうな、といふ形容は、 私には背広服が一着も無い。 それも仕立屋に特別に注文して 多分に主 勤

紺色に染めて、ジヤンパーみたいなものと、ズボンみたいなもの

作らせたものではなかつた。有り合せの木綿の布切を、

家の者が

津軽 ある。 母 ば似合はない。私はそのむらさきの作業服に緑色のスフのゲート から仙台平の袴を忍ばせてゐた。いつ、どんな事があるかもわか めての事であつた。けれども流石に背中のリユツクサツクには、 テニス帽。 ルをつけて、ゴム底の白いズツクの靴をはいた。 色になつた。むらさきの洋装は、女でも、よほどの美人でなけれ 二度着て外へ出たら、 にでつち上げた何だか合点のゆかない見馴れぬ型の作業服なので の形見を縫ひ直して仕立てた縫紋の一重羽織と大島の袷、 染めた直後は、 あの洒落者が、こんな姿で旅に出るのは、 たちまち変色して、 布地の色もたしかに紺であつた筈だが、 むらさきみたいな妙な 帽子は、スフの 生れ てはじ それ

らない。

る。 行はここだ、と自分に言ひ聞かせてみたけれども、 さくちぢめて、それこそ全く亀縮の形で、ここだ、 すでに、セルの単衣を着て歩いてゐる気早やな人もあつたのであ 騒いでゐる。私にも、この寒さは意外であつた。東京ではその頃 来てゐる人さへ、寒い、今夜はまたどうしたのかへんに寒い、と 下には、パンツだけだ。冬の外套を着て、膝掛けなどを用意して 共に、ひどく寒くなつて来た。私は、そのジヤンパーみたいなも よいよ寒く、心頭滅却の修行もいまはあきらめて、 のの下に、薄いシヤツを二枚着てゐるだけなのである。ズボンの 十七時三十分上野発の急行列車に乗つたのだが、夜のふけると 私は、東北の寒さを失念してゐた。私は手足を出来るだけ小 ああ早く青森 暁に及んでい 心頭滅却 の修

津軽 60 に着いて、どこかの宿で炉辺に大あぐらをかき、 熱燗のお酒を飲

青森には、 みたい、 と頗る現実的な事を一心に念ずる下品な有様となつた。 朝の八時に着いた。 T君が駅に迎へに来てゐた。

「和服でおいでになると思つてゐました。」

前もつて手紙で知らせて置いたのである。

「そんな時代ぢやありません。」私は努めて冗談めかしてさう言

T君は、 女のお子さんを連れて来てゐた。ああ、このお子さん

にお土産を持つて来ればよかつたと、その時すぐに思つた。 「とにかく、私の家へちよつとお寄りになつてお休みになつたら

?

な念願は、奇蹟的に実現せられた。T君の家では囲炉裏にかんか 家で一休みしたらいかがです。」 なつてゐるやうです。とにかく、蟹田行のバスが出るまで、 うと思つてゐるんだけど。」 ん炭火がおこつて、さうして鉄瓶には一本お銚子がいれられてゐ 「存じて居ります。Nさんから聞きました。Nさんも、お待ちに 「ありがたう。けふおひる頃までに、蟹田のN君のところへ行か 炉辺に大あぐらをかき熱燗のお酒を、といふ私のけしからぬ俗

私の

お辞儀をして、「ビールのはうが、いいんでしたかしら。」 「このたびは御苦労さまでした。」とT君は、あらたまつて私に

お酒が。」私は低く咳ばらひした。

津軽

されてゐた様子である。 その頃、 になつて昨年帰還し、 に勤めて、 のちT君は青森に出て来て勉強して、それから青森市の或る病院 り散らすところが、あれの悪いやうな善いやうなところだ。」と T君は昔、 私と同じとしだつたので、 祖母がT君を批評して言つたのを私は聞いて覚えてゐる。 患者からも、 私の家にゐた事がある。 病気をなほしてまた以前の病院につとめて 先年出征して、 また病院の職員たちからも、 仲良く遊んだ。「女中たちを呶鳴 おもに鶏舎の世話をしてゐ 南方の孤島で戦ひ、 かなり信頼 病気

ゐるのである。

戦地で一ばん、うれしかつた事は何かね。」

プに一ぱい飲んだ時です。大事に大事に少しづつ吸ひ込んで、途 てもコツプが唇から離れないのですね。どうしても離れないので 中でコツプを唇から離して一息つかうと思つたのですが、どうし 「それは、」T君は言下に答へた。「戦地で配給のビールをコツ

T君もお酒の好きな人であつた。けれども、いまは、少しも飲

まない。さうして時々、軽く咳をしてゐる。

を病んだ事があつて、こんどそれが戦地で再発したのである。 「どうだね、からだのはうは。」T君はずつと以前に一度、

でも病気でいちど苦しんでみなければ、わからないところがあり 「こんどは銃後の奉公です。病院で病人の世話をするには、自分

津軽

ます。こんどは、いい体験を得ました。」

てものは、」と私は、少し酔つて来たので、おくめんも無く医者 「さすがに人間ができて来たやうだね。じつさい、胸の病気なん

に医学を説きはじめた。「精神の病気なんだ。忘れちまへば、な

ほるもんだ。たまには大いに酒でも飲むさ。」 「ええ、まあ、ほどよくやつてゐます。」と言つて、笑つた。 私

の乱暴な医学は、本職にはあまり信用されないやうであつた。 「何か召上りませんか。青森にも、このごろは、おいしいおさか

なが少くなつて。」

「いや、ありがたう。」私は傍のお膳をぼんやり眺めながら、 「おいしさうなものばかりぢやないか。手数をかけるね。でも、

それは、 僕は、そんなにたべたくないんだ。」

ふものは、とかく滑稽な形であらはれがちのものである。東京の ささうに思はれるのだが、そこが男の意地である。 てゐるのである。 も似たあの馬鹿々々しい痩せ我慢の姿を滑稽に思ひながらも愛し せゐか、武士は食はねど高楊枝などといふ、ちよつとやけくそに 人の中には、意地も張りも無く、地方へ行つて、自分たちはいま 人は、どうも食ひ物をほしがりすぎる。私は自身古くさい人間の もなし、こんな事を言ふのは甚だてれくさいのであるが、東京の こんど津軽へ出掛けるに当つて、心にきめた事が一つあつた。 食ひ物に淡泊なれ、といふ事であつた。私は別に聖者で 何もことさらに楊枝まで使つてみせなくてもよ 男の意地とい

んで

食べて、 もを食べる事でせう、ついでに少し家へ持つて帰りたいのですけ おいもですか、そいつは有難い、幾月ぶりでこんなおいしいおい わけていただけませんでせうかしら、などと満面に卑屈 お追従たらたら、 何かもつと食べるものはありませんか、

京の人みなが、確実に同量の食料の配給を受けてゐる筈である。 の笑ひを浮べて歎願する人がたまにあるとかいふ噂を聞 1

その人ひとりが、特別に餓死せんばかりの状態なのは奇怪である。

みつともない。 お国のため、などと開き直つた事は言はずとも、

は胃拡張なのかも知れないが、とにかく食べ物の哀訴歎願は、

或

決意をひめて津軽へ来たのだ。もし、 料不足を訴へるので、地方の人たちは、東京から来た客人を、す 東京の少数の例外者が、地方へ行つて、ひどく出鱈目に帝都の食 はひどいつて話ぢやありませんか、としんからの好意を以て言つ このごはんは白米です、おなかが破れるほど食べて下さい、東京 のためにも、 と愛情の乞食だ、白米の乞食ではない! と東京の人全部の名誉 ではない。姿こそ、むらさき色の乞食にも似てゐるが、私は真理 つたといふ噂も聞いた。私は津軽へ、食べものをあさりに来たの べて食べものをあさりに来たものとして軽蔑して取扱ふやうにな いつの世だつて、人間としての誇りは持ち堪へてゐたいものだ。 演説口調できざな大見得を切つてやりたいくらゐの 誰か私に向つて、さあさ、

津軽 68 てくれても、私は軽く一ぱいだけ食べて、さうしてかう言はうと

があります。いつのまにやら胃腑が撤収して小さくなつてゐるの 思つてゐた。 副食物だつて、ちやうど無くなつたと思つた頃に、ちやんと配給 「なれたせゐか、東京のごはんのはうがおいしい。

で、少したべると満腹します。よくしたもんですよ。」

私は津軽のあちこちの知合ひの家を訪れたが、一人として私に、

けれども私のそんなひねくれた用心は、まつたく無駄であつた。

くれた人は無かつた。殊にも、私の生家の八十八歳の祖母などに 白いごはんですよ、腹の破れるほど食ひ溜めなさいなどと言つて

お前に、何かおいしいものを食べさせようと思つても困つてしま 至つては、「東京は、おいしいものが何でもあるところだから、

ふな。 それ以上私に食べものをすすめはしなかつたし、 どいてゐたので呆然とした。それは余談だが、とにかく、T君も れ 幸運を神に感謝した。あれも持つて行け、これも持つて行け、 ろ酒粕もとんと無いてば。」と面目なささうに言ふので、 で私は軽いリユツクサツクを背負つて気楽に旅をつづける事が出 私に食料品のお土産をしつこく押しつけた人も無かつた。おかげ でないおつとりした人たちとばかり逢つたのである。 幸福な気がした。 の旅先の優しい人たちからの小包が、私よりもさきに一 たのであるが、けれども帰京してみると、私の家には、 瓜の粕漬でも食べさせたいが、どうしたわけだか、 謂はば私は、食べ物などの事にはあまり敏感 東京の食べ物は 私は自分の ぱいと それぞ 私は実

津軽

んだ頃の思ひ出であつた。

つた、 どんな工合であるかなどといふ事は、一ぺんも話題にのぼらなか おもな話題は、やはり、むかし二人が金木の家で一緒に遊

失敬な、 「僕は、 いやみつたらしく気障つたらしい芝居気たつぷりの、 しかし君を、 親友だと思つてゐるんだぜ。」実に乱暴な、 思

かたが無いものか。 ひ上つた言葉である。 「それは、かへつて愉快ぢやないんです。」T君も敏感に察した 私は言つてしまつて身悶えした。他に言ひ

やうである。「私は金木のあなたの家に仕へた者です。さうして、

あなたは御主人です。さう思つていただかないと、私は、うれし くないんです。へんなものですね。あれから二十年も経つてゐま

船で懸命なのだ。 父さんのお墓におまゐりして、バスの発着所にいそいだ。どうだ に映つた出鱈目な印象を述べる事は慎しまう。 といふ話であつた。青森市の街路は白つぽく乾いて、いや、 んです。 すけれども、いまでもしよつちゆう金木のあなたの家の夢を見る バスの時間が来た。 お と思つて、はつと夢から醒める事があります。」 天気はいいし、それに、熱燗のお酒も飲んだし、寒いどこ 額に汗がにじみ出て来た。合浦公園の桜は、いま、満開だ 戦地でも見ました。鶏に餌をやる事を忘れた、しまつた 途中、 私はT君と一緒に外へ出た。 中学時代に私がお世話になつた豊田のお 青森市は、 もう寒くはな

いま造

君も一緒に蟹田へ行かないか、と昔の私ならば、気軽に言へ

津軽 した。 姿である。 年の大人に移行する第一課である。大人とは、裏切られた青年の 多すぎたからである。人は、あてにならない、といふ発見は、 その答は、なんでもない。見事に裏切られて、 守らなければならぬ。なぜ、用心深くしなければならぬのだらう。 よさう。つまり、お互ひ、大人になつたのであらう。大人といふ を覚えて来たせゐか、それとも、いや、気持のややこしい説明は たのでもあらうが、私も流石にとしをとつて少しは遠慮といふ事 ものは侘しいものだ。愛し合つてゐても、用心して、他人行儀を 私は黙つて歩いてゐた。突然、T君のはうから言ひ出 赤恥をかいた事が

「私は、 あした蟹田へ行きます。あしたの朝、一番のバスで行き

ます。Nさんの家で逢ひませう。」

「病院のはうは?」

「あしたは日曜です。」

なあんだ、さうか。 私たちには、まだ、 早く言へばいいのに。」 たわいない少年の部分も残つてゐた。

二蟹田

北上すると、 盛だつたところである。 津軽半島の東海岸は、 、 後 潟 に ろ い ろ が た 昔から外ヶ浜と呼ばれて船舶の往来の繁 青森市からバスに乗つて、 蓬田、蟹田、 平館、一本木、今たひらだて、 この東海岸を

津軽 的な事に就いての記述は、いつさい避けなければならぬ。 近、 それこそ、ぎりぎりの本州の北端である。けれども、この辺は最 にたどりつく。文字どほり、 波打際の心細い路を歩いて、 所要時間、 この外ヶ浜一帯は、 国防上なかなか大事なところであるから、 等の町村を通過し、 約四時間である。 義経の伝説で名高い三厩に到着する。 路の尽きる個所である。 三時間ほど北上すると、 三厩はバスの終点である。

里数その他、

具体

竜飛の部落

三厩から

ここの岬は、

も大きい部落なのだ。 るところなのである。さうして蟹田町は、 時間半、 とは言つてもまあ二時間ちかくで、この町に到着する。 青森市からバスで、 津軽地方に於いて、 後潟、 その外ヶ浜に於いて最 最も古い歴史の存す 蓬田を通り、 とにか

築物 る。 所謂、 代藩主信政の、 0) な て用ゐたさうで、 この蟹田の浜は、 蟹田警察署は、 はるかに越えてゐる様子である。 つまり外ヶ浜の部落全部が、ここの警察署の管轄区域になつてゐ ための大船五艘を、 竹内運平といふ弘前の人の著した「青森県通史」に依れば、 の一つであらう。 外ヶ浜の中央部である。戸数は一千に近く、人口は五千を 慶長年間、 元禄年間には、 外ヶ浜全線を通じていちばん堂々として目立つ建 また、 昔は砂鉄の産地であつたとか、いまは全く産し 弘前城築城の際には、この浜の砂鉄を精錬 蟹田、 この蟹田浜で新造した事もあり、 寛文九年の蝦夷蜂起の時には、 蓬田、 津軽九浦の一つに指定せられ、こ ちかごろ新築したばかりらしい 平館、 一本木、今別、三厩、 ま その鎮圧 た、

几

76

では私は、

津軽 こに町奉行を置き、 これらの事は、 すべて私があとで調べて知つた事で、それま 主として木材輸出の事を管せしめた由である

かいになりたく、前もつてN君に手紙を差し上げたが、その手紙 んど津軽を行脚するに当つて、N君のところへも立寄つてごやく

人のN君がゐるといふ事だけしか知らなかつたのである。私がこ

蟹田は蟹の名産地、さうして私の中学時代の唯一の友

にも、 「なんにも、 おかまひ下さるな。 あなたは、 知らん振りを

も、リンゴ酒と、それから蟹だけは。」といふやうな事を書いて

してゐて下さい。お出迎へなどは、決して、しないで下さい。

やつた筈で、食べものには淡泊なれ、といふ私の自戒も、 蟹だけ

には除外例を認めてゐたわけである。 私は蟹が好きなのである。

は、 を暴露しちやつた。 真理の使徒も、 らないやうな食べものばかり好きなのである。それから好むもの 酒である。 飲食に於いては何の関心も無かつた筈の、愛情と 話ここに到つて、はしなくも生来の貪婪性の「

に積み上げて私を待ち受けてくれてゐた。 田のN君の家では、赤い猫脚の大きいお膳に蟹を小山のやう

どうしてだか好きなのである。蟹、蝦、しやこ、何の養分にもな

端端

ね。」と、N君は、言ひにくさうにして言ふのである。 「リンゴ酒でなくちやいけないかね。 日本酒も、ビールも駄目か

るが、しかし、日本酒やビールの貴重な事は「大人」の私は知つ 駄目どころか、それはリンゴ酒よりいいにきまつてゐるのであ

津軽

地方には、このごろ、甲州に於ける葡萄酒のやうに、リンゴ酒が

津軽

「それあ、どちらでも。」私は複雑な微笑をもらした。

N 君 は、

ほつとした面持で、

割合ひ豊富だといふ噂を聞いてゐたのだ。

ぢやないんだ。実はね、女房の奴が、 「いや、それを聞いて安心した。僕は、どうも、リンゴ酒は好き 君の手紙を見て、これは太

ゴ酒を一つ飲んでみたくて、かう手紙にも書いてゐるのに相違な 宰が東京で日本酒やビールを飲みあきて、故郷の匂ひのするリン いから、リンゴ酒を出しませうと言ふのだが、僕はそんな筈は無 あいつがビールや日本酒をきらひになつた筈は無い、あいつ

は、がらにも無く遠慮をしてゐるのに違ひないと言つたんだ。」 「でも、奥さんの言も当つてゐない事はないんだ。」

「何を言つてる。もう、よせ。日本酒をさきにしますか? ビー

ル?

「僕もそのはうがいい。おうい、お酒だ。お燗がぬるくてもかま 「ビールは、あとのはうがいい。」私も少し図々しくなつて来た。

はないから、すぐ持つて来てくれ。」

青雲倶に達せず、白髪逓に相驚く。

何れの処か酒を忘れ難き。天涯旧情を話す。

二十年前に別れ、三千里外に行く。

此時 一 盞 無くんば、何を以てか平生を叙せん。

(白居

易)

津軽

たが、どういふわけか、 私は、 中学時代には、 よその家へ遊びに行つた事は絶無であつ 同じクラスのN君のところへは、 実にし

ばしば遊びに行つた。N君はその頃、寺町の大きい酒屋の二階に

も、 ゆつくり歩いた。いま思へば二人とも、 下宿してゐた。私たちは毎朝、 あわてて走つたりなどはせず、全身濡れ鼠になつても平気で、 帰りには裏路の、 海岸伝ひにぶらぶら歩いて、 誘ひ合つて一緒に登校した。さう 頗る鷹揚に、 抜けたやう 雨が降つて

なところのある子であつた。そこが二人の友情の鍵かも知れなか 私たちはお寺の前の広場で、ランニングをしたり、テニス

をしたり、

また日曜には弁当を持つて近くの山へ遊びに行つた。

から、 卑屈な男になつて行つたが、N君はそれと反対に、いくらだまさ やうである。けれども私は、人にだまされる度毎に少しづつ暗い 鷹揚な性質なので、 なかつた。 やうに逢つて遊んだ。こんどの遊びは、テニスやランニングでは の下宿は高田馬場であつたが、しかし、私たちはほとんど毎日の からまた二人の交遊は復活した。N君の当時の下宿は池袋で、 りも二、三年おくれて東京へ出て、大学に籍を置いたが、その時 のはたいていこのN君の事なのである。N君は中学校を卒業して |思ひ出」といふ私の初期の小説の中に出て来る「友人」といふ 東京へ出て、或る雑誌社に勤めたやうである。 N 君 は、 雑誌社をよして、保険会社に勤めたが、何せ 私と同様、いつも人にだまされてばかりゐた 私はN君よ 私

る。 0) に遊びに来た事はあるが、 には一様に敬服してゐた。 遺徳と思ふより他はない、 N 君は不思議な男だ、 東京に来てからも、戸塚の私のすぐの ひがまないのが感心だ、 N 君 は、 と口の悪い遊び仲間も、 中学時代にも金木の私の生家 あの その素直さ 点は祖 先

兄の家へ、ちよいちよい遊びに来て、さうして、この兄が二十七

で

んだ時には、

勤めを休んでいろいろの用事をしてくれて、

私

前、 業を継がなければならなくなつて帰郷した。家業を継いでからも、 0) その不思議な人徳に依り、 肉 蟹田の町会議員に選ばれ、 親たち皆に感謝された。そのうちにN君は、 町の青年たちの信頼を得て、二、三年 また青年団の分団長だの、 田舎の家の精米 何とか

津軽 84 ある。 芭蕉翁 そうになつて、さうして乱に及ぶなどといふ、それほどの馬鹿で 当り前の話ではないか。 の数倍強いのではあるまいかと思はれる。 私はアルコールには強いのである。 よその家でごち

である。 はないつもりだ。此時一盞無くんば、 私は大いに飲んだ。なほまた翁の、あの行脚掟の中には、 何を以てか平生を叙せん、

ふべし、 俳諧の外、 といふ条項もあつたやうであるが、 雑話すべからず、 雑話出づれば居眠りして労を養 私はこの掟にも従は

旅の行く先々に於いて句会をひらき蕉風地方支部をこしらへて歩 なかつた。芭蕉翁の行脚は、私たち俗人から見れば、 風宣伝のための地方御出張ではあるまいかと疑ひたくなるほど、 てゐる。 俳諸の聴講生に取りまかれてゐる講師ならば、それは ほとんど蕉

のは、 ら、 を感じてくれて、盃の献酬をしてゐるといふやうな実情なのだか 文学の講義を聞かうと思つて酒席をまうけたわけぢやあるまいし、 支部をこしらへるための旅ではなし、N君だつてまさか私から、 うが何をしようが勝手であらうが、 俳諸の他の雑話を避けて、さうして雑話が出たら狸寝入りをしよ しかうして、 私がN君の昔からの親友であるといふ理由で私にも多少の親しみ 文学の事は一言も語らなかつた。東京の言葉さへ使はなかつ 私が開き直つて、文学精神の在りどころを説き来り説き去り、 その夜、N君のお家へ遊びに来られた顔役の人たちだつて、 あまりおだやかな仕草ではないやうに思はれる。 雑談いづれば床柱を背にして狸寝入りをするといふ 私の旅は、 何も太宰風の地方 私はその

津軽 さうして日常瑣事の世俗の雑談ばかりした。そんなにまでして勤 かへつて気障なくらゐに努力して、 純粋の津軽弁で話をした。

、津島修治といふのは、私の生れた時からの戸籍名であつて、 オズカスといふのは叔父糟といふ漢字でもあてはめたらいい

思はれるほど、私は津軽の津島のオズカスとして人に対した。

めなくともいいのにと、

酒席の誰かひとりが感じたに違ひないと

いちど、その津島のオズカスに還元させようといふ企画も、私に ではその言葉を使ふのである。)こんどの旅に依つて、 のであらうか、三男坊や四男坊をいやしめて言ふ時に、 私をもう この地方

津軽人としての私をつかまうとする念願である。 言ひかたを

無いわけではなかつたのである。都会人としての私に不安を感じ

かつたつもりだ。 そんな探偵みたいな油断のならぬ眼つきをして私は旅をしてゐな 変へれば、 べきものを囁かれる事が実にしばしばあつたのである。 見て歩いてゐた。けれども自分の耳にひそひそと宿命とでもいふ は私に対するもてなしの中に、それを発見してゐるのではない。 の貧しい旅人には、そんな思ひ上つた批評はゆるされない。 所に於いてそれを発見した。誰がどうといふのではない。 捜し当てたくて津軽へ来たのだ。さうして私は、 くて旅に出たのだ。 失礼きはまる事である。 津軽人とは、どんなものであつたか、それを見極めた 私はたいていうなだれて、自分の足もとばかり 私の生きかたの手本とすべき純粋の津軽人を 私はまさか個人々々の言動、 実に容易に、 私はそれ 乞食姿 また それ

随

津軽 が何とおつしやつたとか、私はそれには、ほとんど何もこだはる 実は決して人を信じさせる事が出来ない。」といふ妙な言葉を、 を信じた。 の眼中に無かつた。「信じるところに現実はあるのであつて、 れにこだはる資格も何も無いのであるが、とにかく、現実は、 ところが無かつたのである。それは当然の事で、 ひどく主観的なものなのである。 私の発見といふのは、そのやうに、理由も形も何も無 誰がどうしたとか、どなた 私などには、そ 私

場合が多い。嘘を言つてゐる事さへある。だから、 はしどろもどろで、自分でも、何を言つてゐるのか、わからない 慎しまうと思ひながら、つい、下手な感懐を述べた。 気持の説明は、 私の理論

私は旅の手帖に、二度も繰り返して書いてゐた。

哀しい宿命の一つらしい。 軽蔑どころか、憐憫の情をさへ起させてしまふのは、 ち」口をとがらせて呶々と支離滅裂の事を言ひ出し、 やうで、慚愧赤面するばかりだ。かならず後悔ほぞを噛むと知つ 私が蟹の山を眺めて楽しんでゐるばかりで一向に手を出さないの の更けるまで飲みつづけた。N君の小柄でハキハキした奥さんは、 もせず大いに雑談にのみ打興じ、眼前に好物の蟹の山を眺めて夜 てゐながら、興奮するとつい、それこそ「廻らぬ舌に鞭打ち鞭打 いやなのだ。何だかどうも、見え透いたまづい虚飾を行つてゐる その夜は、しかし、私はそのやうな下手な感懐をもらす事はせ 芭蕉翁の遺訓にはそむいてゐるやうだつたけれども、 これも私の 相手の心に

居眠り

津軽 90 V を見てとり、これは蟹をむいてたべるのを大儀がつてゐるのに違 ないとお思ひになつた様子で、ご自分でせつせと蟹を器用に

しげな水菓子みたいな体裁にして、いくつもいくつも私にすすめ ツ何とかといふ、あの、 果物の原形を保持したままの香り高い涼

その白い美しい肉をそれぞれの蟹の甲羅につめて、フルウ

おそらくは、けさ、この蟹田浜からあがつたばかりの蟹なの

食べ物に無関心たれといふ自戒を平気で破つて、三つも四つも食 であらう。もぎたての果実のやうに新鮮な軽い味である。 私は、

らゐであつた。 て、この土地の人でさへ、そのお膳の料理の豊潤に驚いてゐたく べた。この夜、奥さんは、来る人来る人みんなにお膳を差し上げ 顔役のお客さんたちが帰つてしまふと、 私とN君

《僕

むなあ。 は「後引き」の訛かも知れない。N君は私よりも更にアルコールー。ホルとび その残肴を集めてささやかにひらく慰労の宴の事であつて、或い しかに、さうなのである。 には強いたちなので、私たちは共に、乱に及ぶ憂ひは無かつたが、 せがあつた場合、お客が皆かへつた後で、身内の少数の者だけが、 トフキといふのは、この津軽地方に於いて、祝言か何か家に人寄 「しかし、君も、」と私は、深い溜息をついて、「相変らず、 「うむ。」とN君は盃を手にしたままで、真面目に首肯き、 僕に酒を教へたのは、 何せ僕の先生なんだから、 実に、このN君なのである。 無理もないけど。」 それは、

は奥の座敷から茶の間へ酒席を移して、アトフキをはじめた。ア

津軽 何か失敗みたいな事をやらかすたんびに、僕は責任を感じて、つ だつて、ずいぶんその事に就いては考へてゐるんだぜ。君が酒で

んだ。 らかつたよ。でもね、このごろは、かう考へ直さうと努めてゐる あいつは、僕が教へなくたつて、ひとりで、酒飲みになつ

た奴に違ひない。僕の知つた事ではないと。」

しないよ。全く、そのとほりなんだ。」 「ああ、さうなんだ。そのとほりなんだ。君に責任なんかありや

みり、アトフキをやつてゐるうちに、突如、鶏鳴あかつきを告げ やがて奥さんも加り、お互ひの子供の事など語り合つて、しん

たので、大いに驚いて私は寝所へ引上げた。

翌る朝、 眼をさますと、青森市のT君の声が聞えた。 約束どほ

る。 花見に行かうといふ相談が、まとまつた様子である。 らやつて来られた。Mさんは、N君とも、 近くの今別から、Mさんといふ小説の好きな若い人も、私が蟹田 とも旧知の間柄のやうである。これから、すぐ皆で、 に来る事をN君からでも聞いてゐたらしく、はにかんで笑ひなが んといふ人も一緒に来てゐた。 て来てゐた。 観 瀾 山 。 私はれいのむらさきのジヤンパーを着て、<^ゎ。ら^ざん T君は、 朝の一番のバスでやつて来てくれたのだ。私はすぐにはね起 T君がゐてくれると、私は、何だか安心で、気強いのであ また、その病院の蟹田分院の事務長をしてゐるSさ 青森の病院の、小説の好きな同僚の人をひとり連れ 私が顔を洗つてゐる間に、三厩の またT君とも、Sさん 蟹田の山へ 緑色の

津軽 も、 ゲートルをつけて出掛けたのであるが、そのやうなものものしい れは湖水に似てゐる。 磯の香さへほのかである。雪の溶け込んだ海である。 怒濤逆巻く海を想像するかも知れないが、この蟹田あたりの あつて、 身支度をする必要は全然なかつた。その山は、 ひどく温和でさうして水の色も淡く、塩分も薄いやうに感ぜられ、 いくらゐの上天気で、 この山からの見はらしは、悪くなかつた。その日は、まぶし 北の海と言へば、 また、 高さが百メートルも無いほどの小山なのである。 平館海峡をへだてて下北半島が、すぐ真近かに見え 深さなどに就いては、 風は少しも無く、青森湾の向うに夏泊岬が 南方の人たちは或いは、どす暗く険悪で、 国防上、 蟹田の町はづれに ほとんどそ 言はぬはう けれど 海は、

ある。よそへ送つてしまふのかも知れない。だから、この町の人 ばかりを売り歩いて、前日の売れ残りは一さい取扱はないやうで だぢやあ、と怒つてゐるやうな大声で叫んで、売り歩いてゐるの 変らず、毎朝、さかなやがリヤカーにさかなを一ぱい積んで、イ 海浜のすぐ近くに網がいくつも立てられてゐて、蟹をはじめ、イ がいいかも知れないが、浪は優しく砂浜を嬲つてゐる。さうして たちは、その日にとれた生きたさかなばかり食べてゐるわけであ である。さうして、この辺のさかなやは、その日にとれたさかな カにサバだぢやあ、アンカウにアオバだぢやあ、スズキにホツケ を通じて容易に捕獲できる様子である。この町では、いまも昔と カレヒ、サバ、イワシ、鱈、アンカウ、さまざまの魚が四季

96

津軽 また、 るが、 海岸に迫つてゐるので、 ぐまれてゐるところのやうである。 0) 帯のどの漁村でも、 の広い津軽平野に住んでゐる人たちは、 干物と山菜で食事をしてゐる。 た時には、 山の陰の意)と呼んで、多少、あはれんでゐる傾向が無いわけ てゐるところも少くない状態なので、 漁村に於いても、全く同様である。 平 しかし、 野もあれば、 町 中に一尾のなまざかなも見当らず、 海が荒れたりなどしてたつた一日でも漁の無かつ また、外ヶ浜だけとも限らず、 山もある。 平野は乏しく、 これは、 津軽半島の東海岸は、 蟹田は海岸の町ではある 蟹田はまた、 この外ヶ浜地方を、 山を越えて津軽半島西部 山の斜面に田や畑を開墾 蟹田に限らず、 町の人たちは、 頗る山菜にめ 津軽の西海岸 山がすぐ 外ヶ浜 カゲ

西風も強く当るので不作のと

観瀾山から見下すと、

でもないやうに思はれる。けれども、この蟹田地方だけは、決し

蟹田の人たちは、くすぐつたく思

のすんだ水田が落ちつき払つて控へてゐて、 水量たつぷりの蟹田川が長蛇の如くうねつて、その両側に一番打 景観をなしてゐる。 山は奥羽山脈の支脈の梵珠山脈である。 ゆたかな、 たのもし

津軽 98 この山脈は津軽半島の根元から起つてまつすぐに北進して半島のはの山脈は津軽半島の根元から起つてまつすぐに北進して半島の の竜飛岬まで走つて海にころげ落ちる。 一二百メートルから三、

か ぐ西に青く聳えてゐる大倉岳は、この山脈に於いて増川岳などと 四百メートルくらゐの低い山々が並んで、 ないかくらゐのものなのである。 に最高の山の一つなのであるが、 それとて、七百メートルある けれども、 観瀾山からほぼまつす 山高きが故に貴か

らず、 は、 ちは、 軽 事を断言してはばからぬ実利主義者もあるのだから、 の産物は、 全国有数の扁柏の産地である。その古い伝統を誇つてよい津 敢へてその山脈の低きを恥ぢる必要もあるまい。 樹木あるが故に貴し、とか、 扁柏である。 林檎なんかぢやないんだ。 いやに興覚めなハツキリした 津軽 林檎なんて この山脈 の人た

たの

四年

意 流 数 は ほ 津 植林に努めた結果、 地 里 じめ天和、 またこれに依つて耕地八千三百余町歩の開墾を見るに到つた。 方 の鬱蒼をつづけ、さうしてわが国の模範林制と呼ばれてゐる。 軽藩祖為信の遺業に因し、 の間に植林を行ひ、 の荒蕪開拓に資した。 貞享の頃、 寛永年間にはいはゆる屛風樹林の成木を見 もつて潮風を防ぎ、 津軽半島地方に於いて、 爾来、 「そもそも、この津軽の大森林は 爾来、 藩にてはこの方針を襲 厳然たる制度の下に今日な またもつて岩木川下 日本海岸の砂丘 ひ、 鋭

林

を設けるに及んだ。

かくて明治時代に到つても、

官庁は大いに

それより、

藩内の各地は頻りに造林につとめ、

百有余所の大藩有

田川

ても

最 瀾 別 0) だしこの地方の材質は、 林 津軽地方全体の扁柏林に就いての記述であつて、これを以つて特 額はその三倍くらゐになつてゐると思はれる。けれども、以上は、 水湿に耐へる特性を有すると、 」と記されてあるが、これは昭和四年版であるから、 河口の大きな写真が出てゐて、さうして、その写真には、 運搬に比較的便利なるとをもつて重宝がられ、 もすぐれた森林地帯で、れいの日本地理風俗大系にも、 Щ に蟹田地方だけの自慢となす事は出来ないが、 政 から眺められるこんもり繁つた山々は、 に注意し、 青森県扁柏林の好評は世に嘖々として聞える。 よく各種の建築土木の用途に適し、 材木の産出の豊富なると、 津軽地方に於い しかし、この観 年産額八十万石 現在の産 またそ

殊に

津軽 る。 る。 海岸 町は 0) 珠 0) などの木材も産し、 するも得べけんやである。しかも、この津軽半島の脊梁をなす梵 0) 蟹 である。この地方の木材は良質でしかも安価なので知られてゐ 蟹田川附近には日本三美林の称ある扁柏の国有林があり、 」といふ説明が附せられてある。 脈は、 キノコの類が、 田地方も、ワラビ、ゼンマイ、ウド、 を離れて山に入り、 その積出港としてなかなか盛んな港で、 島の西部の金木地方も、山菜はなかなか豊富であるが、こ 扁柏ばかりでなく、杉、 町のすぐ近くの山麓から実に容易にとれるの また、山菜の豊富を以て知られてゐるのであ 毎日多くの材木を積んでここに運び 山毛欅、楢、 蟹田の人たちは誇らじと欲 タケノコ、フキ、アザ ここから森林鉄道が 桂、 橡、カラ松 来る 蟹田

る。 細 町をもの憂くさせるほど町民が無気力なのも、 何か物憂い。 るだらうが、しかし、 しんと静まりかへつてゐる。 河口の防波堤も半分つくりかけて投 も恵まれて、それこそ鼓腹撃壌の別天地のやうに読者には思はれ である。このやうに蟹田町は、 ではあるまいかと思はせるほど、 蟹田の人たちは温和である。 ほめて書いて来たのであるから、ここらで少し、 天然の恵みが多いといふ事は、 蟹田の人たちはまさか私を殴りやしないだらうと思はれ 活気が無いのだ。 この観瀾山から見下した蟹田の町の気配は、 田あり畑あり、 いままで私は蟹田をほめ過ぎるほ 温和といふのは美徳であるが、 蟹田の町は、おとなしく、 町勢にとつて、かへつて悪 旅人にとつては心 海の幸、 悪口を言つ Щ の幸に

津軽 104 げ出したやうな形に見える。家を建てようとして地ならしをして、 どを植ゑてゐる。 それつきり、 家を建てようともせずその赤土の空地にかぼちやな 観瀾山から、それが全部見えるといふわけでは

策動屋みたいなものがゐるんぢやないか、と私はN君に尋ねたら、 るやうに思はれる。町政の溌剌たる推進をさまたげる妙な古陋の

蟹田には、どうも建設の途中で投げ出した工事が多すぎ

べきは士族の商法、文士の政談。 この若 い町会議員は苦笑して、よせ、よせ、と言つた。つつしむ 私の蟹田町政に就いての出しや

ばりの質問は、くろうとの町会議員の憫笑を招来しただけの馬鹿 の失敗談である。フランス画壇の名匠エドガア・ドガは、 い結果に終つた。それに就いて、すぐ思ひ出される話はドガ かつて

をし、 けで、 ごろ寝をして、翌る朝、 を選び、 同 あらゆる恩愛のきづなを断ち切り、苦行者の如く簡易質素の生活 懐してゐた高邁の政治談をこの大政治家に向つて開陳した。「私 室を借り、そこには一脚のテーブルと粗末な鉄の寝台があるだ リーの或る舞踊劇場の廊下で、偶然、大政治家クレマンソオと .じ長椅子に腰をおろした。ドガは遠慮も無く、かねて自己の抱 もし、 役所から帰ると深夜までそのテーブルに於いて残務の整理 睡魔の襲ふと共に、 役所のすぐ近くのアパートの五階あたりに極めて小さい 宰相となつたならば、ですね、その責任の重大を思ひ、 鞄をかかへて役所へ行くといふ工合の生活 眼が覚めると直ちに立つて、立つたまま 服も靴もぬがずに、 そのままベツドに

をするに違ひない!」と情熱をこめて語つたのであるが、クレマ

津軽 あらうと、そぞろ同情の念の胸にせまり来るを覚えるのである。 きにやられて、それこそ骨のずいまでこたへたものがあつたので さすが傲慢不遜の名匠も、くろうと政治家の無意識な軽蔑の眼つ 恥かしかつたと見えて、その失敗談は誰にも知らせず、十五年経 蔑の眼つきで、この画壇の巨匠の顔を、しげしげと見ただけであ といふひどく永い年月、ひた隠しに隠してゐたところを見ると、 しいヴアレリイ氏にだけ、こつそり打ち明けたのである。十五年 つたといふ。ドガ氏も、その眼つきには参つたらしい。よつぽど ンソオは一言も答へず、ただ、なんだか全く呆れはてたやうな軽 彼の少数の友人の中でも一ばんのお気に入りだつたら

また津軽の友人たちの愛情に就いてだけ語つてゐるはうが、どう 本である。一個の貧乏文士に過ぎない私は、 とかく芸術家の政治談は、 怪我のもとである。ドガ氏がよいお手 観瀾山の桜の花や、

その前日には西風が強く吹いて、N君の家の戸障子をゆすぶり、

風の町だね。」と私は、れいの独り合点の卓説

蟹田つてのは、

やら無難のやうである。

を吐いたりなどしてゐたものだが、けふの蟹田町は、 暴論を忍び笑ふかのやうな、おだやかな上天気である。 前夜の私の そよとの

風 も 無い。 観瀾山の桜は、いまが最盛期らしい。 静かに、 淡く咲

ほるやうで、心細く、いかにも雪に洗はれて咲いたといふ感じで てゐる。 爛漫といふ形容は、当つてゐない。 花弁も薄くすきと

ぎゆうつめ込んで、そのままお醤油の附焼きにして輪切りにして 0) をむき、 それから、ビール。私はいやしく見られない程度に、シヤコの皮 0) か 思はせるほど、 あつたのが、私にはひどくおいしかつた。帰還兵のT君は、 お料理の中では、 いて坐つて、 お料理である。他に、蟹とシヤコが、大きい竹の籠に一ぱい。 蟹 の脚をしやぶり、重箱のお料理にも箸をつけた。 重箱をひろげた。これは、やはり、N君の奥さん 幽かな花だ。私たちは桜花の下の芝生にあぐらを ヤリイカの胴にヤリイカの透明な卵をぎゆう 重箱 暑い

暑いと言つて上衣を脱ぎ半裸体になつて立ち上り、

軍隊式の体操

甚だいやしい事を、やつちやつた。芭蕉だつて、他門の俳諸の悪 は見事にそむいてしまつた。一、他の短を挙げて、己が長を顕す 素振りを見せた。私は問はれただけの事は、ハツキリ答へた。 口は、チクチク言つたに違ひないのであるが、けれども流石に私 ことなかれ。人を譏りておのれに誇るは甚だいやし。 掟にしたがつたわけであるが、しかし、他のもつと重大な箇条に であるが、 ちよつとビルマのバーモオ長官に似てゐた。その日、集つた人た をはじめた。タオルの手拭ひで向う鉢巻きをしたその黒い顔は、 「問に答へざるはよろしからず。」といふれいの芭蕉翁の行脚の 情熱の程度に於いてはそれぞれ少しづつ相違があつたやう 何か小説に就いての述懐を私から聞き出したいやうな 私はその、

津軽 その作家を好きだと告白する事は、その読書人の趣味の高尚を証 わけか、 てしまつたのである。 からして他の小説家を罵倒するなどといふあさましい事はしなか 明するたづきになるといふへんな風潮さへ瞥見せられて、それこ ゐる様子で、神様、といふ妙な呼び方をする者なども出て来て、 て問はれて、私は、そんなによくはない、とつい、うつかり答へ してしまつたのである。日本の或る五十年配の作家の仕事に就い つたであらう。 みたいに、たしなみも何も無く、眉をはね上げ口を曲げ、 贔屓の引きだふしと言ふもので、その作家は大いに迷惑して 畏敬に近いくらゐの感情で東京の読書人にも迎へられて 私は、 最近、その作家の過去の仕事が、どういふ にがにがしくも、そのあさましい振舞ひを 肩をい

みて、 チな そんな箇所は特に古くさく、こんなイヤミな反省ならば、しない は 奇妙な勢威を望見して、れいの津軽人の愚昧なる心から、「かれ 苦笑してゐるのかも知れないが、しかし、私はかねてその作家の ではあるまいかと思つたくらゐであつた。書かれてある世界もケ て、このごろに到つて、その作家の作品の大半をまた読み直して りで興奮して、素直にその風潮に従ふ事は出来なかつた。さうし |賤しきものなるぞ、ただ時の武運つよくして云々。] と、ひと 自分の生き方に就いてときどき「良心的」な反省をするが、 小市民の意味も無く気取つた一喜一憂である。作品の主人公 かへつて、エゲツナイところに、この作家の強みがあるの うまいなあ、とは思つたが、格別、趣味の高尚は感じなか

津軽 112 はうがよいと思はれるくらゐで、「文学的」な青臭さから離れよ

るのか、つまらぬ神経が一本ビクビク生きてゐるので読者は素直 意外なほどたくさんあつたが、自分を投げ出し切れないものがあ うとして、かへつて、それにはまつてしまつてゐるやうなミミツ とんでもない事で、それこそ贔屓の引きたふしである。貴族とい に笑へない。貴族的、といふ幼い批評を耳にした事もあつたが、 チイものが感ぜられた。ユウモアを心掛けてゐるらしい箇所も、

時、フランス国王ルイ十六世、暗愚なりと雖も、からから笑つて

フランス革命の際、暴徒たちが王の居室にまで乱入したが、その

矢庭に暴徒のひとりから革命帽を奪ひとり、自分でそれをひよい

ふものは、だらしないくらゐ闊達なものではないかと思はれる。

族的なんて、あはれな言葉を使つちやいけない。 気なつくろはぬ気品があるものだ。口をひきしめて襟元をかき合 せてすましてゐるのは、あれは、 居室から退去したのである。まことの貴族には、このやうな無邪 ンス万歳を絶叫し、 この天衣無縫の不思議な気品に打たれて、思はず王と共に、フラ とかぶつて、フランス万歳、と叫んだ。血に飢ゑたる暴徒たちも、 王の身体には一指も触れずにおとなしく王の 貴族の下男によくある型だ。

て、そのやうな悪口を言ひ、言ひはじめたら次第に興奮して来て、 の事ばかり質問するので、たうとう私も芭蕉翁の行脚の掟を破つ ていその五十年配の作家の心酔者らしく、私に対して、 その日、 蟹田の観瀾山で一緒にビールを飲んだ人たちも、 その作家

津軽 114 は言ふものでない。「男振りにだまされちやいかんといふ事だ。 切つてゐるといふやうなふうに見えた。他の人たちも、互ひに顔 それこそ眉をはね上げ口を曲げる結果になつて、貴族的なんて、 ルイ十六世は、史上まれに見る醜男だつたんだ。」いよいよ脱線 を見合せてにやにや笑つてゐる。 の面持で、ひとりごとのやうにして言つた。酔漢の放言に閉口し を私たちは言つてはゐません。」と今別から来たMさんは、当惑 しも同感の色を示さなかつた。「貴族的なんて、そんな馬鹿な事 へんなところで脱線してしまつた。一座の人たちは、 「要するに、」私の声は悲鳴に似てゐた。ああ、先輩作家の悪口 私の話に少

するばかりである。

吐いた。 はつきり宣言する。 つてくれないのは、ひどいぢやないか。」私は笑ひながら本音を の病院のHさんは、つつましく、 「日本ぢや、あの人の作品など、いいはうなんでせう?」と青森 「そりや、いいはうかも知れない。まあ、いいはうだらう。しか 「でも、あの人の作品は、 みんな微笑した。やはり、本音を吐くに限る、と私は図に乗り、 私の立場は、いけなくなるばかりだ。 君たちは、僕を前に置きながら、僕の作品に就いて一言も言 私は好きです。」とMさんは、イヤに 取りなし顔に言ふ。

115 「僕の作品なんかは、滅茶苦茶だけれど、しかし僕は、大望を抱

津軽 116 がる。」 岩に白菊一輪だ。土台に、むさい大きい岩が無くちや駄目なもん 失敬だよ。 葉の形の干菓子を出したり、青磁の壺に水仙を投げ入れて見せた るだらうが、しかし僕は本当の気品といふものを知つてゐる。 つて、僕はちつともそれを上品だとは思はない。成金趣味だよ、 在のこの姿だ。 いてゐるんだ。その大望が重すぎて、よろめいてゐるのが僕の現 な女学生くさいリリシズムを、芸術の気品だなんて思つてゐや 針金で支へられたカーネーションをコツプに投げいれたみた それが本当の上品といふものだ。君たちなんか、まだ若いか 本当の気品といふものは、真黒いどつしりした大きい 君たちには、だらしのない無智な薄汚い姿に見え

松

あは、 、 僕の仕事をさつぱりみとめてくれないから、僕だつて、あらぬ事 快の感を与へ、薄汚い馬鹿者として遠ざけられてゐるのである。 厳粛の真理に似てゐる。じつさい、甚だいやしいものだ。 このいやしい悪癖があるので、東京の文壇に於いても、 人を譏りておのれに誇るは甚だいやし。」この翁の行脚の掟は、 「まあ、仕様が無いや。」と私は、うしろに両手をついて仰向き、 「僕の作品なんか、まつたく、ひどいんだからな。何を言つたつ 暴言であつた。「他の短を挙げて、己が長を顕すことなかれ。 はじまらん。でも、君たちの好きなその作家の十分の一くら 僕の仕事をみとめてくれてもいいぢやないか。 君たちは、 皆に不愉 私には

を口走りたくなつて来るんだ。みとめてくれよ。二十分の一でも

いいんだ。みとめろよ。」

津軽 みんな、ひどく笑つた。笑はれて、私も、気持がたすかつた。

蟹田分院の事務長のSさんが、腰を浮かして、

きいEといふ旅館に、皆の昼飯の仕度をさせてあるといふ。いい 特有の慈悲深くなだめるやうな口調で言つた。蟹田町で一ばん大 「どうです。この辺で、席を変へませんか。」と、世慣れた人に

「いいんです。ごちそうになりませう。」T君は立ち上つて上衣

と私はT君に眼でたづねた。

ごちそうになりに行きませう。Nさんのごちそうにばかりなつて 給の上等酒をとつて置いたさうですから、これから皆で、それを を着ながら、「僕たちが前から計画してゐたのです。Sさんが配

ゐては、 いけません。」

私はT君の言ふ事におとなしく従つた。だから、

T君が傍につ

いてゐてくれると、心強いのである。

も、 道へ渡るのに、 国 の旅館は、 んとしてゐたし、 の旅人を送り迎へした伝統のあらはれかも知れない。 Eといふ旅館は、 わびしくない宿だと思つた。いつたいに、津軽半島の東海岸 西海岸のそれと較べると上等である。昔から多くの他 かならず三厩から船出する事になつてゐたので、 便所も清潔だつた。ひとりでやつて来て泊つて なかなか綺麗だつた。 部屋の床の間も、 昔は北海 ちや

ある。 この外ヶ浜街道はそのための全国の旅人を朝夕送迎してゐたので 旅館のお膳にも蟹が附いてゐた。

津軽 T君はお酒を飲めないので、ひとり、さきにごはんを食べたが、

他の人たちは、皆、Sさんの上等酒を飲み、ごはんを後廻しにし

酔ふに従つてSさんは、上機嫌になつて来た。

「私はね、 誰の小説でも、みな一様に好きなんです。 読んでみる

家でも、 ら私は、 みんな面白い。なかなか、どうして、上手なものです。だか 好きで好きでたまらないんです。私は、子供を、 小説家つてやつを好きで仕様が無いんです。どんな小説

男の子

んです。名前も、文男と附けました。文の男と書きます。 で三つになりましたがね、こいつを小説家にしようと思つてゐる 頭の恰

好が、どうも、あなたに似てゐるやうです。失礼ながら、

そんな

の家へみんなでいらつしやいませんか。ね。ちよつとでいいんで 「どうです。お酒もそろそろ無くなつたやうですし、これから私 うちの女房にも、文男にも、逢つてやつて下さい。たのみま

す。リンゴ酒なら、蟹田には、いくらでもありますから、家へ来

121

津軽 122 て、リンゴ酒を、ね。」と、しきりに私を誘惑するのである。

御

家へ行つて、こんどは頭の鉢どころか、頭の内容まで見破られ、 好志はありがたかつたが、私は頭の鉢以来、とみに意気が沮喪 早くN君の家へ引上げて、一寝入りしたかつた。Sさんのお

が行けと言へば、これは、行かなくてはなるまいと覚悟してゐた。 ら気が重かつた。私は、れいに依つてT君の顔色を伺つた。T君 ののしられるやうな結果になるのではあるまいかと思へばなほさ

T君は、 「行つておやりになつたら? Sさんは、けふは珍らしくひどく 真面目な顔をしてちよつと考へ、

酔つてゐるやうですが、ずいぶん前から、 のを楽しみにして待つてゐたのです。」 あなたのおいでになる

は、 れて来たぞ。これが、そのれいの太宰つて人なんだ。挨拶をせん 接待振りには、同じ津軽人の私でさへ少しめんくらつた。Sさん けてゐるものは「自信」かも知れない。 くよしていけない。容貌に就いてばかりでなく、私にいま最も欠 さんが、ユウモアのつもりでおつしやつたのに違ひないと思ひ直 のである。「おい、東京のお客さんを連れて来たぞ。たうとう連 した。どうも、容貌に自信が無いと、こんなつまらぬ事にもくよ Sさんのお家へ行つて、その津軽人の本性を暴露した熱狂的な 私は行く事にした。頭の鉢にこだはる事は、やめた。あれはS お家へはひるなり、たてつづけに奥さんに用事を言ひつける

津軽 にかけてある干鱈をむしつて、待て、それは 金 槌 でたたいてや 升 コツプが一つ、いや二つ足りない。早く持つて来い、待て、この 工合ひに、こんな工合ひに、あ、痛え、まあ、こんな工合ひだ。 んな手つきぢやいけない、僕がやる。干鱈をたたくには、こんな はらかくしてから、むしらなくちや駄目なものなんだ。待て、そ しか無いのか。少い! もう二升買つて来い。 醤油を持つて来い。干鱈には醤油をつけなくちや駄目だ。 待て。その縁側

宰に見てもらふんだ。どうです、この頭の形は、こんなのを、

鉢

て来い、待て、坊やを連れて来い。小説家になれるかどうか、太

茶飲茶碗でもいいか。さあ、乾盃、

乾盃。おうい、もう二升買つ

がひらいてゐるといふんでせう。あなたの頭の形に似てゐると思

津軽 126 自慢と来てゐる。果してお客さんのお気に召すかどうか、待て、 なんだ、それは、バツハか。やめろ。うるさくてかなはん。 はそんなものぢやないんだ。待て。 れは津軽で無ければ食へないものだ。さうだ。卵味噌だ。卵味噌 アンコーのフライとそれから、卵味噌のカヤキを差し上げろ。こ ものが無くなつた。アンコーのフライを作れ。ソースがわが家の 何も出来やしない。もつと静かなレコードを掛けろ、待て、 ルト、シヨパン、バツハ、なんでもいい。音楽を始めろ。待て。 でいいんだつてば。 かせちや、いかん。失敬ぢやないか。成金趣味だぞ。貴族つての 音楽、 音楽。レコードをはじめろ。シユーベ 砂糖はお客さんがお帰りの時 食ふ 話も

に限る。

卵味噌だ。

卵味噌だ。」

つて来た。Sさんは、鉢のひらいた頭といふものを、真剣に尊敬

津軽 る。 卵味噌、 を用ゐてゐた。貝殼から幾分ダシが出ると盲信してゐるところも の頃には、 あらうと思はれる。いまはさうでもないやうだけれど、 に思はれる。 ヤキなるものに就いては、一般の読者には少しく説明が要るやう してゐるらしいのである。いいものだと思つてゐるらしいのであ いわけではないやうであるが、とにかく、これは先住民族アイ 津軽人の愚直可憐、 鳥のカヤキといふ工合に呼ぶのである。 貝 焼 の訛りで 卵味噌と連呼するに到つたのであるが、この卵味噌のカ 津軽に於いては、肉を煮るのに、帆立貝の大きい貝殻 津軽に於いては、牛鍋、鳥鍋の事をそれぞれ、牛の 見るべしである。さうして、つひには、 私

0 幼少

ヌの遺風ではなからうかと思はれる。

私たちは皆、このカヤキを

卵味 のである。 食べる原始的な料理であるが、実は、これは病人の食べるものな を使ひ、 人のそれである。これは私に於いても、Sさんと全く同様な事が もうたくさんですから、と拝むやうに頼んでSさんの家を辞去し 軽特有の料理の一つにはちがひなかつた。Sさんは、それを思ひ 食べて育つたのである。卵味噌のカヤキといふのは、その貝の鍋 読者もここに注目をしていただきたい。その日のSさんの接 噌をお粥に載せて食べるのである。けれども、これもまた津 私に食べさせようとして連呼してゐるのだ。私は奥さんに、 津軽人の愛情の表現なのである。しかも、 味噌に鰹節をけづつて入れて煮て、それに鶏卵を落して 病気になつて食がすすまなくなつた時、 このカヤキの 生粋の津軽

津軽 さうして何やらかやら、家中のもの一切合切持ち出して饗応して さんの如く、実質に於いては、到れりつくせりの心づかひをして、 遠方より来た場合には、どうしたらいいかわからなくなつてしま つづけるなどといふ芸当は私には出来ないのである。さうしてS に顔をしかめられる事がある。 にはある。食事中に珍客があらはれた場合に、私はすぐに箸を投 して電燈に頭をぶつけて電燈の笠を割つたりなどした経験さへ私 ふのである。ただ胸がわくわくして意味も無く右往左往し、さう ただ、お客に閉口させるだけの結果になつて、かへつて後で 口をもぐもぐさせながら玄関に出るので、かへつてお客 遠慮なく言ふ事が出来るのであるが、友あり お客を待たせて、心静かに食事を

殿みたいに、この愛情の過度の露出のゆゑに、どんなにいままで 料 薄めて服用しなければ、 遠といふ事になるのではあるまいか、と私はSさんに依つて私自 果ては自分の命までも、といふ愛情の表現は、 なるのである。ちぎつては投げ、むしつては投げ、 そのお客に自分の非礼をお詫びしなければならぬなどといふ事に かしく気の毒でならなかつた。津軽人の愛情の表現は、少し水で 身の宿命を知らされたやうな気がして、帰る途々、Sさんがなつ ちにはかへつて無礼な暴力的なもののやうに思はれ、 理を出すからなあ。 な 東京の人は、 ぶえんの 平 茸 ではないけれど、 ただ妙にもつたいぶつて、チョツピリづつ 他国の人には無理なところがあるかも知 関東、 取つて投げ、 関西の人た つひには敬 私 も木曾

津軽 132 か 東京の高慢な風流人たちに蔑視せられて来た事か。 い給へや。」とぞ責めたりける、 である。

「かい給へ、

決して粗野な野蛮人ではない。 ふだんは人一倍はにかみやの、 に優雅な、こまかい思ひやりを持つてゐる。その抑制が、 た津軽人の特徴である。 を思ひ出すと恥づかしくて酒を飲まずには居られなかつたといふ。 後 で聞いたが、Sさんはそれから一週間、 生粋の津軽人といふものは、ふだんは、 神経の繊細な人らしい。これもま なまなかの都会人よりも、 その日の卵味噌の事 はる 事 情に か

す形になってしまって、

依

なくなつて、「ぶえんの平茸ここにあり、とうとう。」といそが

軽薄の都会人に顰蹙せられるくやしい結

つて、どつと堰を破つて奔騰する時、どうしたらいいかわから

と答へたといふ。 ねたら、Sさんは、処女の如くはにかんで、「いいえ、まだ。」 そこへ一友人がたづねて行つて、 果になるのである。Sさんはその翌日、小さくなつて酒を飲み、 「どう? あれから奥さんに叱られたでせう?」と笑ひながら尋 Sさんの家を辞去してN君の家へ引上げ、N君と私は、さらに 叱られるつもりでゐるらしい。 外ヶ浜

またビールを飲み、その夜はT君も引きとめられてN君の家へ泊

津軽

134 る事になつた。三人一緒に奥の部屋に寝たのであるが、T君は翌

めがいそがしい様子である。 朝早々、 「咳をしてゐたね。」T君が起きて身支度をしながらコンコンと 私たちのまだ眠つてゐるうちにバスで青森へ帰つた。

起きてズボンをはきながら、 軽い咳をしてゐたのを、私は眠つてゐながらも耳ざとく聞いてへ んに悲しかつたので、起きるとすぐにN君にさう言つた。N君も 「うん、咳をしてゐた。」と厳粛な顔をして言つた。 酒飲みとい

くなつてゐるものである。 ふものは、酒を飲んでゐない時にはひどく厳粛な顔をしてゐるも のである。いや、顔ばかりではないかも知れない。心も、きびし 「あまり、いい咳ぢやなかつたね。」

を聞き取つてゐたのである。 N君も、さすがに、眠つてゐるやうではあつても、ちやんとそれ

のバンドをしめ上げ、「僕たちだつて、なほしたんぢやないか。」 気で押すさ。」とN君は突き放すやうな口調で言つて、ズボン N君も、私も、永い間、呼吸器の病気と闘つて来たのである。

N 君はひどい喘息だつたが、いまはそれを完全に克服してしまつ

た様子である。

ふあすに迫つてゐたので、私はその日一日と、それから翌る日一 或る雑誌に短篇小説を一つ送る事を約束してゐて、その締切がけ この旅行に出る前に、 満洲の兵隊たちのために発行されてゐる

日と、二日間、奥の部屋を借りて仕事をした。N君も、その間、

津軽 136 別棟の精米工場で働いてゐた。二日目の夕刻、 してゐる部屋へやつて来て、 N君は私の仕事を

「書けたかね。二、三枚でも書けたかね。

僕のはうは、

もう一時

すぐ工場のはうへ行き、十分も経たぬうちに、また私の部屋へや あとでまた遊ばうと思ふと気持に張合ひが出て、仕事の能率もぐ 間経つたら、完了だ。一週間分の仕事を二日でやつてしまつた。 んと上るね。もう少しだ。最後の馬力をかけよう。」と言つて、

工場だよ。見ないはうがいいかも知れない。まあ、 もいいんだ。君は、まだうちの工場を見た事が無いだらう。汚い つて来て、 「書けたかね。僕のはうは、もう少しだ。このごろは機械の調子 精を出さう。

け、 する巨大な精米機の傍に、 僕は工場のはうにゐるからね。」と言つて帰つて行くのである。 君は継ぎはぎだらけのコール天の上衣を着て、 つたのだ。 ぐ彼の仕事が終るから、終らないうちに見に来い、といふ謎であ 働いてゐる彼の甲斐甲斐しい姿を見せたいのに違ひない。もうす 鈍感な私も、やつと、その時、気がついた。N君は私に、工場で 私は、 道路を隔て別棟になつてゐる精米工場に出かけた。N 私はそれに気が附いて微笑した。いそいで仕事を片附 両腕をうしろにまはし、 目まぐるしく廻転 仔細らしい顔

「さかんだね。」と私は大声で言つた。

をして立つてゐた。

N君は振りかへり、それは嬉しさうに笑つて、

津軽 138 は 「仕事は、すんだか。よかつたな。 ひり給へ。下駄のままでいい。」と言ふのだが、 僕のはうも、もうすぐなんだ。 私は、 下駄

0)

が、 だ、 草履のやうなものも無かつたし、 ままで精米所へのこのこはひるほど無神経な男ではない。 それはN君をただ恐縮させるばかりの大袈裟な偽善的な仕草 にやにや、笑つてゐた。裸足になつてはひらうかとも思つた 清潔な藁草履とはきかへてゐる。そこらを見廻しても、 ・私は、 工場の門口に立つて、 N 君だ

常識的な善事を行ふに当つて、甚だてれる悪癖がある。 出来るね。」お世辞では無かつた。N君も、 「ずいぶん大がかりな機械ぢやないか。よく君はひとりで操縦が 似てゐるやうにも思はれて、 裸足にもなれなかつた。 私と同様、 科学的知 私には、

出

まくりして大盃を傾け、その大盃には家や土蔵がちよこんと載つ ターに目をとめた。お銚子の形の顔をした男が、あぐらをかき腕 てゐて、さうしてその妙な画には、「酒は身を飲み家を飲む」と ふと私は、工場のまん中の柱に張りつけられてある小さいポス

いふ説明の文句が印刷されてあつた。私は、そのポスターを永い

140 見つめてゐたので、N君も気がついたか、私の顔を見てにや

津軽

りと笑つた。

私もにやりと笑つた。

同罪の士である。

「どうもね

え。」といふ感じなのである。私はそんなポスターを工場の柱に

張つて置くN君を、いぢらしく思つた。誰か大酒を恨まざる、で

私の場合は、あの大盃に、私の貧しい約二十種類の著書が

ある。

載つてゐるといふ按配なのである。

私には、飲むべき家も蔵も無

「酒は身を飲み著書を飲む」とでも言ふべきところであらう。

なか操作がむづかしくて、どうも僕の手には負へないんだ。

あれは、

なあ、

縄を作る機械と、筵を作る機械なんだが、

なか

とN君に聞いたら、N君は幽かな溜息をついて、

の奥に、かなり大きい機械が二つ休んでゐる。

あれは何?

工場

ても、 ばつたんばつたんやつてみたのだが、僕は不器用だから、どうし ほそぼそと寝食ひさ。あの頃は、もう、どうなる事かと思つたね つて、いや、困つてねえ、毎日毎日、炉傍に坐つて煙草をふかし 五年前、この辺一帯ひどい不作で、精米の依頼もばつたり無くな Ν 君には、 いろいろ考へた末、こんな機械を買つて、この工場の隅で、 うまくいかないんだ。淋しいもんだつたよ。結局一家六人、 四歳の男の子がひとりある他に、死んだ妹さんの子

141 育て、自分の子供と全く同様に可愛がつてゐるのだ。奧さんの言 をなさつたので、N君夫妻は、この三人の遺児を当然の事として 供をも三人あづかつてゐるのだ。妹さんの御亭主も、北支で戦死

津軽 142 け、 伯父さん、と言つて玄関の戸を叩き、N君は飛び起きて玄関をあ 児のうち、 に依れば、 れて眠いでせうから、と言ひかけたら、「な、なにい!」と言つ んを温めろと、矢継早に用事を言ひつけ、奥さんは、この子は疲 矢鱈に叱り飛ばして、それ、砂糖湯を飲ませろ、餅を焼け、うど いて来たのか、と許り言つてものも言へず、さうして、奥さんを くてく歩いて夜中の十二時頃に蟹田の家へたどり着き、伯父さん、 で、その子が或る土曜日に青森から七里の道をバスにも乗らずて 無我夢中でその子の肩を抱いて、歩いて来たのか、へえ、歩 一番の総領は青森の工業学校にはひつてゐるのださう N君は可愛がりすぎる傾きさへあるさうだ。三人の遺

て頗る大袈裟に奥さんに向つてこぶしを振り上げ、あまりにどう

うやむやになつたといふ事などもあつたさうで、それもまた、N も珍妙な喧嘩なので、甥のその子が、ぷつと噴き出して、N君も 君の人柄の片鱗を示す好箇の挿話であると私には感じられた。 こぶしを振り上げながら笑ひ出し、奥さんも笑つて、何が何やら、

筵を織つてゐる侘しい姿が、ありありと眼前に見えるやうな気が の身の上とも思ひ合せ、ふつと涙ぐましくなつた。この善良な友 「七転び八起きだね。いろんな事がある。」と言つて私は、自分 馴れぬ手つきで、工場の隅で、ひとり、ばつたんばつたん

して来た。 その夜はまた、お互ひ一仕事すんだのだから、 私は、 この友人を愛してゐる。 などと言ひわけ

143 して二人でビールを飲み、郷土の凶作の事に就いて話し合つた。

津軽 144 なり持つてゐた。 Ν 君は青森県郷土史研究会の会員だつたので、 郷土史の文献をか

私に見せたが、そのペエジには次のやうな、津軽凶作の年表とで 「何せ、こんなだからなあ。」と言つてN君は或る本をひらいて

元和一年 元和二年 大凶 大凶

もいふべき不吉な一覧表が載つてゐた。

寛永十七年 寛永十八年 大凶 大凶

寛永十九年

凶

凶

明暦二年

元 元 元 貞 天 延 延 寛 寛 文 禄 禄 禄 享 和 宝 宝 二 十一 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年

大大大大大 大 大 大 大 大 人 区 区 区 区 区 区 区 区

半

寛延二年

大凶

寛政五年 寛政一年 天明六年 天明七年 天明三年 安永 宝 文化十年 寛政十一年 明 天明二年 和 五年 兀 年 年

天保七年 慶応二年 天保九年 明治二年 天保十年 明 明治二十二年 天保六年 天保四年 天保三年 治六年

大凶 凶 大 凶 大 凶 大 半 凶 凶 凶 凶 凶 凶 凶 昭和六年 大正二年 明治三十八年 明治三十五年 明治三十年 明治二十四年 大凶 大凶

凶

凶

凶

凶

凶

和十五年 半

凶

昭

津

ないだらう。大阪夏の陣、

昭和九年

凶

昭

和十年

軽の人でなくても、この年表に接しては溜息をつかざるを得

豊臣氏滅亡の元和元年より現在まで約

三百三十年の間に、 約六十回の凶作があつたのである。

津軽 頃、 を着用せり、 き募り、 が 月 見る事殆ど稀なり(中略) 三月上巳の節句に到れども積雪消えず農家にて雪舟用ゐたり。 らにまた、 に一度づつ凶作に見舞はれてゐるといふ勘定になるのである。 翌天保四年に到りては、立春吉祥の其日より東風頻に吹荒み、 故に竟に其儘植附けに着手したり。 武者の形あるいは竜虎の形などの極彩色の大燈籠を荷車 到り苗の生長僅かに一束なれども時節の階級避くべからざる 六月土用に入りても密雲冪々として天候朦々晴天白日を N君はべつな本をひらいて私に見せたが、 夜は殊に冷にして七月佞武多(作者註。 毎日朝夕の冷気強く六月土用中に綿入 然れども連日の東風 それ 陰暦七夕の には、 弥 Z z

吹

Ŧi.

載

頗る

同

甚だ稀なり、 歟。)の頃に到りても道路にては蚊の声を聞かず、 れと似たる風俗あり。東北の夏祭りの山車と思はば大過なからん 事必ずあり。 歩く津軽年中行事の一つである。 の説あれども、なほ信ずるに足らず。 見せびらかして山中の蝦夷をおびき寄せ之を殱滅せし遺風なりと 三日頃より早稲大いに出穂ありし為人気頗る宜しく盆踊りも かなりしが、同十五日、十六日の日光白色を帯び恰も夜中の鏡 聊か之を聞く事あれども蚊帳を用うるを要せず蝉声の如きも 若い衆たちさまざまに扮装して街々を踊りながら練り 七月六日頃より暑気出で盆前単衣物を着用す、 坂 上田村麻呂、 蝦夷征伐の折、このやうな大燈籠を 他町の大燈籠と衝突して喧嘩の 津軽に限らず東北各地にこ 家屋の内に於

津軽 152 į, に 頃にも、 他には全く言ひやうのない有様が記されてあつて、 往来老若之を見る者涕泣充満たり。」といふ、あはれと言ふより 々 暁方に及べる時、 似たり、 飢渇の訛りかも知れない。)の酸鼻戦懐の状を聞き、きかっ 老人たちからケガヅ(津軽では、 同十七日夜半、 図らざりき厚霜を降らし出穂の首傾きたり、 踊児も散り、 来往の者も稀疎にして追 凶作の事をケガヅと言 私たちの幼い 幼いな

がらも暗憺たる気持になつて泣きべそをかいてしまつたものだが、 久し振りで故郷に帰り、このやうな記録をあからさまに見せつけ 「これは、 哀愁を通り越して何か、わけのわからぬ憤怒さへ感ぜられ いかん。」と言つた。 「科学の世の中とか何とか偉さ

しつた。 があるんだねえ。」 られて、今では、昔のやうに徹底した不作など無くなつたけれど やうに品種が改良されてもゐるし、 やる事も出来ないなんて、だらしがねえ。」 も、でも、それでも、やつぱり、四、 うな事を言つてたつて、こんな凶作を防ぐ法を百姓たちに教へて 「だらしが無え。」私は、 N君は笑つて、 技師たちもいろいろ研究はしてゐるのだ。 誰にとも無き忿懣で、 植附けの時期にも工夫が加へ 五年に一度は、いけない時 口を曲げてのの 冷害に堪へる

153 沙漠の中で生きてゐる人もあるんだからね。怒つたつて仕様が

で、

あ

んまり結構な人情でもないね。

春風駘蕩たるところが無いん

津軽 154 ないよ。こんな風土からはまた独得な人情も生れるんだ。」

「それでも君は、負けないぢやないか。津軽地方は昔から他国の

僕なんか、いつでも南国の芸術家には押され気味だ。」

者に攻め破られた事が無いんだ。殴られるけれども、負けやしな 生 れ落ちるとすぐに凶作にたたかれ、 第八師団は国宝だつて言はれてゐるぢやないか。」 雨露をすすつて育つた私

たちの祖先の血が、いまの私たちに伝はつてゐないわけは無 風駘蕩の美徳もうらやましいものには違ひないが、私はやはり

するより他には仕方がないやうだ。いたづらに過去の悲惨に歎息 祖 先 のかなしい血に、出来るだけ見事な花を咲かせるやうに努力

私は

で

囲気の

佐 .藤弘といふ理学士の快文章であるが、

津軽 156 を消すために、 してちよつと借用して見よう。 なほまた私たち津軽人の明るい出発の乾盃の辞と 佐藤理学士の奥州産業総説に曰く、 私のこの書の読者の憂鬱

阻害してゐる奧州、 し奥州、 |撃てば則ち草に匿れ、追へば即ち山に入つた蝦夷族の版図たり 山岳重畳して到るところ天然の障壁をなし、 風波高く海運不便なる日本海と、 北上山脈に 以て交通を

奥州。 さへぎられて発達しない鋸歯状の岬湾の多い太平洋とに包まれ しかも冬期降雪多く、 本州中で一番寒く、 古来、 数十回の た

然的条件に支配されてゐるその奥州は、さて、六百三十万の人口 わづかに一割半を占むる哀れなる奥州。どこから見ても不利な自 凶作に襲来されたといふ奥州。 九州の耕地面積二割五分に対して、

を養ふに、今日いかなる産業に拠つてゐるであらうか。

どの地理書を繙いても、奥州の地たるや本州の東北端に僻在し、

いづれも粗樸、とある。

古来からの茅葺、

柾葺、杉

皮葺は、 ふろしきを被つて、もんぺいをはき、中流以下悉く粗食に甘んじ とにかくとして、 現在多くの民は、 トタン葺の家に住み、

れてゐないのであらうか。高速度を以て誇りとする第二十世紀の てゐる、といふ。真偽や如何。それほど奥州の地は、 産業に恵ま

れ 文明は、 と欲すれば、まづ文芸復興直前のイタリヤに於いて見受けられた は既に過去の奥州であつて、人もし現代の奥州に就いて語らん ひとり東北の地に到達してゐないのであらうか。

157 あの鬱勃たる擡頭力を、この奥州の地に認めなければならぬ。文 の日に日に盛大におもむく事を。 御光を与へ、而して、いまや見よ、 刻と増加することを。そして改良また改善、 まして況んや、 開発また開拓、 牧畜、 住民の分布薄疎 膏田沃野の刻 林業、 漁業

促し、

嘗ての原始的状態に沈淪した蒙昧な蛮族の居住地に教化の

奥州人特有の聞きぐるしき鼻音の減退と標準語の進出とを

して、

の地方をさまよひ歩くが如く、 むく鳥、 鴨、 四十雀、 雁などの渡り鳥の大群が、 膨脹時代にあつた大和民族が各地 食を求めてこ

てをや。

将来の発展の余裕、

また大いにこの地にありといふに於

軽の平

く緑の大平原には毛並輝く見事な若駒を走らせ、

出漁の船は躍る

東

北の

銀鱗を満載して港にはひるのである。」

津軽 ヶ浜を北上したのであるが、出発に先立ち、まづ問題は酒であつ くなるくらゐのものだ。さて私はその翌日、 まことに有難い祝辞で、 思はず駈け寄つてお礼の握手でもした N君の案内で奥州外

も入れて置きませうか?」と、奥さんに言はれて、 「お酒は、どうします? リユツクサツクに、ビールの二、三本 私は、 まつた

た。

種族の男に生れて来たか、と思つた。 く、冷汗三斗の思ひであつた。なぜ、酒飲みなどといふ不面目な

などと、しどろもどろの不得要領なる事を言ひながらリユツクサ いいです。無ければ無いで、また、それは、べつに。」

実感をそのまま言つた。N君も同じ思ひと見えて、顔を赤くし、 ツクを背負ひ、逃げるが如く家を出て、後からやつて来たN君に、 「いや、どうも。酒、と聞くとひやつとするよ。針の筵だ。」と

少しづつ集めて置くつて言つてゐたから、今別にちよつと立寄ら まずには居られないんだ。今別のMさんが配給のお酒を近所から 「僕もね、ひとりぢや我慢も出来るんだが、君の顔を見ると、 飲

うふふと笑ひ、

うぢやないか。」

私は複雑な溜息をついて、

「みんなに苦労をかけるわい。」と言つた。

はじめは蟹田から船でまつすぐに竜飛まで行き、帰りは徒歩と

津軽 162 バスといふ計画であつたのだが、その日は朝から東風が強く、 なつてしまつたので、 天といつていいくらゐの天候で、 予定をかへて、バスで出発する事にし 乗つて行く筈の定期船は欠航に

青空も見えて来て、このぶんならば定期船も出るのではなからう かと思はれた。 とにかく、今別のMさんのお家へ立寄り、 船が出

来た。

外ヶ浜街道を一時間ほど北上したら、次第に風も弱くなり、

空いてゐて、二人とも楽に腰かける事が出

たの

荒

である。バスは案外、

ざまの風景を指差して説明してくれたが、もうそろそろ要塞地帯 るやうだつたら、 いふ事にした。 つまらない事のやうに思はれた。N君はバスの窓から、さま 往きも帰りも同じ陸路を通るのは、 お酒をもらつてすぐ今別の港から船に乗らうと 気がきかなく

や、 せられた京の名医橘南谿の東遊記には、「 天 地 ひらけしよりこ ツペ、外マツペ、イマベツ、ウテツなどいふ所有り。 には変名多し。外ヶ浜通りの村の名にもタツピ、ホロヅキ、 屋玖国とて異国のやうに聞え、奥州も半ば蝦夷人の領地なりしに は奥州の外ヶ浜まで号令の行届かざるもなし。往古は屋玖の島は 来たせゐか、どの村落も小綺麗に明るく見えた。寛政年間に出版 ち書き記すのは慎しむべきであらう。とにかく、この辺には、 に近づいてゐるのだから、そのN君の親切な説明をここにいちい かた今の時ほど太平なる事はあらじ、西は鬼界屋玖の嶋より東 蝦夷の栖家の面影は少しも見受けられず、お天気のよくなつて 猶近き頃まで夷人の住所なりしと見えて南部、 津軽辺の地名 是皆蝦夷詞 内マ

津軽 雪いまいづこなどといふ嘆を発するかも知れない。南谿の東遊記 地下の南谿を今日この坦々たるコンクリート道路をバスに乗せて 辺に限らず、 なり。今にても、ウテツなどの辺は風俗もやや蝦夷に類して津軽 その凡例にも、 西遊記は江戸時代の名著の一つに数へられてゐるやうであるが、 通らせたならば、呆然たるさまにて首をひねり、或いは、こぞの はもつともの事なり。」と記されてあるが、それから約百五十年、 とくいひなし居る事とぞ思はる。故に礼儀文華のいまだ開けざる 早く皇化に浴して風俗言語も改りたる所は、先祖より日本人のご の人も彼等はエゾ種といひて、いやしむるなり。 南部、津軽辺の村民も大かたはエゾ種なるべし。只 「予が漫遊もと医学の為なれば医事にかかれるこ 余思ふにウテツ

てゐ 館をのが 津 稽 実を正さず、 海底の岩の上に置て順風を祈りしに、 か 中見聞せる事を筆のついでにしるせるものにして、 とは雑談といへども別に記録して同志の人にも示す。 りし 軽 奥州三馬屋(作者註。 に似た記事も少しとしないと言つてよい。 領外ヶ浜にありて、 例をこの外ヶ浜近辺に就いての記事だけに限つて言つても、 る如く、 かば数日逗留し、 れ蝦夷へ渡らんと此所迄来り給ひしに、 読者の好奇心を刺戟すれば足るといふやうな荒唐無 誤りしるせる事も多かるべし。」とみづから告白 あまりにたへかねて、 日本東北の限りなり。 三厩の古称。)は、 忽ち風かはり恙なく松前の 松前渡海の津にて、 他の地方の事は言は むかし源義経、 所持の観音の像を 渡るべき順風な 強て其事の虚 只此書は旅

津軽 166 た、 海 く行けば、朱谷あり。 巌石海に突出たる所あり、 るなりとぞ。」と、 地 る所の海の小石までも多く朱色なり。 是義経の馬を立給ひし所となり。是によりて此地を三馬屋と称す といふ。 石 に落る。 に渡り給ひぬ。 の朝日に映ずるいろ誠に花やかにして目さむる心地す。 「奥州津軽の外ケ浜に平館といふ所あり。此所の北にあたり 又波打際に大なる岩ありて馬屋のごとく、穴三つ並べり。 此谷の土石皆朱色なり。水の色までいと赤く、 其像今に此所の寺にありて義経の風祈りの観音 何の疑ひもさしはさまずに記してあるし、ま 山々高く聳えたる間より細き谷川流れ出て 是を石崎の鼻といふ。 北辺の海中の魚皆赤しと云。 其所を越えて暫 ぬれた 其落

谷にある所の朱の気によりて、海中の魚、

或は石までも朱色なる

てゐるかと思ふと、また、おきなと称する怪魚が北海に住んでゐ

こと無情有情ともに是に感ずる事ふしぎなり。」と言つてすまし

167

其頃風も静に雨も遠か

扨も此二三十年以前松

囲炉裏にまとゐ

四

津軽 168 が 白にして雪の山の如きもの遥に見ゆ。 ちて東西に飛行し玉ふ。 其姿も亦大なるもあり小きもあり、 ぐひに打乗り、 にて馬上に見ゆるもあり、或は竜に乗り雲に乗り、 五日前に到れば白昼にもいろいろの神々虚空を飛行し給ふ。 々 光り物して東西に虚空を飛行するものあり、 程もいひくらすうちに、ある夕暮、沖の方を見やりたるに、真 みたり。不思議なる事にてまのあたり拝み奉ることよと四五日 只何となく空の気色打くもりたるやうなりしに、 白き装束なるもあり、赤き青き色々の出立にて、 我々も皆外へ出て毎日々々いと有難くを 異類異形の仏神空中にみちみ あれ見よ、又ふしぎなるも 漸々に甚敷、 或は犀象のた 夜々折 衣冠 其

のの海中に出来たれといふうちに、だんだんに近く寄り来りて、

書き写し、そのお伽噺みたいな雰囲気にひたつてみるのも一興と

ぬ。」などといふ、もつたいないやうな、また夢のやうな事も、 めして此地を逃去り給ひしなるべしといひ合て恐れ侍りぬと語り 扨こそ初に神々の雲中を飛行し給ひけるは此大変ある事をしろし 底のみくづと成れば、生残る人民、 すは津波こそ、はや逃げよ、と老若男女われさきにと逃迷ひしか 近く見えし嶋山の上を打越して来るを見るに大浪の打来るなり。 と思はれるし、荒唐無稽とは言つても、せめて古人の旅行記など 辺の風景に就いては、この際、あまり具体的に書かぬはうがよい 平易の文章でさらさらと書き記されてゐるのである。 しばしが間に打寄て、民屋田畑草木禽獣まで少しも残らず海 海辺の村里には一人もなし、 現在のこの

津軽 170 思はれて、実は、 わけでもあつたのだが、ついでにもう一つ、小説の好きな人には 東遊記の二三の記事をここに抜書きしたといふ

殊にも面白く感ぜられるのではあるまいかと思はれる記事

が

ある

と頻りに吟味せし事あり。 「奥州津軽の外ヶ浜に在りし頃、所の役人より丹後の人は居ずや いかなるゆゑぞと尋ぬるに、

から紹介しよう。

地に入る時は天気大きに損じて風雨打続き船の出入無く、 城 山 の神はなはだ丹後の人を忌嫌ふ、もし忍びても丹後はきゃま 津軽の岩 津 の人此 异軽領

れば、 は ければ、 なはだ難儀に及ぶとなり。余が遊びし頃も打続き風悪しかりけ 丹後の人の入りて居るにやと吟味せしこととぞ。天気あし いつにても役人よりきびしく吟味して、もし入込み居る

然るに、

差当りたる天気にさはりあることなれば、

一国こぞ

皆多

風 ばとて安寿姫を祭る。此姫は丹後の国にさまよひて、 敷尋ね問ふに、当国岩城山の神と云ふは、 安 寿 姫 出生の地なれ くは漁猟又は船の通行にて世渡ることなれば、 夫にくるしめられしゆゑ、今に至り、 あまりあやしければ、 三馬屋、 ふのみならず、 天気たちまち晴て風静に成なり。 雨を起し岩城の神荒れ玉ふとなり。 は急に送り出すこととなり。 そのほか外ヶ浜通り港々、 役人よりも毎度改むる事、 いかなるわけのありてかくはいふ事ぞと委 丹後の人、 土俗の、 最も甚敷丹後の人を忌嫌ふ。 外ヶ浜通り九十里余、 其国の人といへば忌嫌ひて 珍らしき事なり。 津軽領の界を出れば、 いひならはしにて忌嫌 常々最も順風を願

津軽 172 南部等にても港々にては多くは丹後人を忌みて送り出す事なり。 つて丹後の人を忌嫌ふ事にはなりぬ。 此説、 隣境にも及びて松前

か まの京都府の北部であるが、あの辺の人は、この時代に津軽へ ばかり人の恨は深きものにや。」 へんな話である。丹後の人こそ、いい迷惑である。 丹後の国は、

ゐるし、 姫と厨子王の話は、 また鴎外の傑作「山椒大夫」の事は、小説の好きな人な 私たちも子供の頃から絵本などで知らされて

来たら、

ひどいめに遭はなければならなかつたわけである。

知られてゐないやうであるが、 生れで、さうして死後岩木山に祭られてゐるといふ事は、 ら誰でも知つてゐる。けれども、あの哀話の美しい姉弟が津軽の 実は、 私はこれも何だか、 あやし あまり

共にさまよひ、 者あり。 は 自信ありげに書き出してゐるが、おしまひのはうに到つて、「岩 国に二子あり。 - 岩城山権現 の条にも出てゐる。三才図会は漢文で少し読みにくいはきさんごんげん れない。 といふことを、平気で書いてゐる南谿氏の事だから、これも或い 魚が泳いでゐるとか、石の色が溶けて川の水も魚の鱗も赤いとか れいの「強ひて其事の虚実を正さず」式の無責任な記事かも知 話だと思つてゐるのである。義経が津軽に来たとか、三里の大 「相伝ふ、昔、当国(津軽)の領主、岩城判官正氏といふ もつとも、この安寿厨子王津軽人説は、 永保元年の冬、 出羽を過ぎ、越後に到り直江の浦云々。」などと 姉を安寿と名づく。弟を津志王丸と名づく。 在京中、 讒者の為に西海に謫せらる。 和漢三才図会の

母と

173

津軽 174 ゐ る。 れる。 が入込めば津軽の天候が悪化するとまで思ひつめてゐたとは、 ある事を堅く信じ、につくき山椒大夫を呪ふあまりに、 たち安寿厨子王の同情者にとつては、 外の「山椒大夫」には、「岩代の信夫郡の住家を出て」と書いて とおのづから語るに落ちるやうな工合になつてしまつてゐる。 城と津軽の岩城山とは南北百余里を隔て之を祭るはいぶかし。 「いはしろ」と読んだりして、ごちやまぜになつて、たうとう津 の岩木山がその伝説を引受ける事になつたのではないかと思は しかし、 つまりこれは、岩城といふ字を、「いはき」と読んだり 昔の津軽の人たちは、 痛快でない事もないのであ 安寿厨子王が津軽の子供で 丹後の人

る。

私

当つてゐない事もある。作家や新聞記者等の出現は、 やないかな?と思つてしまふ癖がある。当つてゐる事もあるし、 を見ると、私はすぐに、ああ、これは、僕の事で喧嘩をしたんぢ 千に近いやうである。 お昼頃、 お元気が無いやうに見受けられた。よその家庭のこのやうな様子 明るく、 外ヶ浜の昔噺は、これ位にしてやめて、さて、私たちのバスは 奥さんが出て来られて、留守です、とおつしやる。ちよつと とかく不安の感を起させ易いものである。その事は、作家に 近代的とさへ言ひたいくらゐの港町である。人口も、 Mさんのゐる今別に着いた。今別は前にも言つたやうに、 N君に案内されて、Mさんのお家を訪れ 善良の家庭

とつても、かなりの苦痛になつてゐる筈である。この苦痛を体験

津軽 した事のない作家は、馬鹿である。 「どちらへ、いらつしやつたのですか?」とN君はのんびりして

ていただきます。」玄関の式台に腰をおろした。

ある。 る。

リユツクサツクをおろして、「とにかく、ちよつと休ませ

「呼んでまゐります。」

院のはうですか?」 「え、さうかと思ひます。」美しく内気さうな奥さんは、小さい

「はあ、すみませんですな。」N君は泰然たるものである。

病

声で言つて下駄をつつかけ外へ出て行つた。Mさんは、今別の或

る病院に勤めてゐるのである。

私もN君と並んで式台に腰をおろし、Mさんを待つた。

「よく、打合せて置いたのかね。」

「うん、まあね。」N君は、落ちついて煙草をふかしてゐる。

「あいにく昼飯時で、いけなかつたね。」私は何かと気をもんで

ゐ た。

「いや、 僕たちもお弁当を持つて来たんだから。」と言つて澄ま

してゐる。西郷隆盛もかくやと思はれるくらゐであつた。 Mさんが来た。はにかんで笑ひながら、

「さ、どうぞ。」と言ふ。

「いや、さうしても居られないんです。」とN君は腰をあげて、

「船が出るやうだつたら、すぐに船で竜飛まで行きたいと思つて

177

ゐるのです。」

「さう。」Mさんは軽く首肯き、「ぢやあ、出るかどうか、ちよ

津軽 つと聞いて来ます。」 Mさんがわざわざ波止場まで聞きに行つてくれたのだが、

船は

やはり欠航といふ事であつた。

せず、「それぢや、ここでちよつと休ませてもらつて弁当を食べ 「仕方が無い。」たのもしい私の案内者は別に落胆した様子も見

るか。」

「うん、ここで腰かけたままでいい。」私はいやらしく遠慮した。

「あがりませんか。」Mさんは気弱さうに言ふ。

きはじめた。「ゆつくり、次の旅程を考へませう。」 「あがらしてもらはうぢやないか。」N君は平気でゲートルを解

私たちはMさんの書斎に通された。小さい囲炉裏があつて、炭

案を下した南谿氏も、ここに到つて或いは失神するかも知れない。 文華のいまだ開けざるはもつともの事なり。」と自信ありげに断 火がパチパチ言つておこつてゐた。書棚には本がぎつしりつまつ てゐて、ヴアレリイ全集や鏡花全集も揃へられてあつた。「礼儀

で顔を赤くしてさう言つた。「飲みませう。」 「お酒は、あります。」上品なMさんは、かへつてご自分のはう

「いやいや、ここで飲んでは、」と言ひかけて、N君は、うふふ

と笑つてごまかした。

なる酒は、また別に取つて置いてありますから。」 「それは大丈夫。」とMさんは敏感に察して、「竜飛へお持ちに

179

んでは、

津軽 180 「ほほ、 」とN君は、はしやいで、「いや、しかし、 いまから飲

けふのうちに竜飛に到着する事が出来なくなるかも、」

などと言つてゐるうちに、奥さんが黙つてお銚子を持つて来た。

して怒つてゐるのでは無いかも知れない、と私は自分に都合のい この奥さんは、もとから無口な人なのであつて、別に僕たちに対

案した。 「それぢや酔はない程度に、少し飲まうか。」とN君に向つて提

いやうに考へ直し、

「飲んだら酔ふよ。」N君は先輩顔で言つて、「けふは、これあ、

三厩泊りかな?」 「それがいいでせう。けふは今別でゆつくり遊んで、 三厩までだ

ので、たうとう私は、Mさんからその本を借りて、いい加減にぱ

「ちよつと、その本を貸して。」どうも気になつて落ちつかない

つてたつて楽に行けます。」とMさんもすすめる。けふは三厩一 つたら歩いて、まあ、ぶらぶら歩いて一時間かな? どんなに酔

泊ときめて、私たちは飲んだ。

するMさんの信頼はいささかも動揺しなかつたものと見える。 0) 事であつた。愛読者といふものは偉いもので、私があの日、 年配の作家の随筆集が、Mさんの机の上にきちんと置かれてゐる つあつた。それは私が蟹田でつい悪口を言つてしまつたあの五十 観瀾山であれほど口汚くこの作家を罵倒しても、この作家に対 私には、 この部屋へはひつた時から、こだはつてゐたものが一 蟹田

津軽 182 を拾つて凱歌を挙げたかつたのであるが、私の読んだ箇所は、 つと開いて、その箇所を鵜の目鷹の目で読みはじめた。何かアラ

すきが無いのである。私は、黙つて読んだ。一ページ読み、二ペ ージ読み、三ページ読み、たうとう五ページ読んで、それから、

の作家も特別に緊張して書いたところらしく、さすがに打ち込む

「いま読んだところは、少しよかつた。しかし、 他の作品には悪

本を投げ出した。

いところもある。」と私は負け惜しみを言つた。

「装釘が豪華だからなあ。」と私は小さい声で、さらに負け惜し Mさんは、うれしさうにしてゐた。

みを言つた。「こんな上等の紙に、こんな大きな活字で印刷され

寺に弟子入して、のち磐城平、

専称寺に修業する事十五年、二十

たいていの文章は、立派に見えるよ。」

ある。 る。 凱歌などを奏するよりは、どんなに、いい気持のものかわからな Mさんは相手にせず、ただ黙つて笑つてゐる。 いい文章を読んで、ほつとしてゐたのである。 けれども私は本心は、そんなに口惜しくもなかつたのであ 勝利者の微笑で アラを拾つて

ウソぢやない。私は、いい文章を読みたい。

はち、 の事は、 坊主が、ここの住職だつたので知られてゐるのである。 今別には本覚寺といふ有名なお寺がある。貞伝和尚といふ偉い 「貞伝和尚は、今別の新山甚左衛門の子で、早く弘前誓願 竹内運平氏著の青森県通史にも記載せられてある。 貞伝和尚 すな

津軽 も及び、 尚なんかはね、仏の教へを説くのは後まはしにして、 貞伝和尚なんかはね、」とN君は、かなり酔つてゐた。「貞伝和 ンテコなところがある。だから、いつまで経つても有名にならん。 かうぢやないか、と外ヶ浜の案内者N町会議員は言ひ出した。 いふやうな事が記されてある。そのお寺を、これから一つ見に行 二歳に到る間、 九歳の時より津軽今別、本覚寺の住職となつて、享保十六年四十 「文学談もいいが、どうも、君の文学談は一般向きでない 南部、 享保十二年、 秋田、松前地方の善男善女の雲集参詣を見た。」と 其教化する処、 、金銅塔婆建立の供養の時の如きは、 津軽地方のみならず近隣の国 まづ民衆の 領内は

生活の福利増進を図つてやつた。さうでもなくちや、

民衆なんか、

私たちの重い尻を上げさせてしまつた。 る文学談をしてゐたかつた。Mさんも、さうらしかつた。けれど 和尚は、 で一緒に見に行かうぢやないか。」 見てゐないんだ。いい機会だから、けふは見に行きたい。みんな かく行つて見よう。今別へ来て本覚寺を見なくちや恥です。貞伝 仏の教へも何も聞きやしないんだ。貞伝和尚は、或いは産業を興 私は、ここで飲みながらMさんと、所謂ヘンテコなところのあ 或いは、」と言ひかけて、ひとりで噴き出し、「まあ、とに N君の貞伝和尚に対する情熱はなかなかのもので、たうとう 外ヶ浜の誇りなんだ。さう言ひながら、実は、僕もまだ

185 「それぢや、その本覚寺に立寄つて、それからまつすぐに三厩ま

津軽 を巻き附けながら、 で歩いて行つてしまはう。」私は玄関の式台に腰かけてゲートル 「どうです、あなたも。」と、 Mさんを誘つ

「はあ、 三厩までお供させていただきます。」

の宿で蟹田町政に就いて長講一席やらかすんぢやないかと思つて、 「そいつあ有難い。この勢ひぢや、町会議員は今夜あたり、三厩 心強い。

実は、 奥さん、 憂鬱だつたんです。 御主人を今夜、お借りします。」 あなたが附合つてくれると、

「はあ。」とだけ言つて、微笑する。少しは慣れた様子であつた。

いや、あきらめたのかも知れない。

私たちはお酒をそれぞれの水筒につめてもらつて、 大陽気で出

私たちは、 と言ひ、 頗るうるさかつたのである。お寺の屋根が見えて来た頃、 | 魚売の小母さんに出逢つた。 曳いてゐるリヤカーには、

発した。さうして途中も、N君は、テイデン和尚、テイデン和尚、

さまざまのさかなが一ぱい積まれてゐる。

私は二尺くらゐの鯛を

見つけて、 「その鯛は、いくらです。」まるつきり見当が、つかなかつた。

「一円七十銭です。」安いものだと思つた。

私は、つい、買つてしまつた。けれども、買つてしまつてから、

仕末に窮した。これからお寺へ行くのである。二尺の鯛をさげて

お寺へ行くのは奇怪の図である。私は途方にくれた。

187 「つまらんものを買つたねえ。」とN君は、口をゆがめて私を軽

津軽

188 蔑した。 「そんなものを買つてどうするの?」

らつて、大きいお皿に載せて三人でつつかうと思つてね。」 三厩の宿へ行つて、これを一枚のままで塩焼きにしても

言か何かみたいだ。」 「どうも、君は、ヘンテコな事を考へる。それでは、まるでお祝

「でも、一円七十銭で、ちよつと豪華な気分にひたる事も出来る

んだから、 有難いぢやないか。」

下手な買ひ物をした。」 「有難かないよ。一円七十銭なんて、この辺では高い。 実に君は

「さうかねえ。」私は、しよげた。

たうとう私は二尺の鯛をぶらさげたまま、 お寺の境内にはひつ

「どうしませう。」と私は小声でMさんに相談した。「弱りまし

て新聞紙か何かもらつて来ませう。ちよつと、ここで待つてゐて 「さうですね。」Mさんは真面目な顔して考へて、「お寺へ行つ

Mさんはお寺の庫裏のはうに行き、やがて新聞紙と紐を持つて

来て、 問題の鯛を包んで私のリユツクサツクにいれてくれた。 私

は、 れた建築とも見えなかつた。 ほつとして、お寺の山門を見上げたりなどしたが、別段すぐ

189 「たいしたお寺でもないぢやないか。」と私は小声でN君に言つ

19

津軽 「いやいや、いやいや。外観よりも内容がいいんだ。とにかく、

お寺へはひつて坊さんの説明でも聞きませう。」

から、実にひどいめに逢つた。お寺の坊さんはお留守のやうで、 私は気が重かつた。しぶしぶN君の後について行つたが、それ

内してくれて、それから、長い長い説明がはじまつた。私たちは、 五十年配のおかみさんらしいひとが出て来て、私たちを本堂に案

とすると、N君は膝をすすめて、 である。 説明がちよつと一区切ついて、やれうれしやと立上らう

きちんと膝を折つて、かしこまつて拝聴してゐなければならぬの

「しからば、さらにもう一つお尋ねいたしますが、」と言ふので

ある。 になつたものなのでせうか。」 「いつたい、このお寺はテイデン和尚が、いつごろお作り

開山、 なさつたのではございませんよ。貞伝上人様は、このお寺の中興 「何をおつしやつてゐるのです。 貞伝上人様はこのお寺を御草創 五代目の上人様でございまして、――」と、またもや長い

「さうでしたかな。」とN君は、きよとんとして、「しからば、

説明が続く。

尚と言つた。まつたく滅茶苦茶である。 さらにお尋ねいたしますが、このテイザン和尚は、」テイザン和

191 老婦人の膝との間隔が紙一重くらゐのところまで進出して、一問 N君は、ひとり熱狂して膝をすすめ膝をすすめ、つひにはその

津軽 192 これから三厩まで行けるかどうか、心細くなつて来た。 一答をつづけるのである。そろそろ、あたりが暗くなつて来て、

「あそこにありまする大きな見事な額は、その大野九郎兵衛様の「あそこにありまする大きな見事な額は、その大野九郎兵衛様の

お書きになつた額でございます。」 「さやうでございますか。」とN君は感服し、「大野九郎兵衛様

「ご存じでございませう。忠臣義士のひとりでございます。」忠

と申しますと、――」

臣義士と言つたやうである。「あのお方は、この土地でおなくな

御信仰の厚いお方でございましたさうで、このお寺にもたびたび

りになりまして、おなくなりになつたのは、四十二歳、たいへん

莫大の御寄進をなされ、――」

言ふと、 立ち上つたのであるが、あとで聞いてみると、おかみさんの話を 話を承りました。」とおかみさんにおあいそを言つて、やうやく をしてそれからN君に向つて、 内ポケツトから白紙に包んだものを差出し、黙つて丁寧にお辞儀 一つも記憶してゐないといふ。私たちは呆れて、 「あんなに情熱的にいろんな質問を発してゐたぢやないか。」と 「はあ、いや、帰りませう。」とN君は鷹揚に言ひ、「結構なお 「そろそろ、おいとまを。」と小さい声で言つた。 Mさんはこの時たうとう立ち上り、おかみさんの前に行つて、

「いや、すべて、うはのそらだつた。何せ、ひどく酔つてたんだ。

193

津軽 194 のお 僕は君たちがいろいろ知りたいだらうと思つて、がまんして、 かみの話相手になってやつてゐたんだ。 僕は犠牲者だ。」つ

あ

まらない犠牲心を発揮したものである。

なくらゐ上等である。 小綺麗な部屋に案内された。外ヶ浜の宿屋は、みな、 三厩の宿に着いた時には、もう日が暮れかけてゐた。 部屋から、すぐ海が見える。 小雨が降りは 町に不似合 表二階の

じめて、

海は白く凪いでゐる。

渡し、 まう。」私はリユツクサツクから鯛の包みを出して、 「わるくないね。 「これは鯛ですけどね、これをこのまま塩焼きにして持つ 鯛もあるし、 海の雨を眺めながら、 ゆ 女中さんに つくり飲

はあ、とだけ言つて、ぼんやりその包を受取つて部屋から出て行 この女中さんは、あまり悧巧でないやうな顔をしてゐて、ただ、

感じたのであらう。呼びとめて念を押した。「そのまま塩焼きに 「わかりましたか。」N君も、私と同様すこし女中さんに不安を

つた。

するんですよ。三人だからと言つて、三つに切らなくてもいいの

たか。」N君の説明も、あまり上手とは言へなかつた。女中さん ですよ。ことさらに、三等分の必要はないんですよ。わかりまし

は、やつぱり、はあ、と頼りないやうな返辞をしただけであつた。 やがてお膳が出た。 鯛はいま塩焼にしてゐます、お酒はけふは

195 無いさうです、とにこりともせずに、れいの、悧巧さうでない女

中さんが言ふ。

津軽 「仕方が無い。 持参の酒を飲まう。」

みませんがお銚子を二本と盃を三つばかり。」 「さういふ事になるね。」とN君は気早く、水筒を引寄せ、 ことさらに三つとは限らないか、などと冗談を言つてゐるうち

白茶けて皿に載つてゐるのである。私は決して、たべものにこだ 注意が、 はつてゐるのではない。食ひたくて、二尺の鯛を買つたのではな 骨もなく、ただ鯛の切身の塩焼きが五片ばかり、何の風情も無く 鯛が出た。ことさらに三つに切らなくてもいいといふN君の 実に馬鹿々々しい結果になつてゐたのである。 頭も尾も

読者は、わかつてくれるだらうと思ふ。私はそれを一尾の原

ある。 を踏む思ひであつた。 だ)を眺めて、私は、泣きたく思つた。せめて、刺身にでもして もへんだつたが、そんなら五つに切りませうと考へるこの宿の者 それを眺めながらお酒を飲み、ゆたかな気分になりたかつたので 形のままで焼いてもらつて、さうしてそれを大皿に載せて眺めた もらつたのなら、まだ、あきらめもつくと思つた。頭や骨はどう 切れのやきざかな(それはもう鯛では無い、単なる、やきざかな の無神経が、癪にさはるやら、うらめしいやら、私は全く地団駄 かつたのである。食ふ食はないは主要な問題でないのだ。 「つまらねえ事をしてくれた。」お皿に愚かしく積まれてある五 ことさらに三つに切らなくてもいい、といふN君の言ひ方 私は、

「怒るなよ、おいしいぜ。」人格円満のN君は、 平気でそのやき

料理法も何も知りやしない。

僕は、 るから、 ざかなに箸をつけて、さう言つた。 んな蟹田町会の予算総会で使ふやうな気取つた言葉で註釈を加へ 「さうかね。それぢや、君がひとりで全部たべたらいい。食へよ。 君が悪いんだ。ことさらに三等分の必要は無い、 食はん。こんなもの、馬鹿々々しくつて食へるか。だいた あの間抜けの女中が、まごついてしまつたんだ。君が悪 なんて、そ

いんだ。

僕は、君を、うらむよ。」

よ、ここの人は。さあ、乾盃。乾盃、乾盃。」 うに、と言つたら、五つに切つた。しやれてゐる。しやれてゐる 「しかし、また、愉快ぢやないか。三つに切つたりなどしないや

どく酩酊して、あやふく乱に及びさうになつたので、ひとりでさ つさと寝てしまつた。いま思ひ出しても、あの鯛は、くやしい。 私は、わけのわからぬ乾盃を強ひられ、鯛の鬱憤のせゐか、ひ

無神経だ。

翌る朝、 起きたら、 まだ雨が降つてゐた。下へ降りて、 宿の者

海岸伝ひに歩いて行くより他は無い。雨のはれ次第、思ひ切つて、 に聞いたら、けふも船は欠航らしいといふ事であつた。竜飛まで

199

津軽 200 すぐ出発しようといふ事になり、私たちは、 んで雑談しながら雨のはれるのを待つた。 「姉と妹とがあつてね、」私は、ふいとそんなお伽噺をはじめた。 また蒲団にもぐり込

い妹は、 ごはんとおみおつけを作つて見よと言ひつけられ、ケチで用心深 姉と妹が、母親から同じ分量の 松 毬 を与へられ、これでもつて、 松毬を大事にして一個づつ竈にはふり込んで燃やし、お

にごはんが出来、さうして、あとに燠が残つたので、その燠でお 姉はおつとりして、こだはらぬ性格だつたので、与へられた松毬 みおつけも出来た。「そんな話、知つてる?ね、飲まうよ。 をいちどにどつと惜しげも無く竈にくべたところが、その火で楽 みおつけどころか、ごはんさへ満足に煮ることが出来なかつた。

ると、 まずに寝て、静かに、来しかた行く末を考へるのも、わるくない くたつて、いいぢやないか。死ぬわけぢやあるまいし。お酒を飲 竜飛へ行つたら、また、何とかなるさ。何も竜飛でお酒を飲まな て置いたらう? あれ、飲まうよ。ケチケチしてたつて仕様が無 飛へ持つて行くんだつて、ゆうべ、もう一つの水筒のお酒、 あとに燠が残るかも知れない。いや、残らなくてもいい。 こだはらずに、いちどにどつとやらうぢやないか。さうす

式で行かう。いちどにどつと、やつてしまはう。」 「わかつた、 わかつた。」N君は、がばと起きて、 「万事、

ものだよ。」

201 私たちは起きて囲炉裏をかこみ、鉄瓶にお燗をして、雨のはれ

仕度をした。うすら寒い曇天である。 お昼頃、 雨がはれた。 私たちは、 おそい朝飯をたべ、出発の身 宿の前で、 Mさんとわかれ、

N君と私は北に向つて発足した。

つた。 「登つて見ようか。」N君は、 松前の何某といふ鳥居の寄進者の名が、その鳥居の柱に刻 義経寺の石の鳥居の前で立ちどまぎけいじ

「うん。」私たちはその石の鳥居をくぐつて、 石の段々を登つた。

み込まれてゐた。

頂上まで、かなりあつた。石段の両側の樹々の梢から雨のしづく

が落ちて来る。

「これか。」

堂の扉には、 石段を登り切つた小山の頂上には、古ぼけた堂屋が立つてゐる。 笹竜胆の源家の紋が附いてゐる。 私はなぜだか、

ひどくにがにがしい気持で、

「これか。」と、また言つた。

「これだ。」N君は間抜けた声で答へた。

むかし源義経、 渡るべき順風なかりしかば数日逗留し、 高館をのがれ蝦夷へ渡らんと此所迄来り給ひし あまりにたへかねて、

所 はり恙なく松前の地に渡り給ひぬ。 持 の観音の像を海底の岩の上に置て順風を祈りしに、 其像今に此所の寺にありて義 忽ち風か

経の風祈りの観音といふ。

れいの「東遊記」で紹介せられてゐるのは、 この寺である。

津軽 「ほら、この石段のところどころに、くぼみがあるだらう? 私たちは無言で石段を降りた。

弁

。」N君はさう言つて、力無く笑つた。私は信じたいと思つたが、 駄目であつた。鳥居を出たところに岩がある。東遊記にまた曰く、 慶の足あとだとか、義経の馬の足あとだとか、何だとかいふ話だ

の馬を立給ひし所となり。是によりて此地を三馬屋と称するなりの馬を立給ひし所となり。是によりて此地を三馬屋と称するなり 「波打際に大なる岩ありて馬屋のごとく、穴三つ並べり。 是義経

のこのやうな伝説は、奇妙に恥づかしいものである。 私たちはその巨石の前を、ことさらに急いで通り過ぎた。 故郷

「これは、きつと、 鎌倉時代によそから流れて来た不良青年の二

が多すぎる。鎌倉時代だけぢやなく、江戸時代になつても、そん く楽しかつたもののやうに空想せられ、うらやましくさへなつて な義経と弁慶が、うろついてゐたのかも知れない。 ぶらかして歩いたのに違ひない。どうも、津軽には、 ものを背負つて歩かなくちやいけないのだから、やくかいだ。」 からうかといふ不安を感じたらしかつた。「七つ道具といふ重い も更に鬚が濃いので、或いは弁慶の役を押しつけられるのではな は武蔵坊弁慶、一夜の宿をたのむぞ、なんて言つて、 人組が、 「しかし、弁慶の役は、つまらなかつたらうね。」N君は私より 話してゐるうちに、そんな二人の不良青年の放浪生活が、ひど 何を隠さうそれがしは九郎判官、してまたこれなる髯男 義経の伝説 田舎娘をた

205

来た。

津軽 は、みな色が白く、みなりも小ざつぱりして、気品があつた。手 る部落の、家の蔭からちらと姿を見せてふつと消える娘さんたち 「この辺には、美人が多いね。」と私は小声で言つた。 通り過ぎ

してゐる人も少い。ただ、もつぱら、酒である。 「さうかね。さう言へば、さうだね。」N君ほど、 女にあつさり

足が荒れてゐない感じなのである。

しね。」私は馬鹿な事を空想してみた。 「まさか、いま、義経だと言つて名乗つたつて、信じないだらう

あたのだが、だんだん二人の歩調が早くなつて来た。まるで二人 はじめは、そんなたわいない事を言ひ合つて、ぶらぶら歩いて

を歩いてゐる私たちの頬にしぶきがかかる。 覆つてゐる。 を幾度も吹き飛ばされさうになつて、その度毎に、 で 足 早 を競つてゐるみたいな形になつて、さうして、めつきり 破れてしまつた。雨が時々、ぱらぱら降る。真黒い雲が低く空を つと下にひつぱり、たうとうスフの帽子の鍔の附根が、びりりと つて、せつせと歩いた。 無口になつた。三厩の酒の酔ひが醒めて来たのである。ひどく寒 「これでも、道がずいぶんよくなつたのだよ。六、七年前は、 いそがざるを得ないのである。 波のうねりも大きくなつて来て、 浜風が次第に勁くなつて来た。 私たちは、 海岸伝ひの細い路 共に厳粛な顔にな 帽子の鍔をぐ 私は帽子

207 うではなかつた。波のひくのを待つて素早く通り抜けなければな

津軽

らぬところが幾箇処もあつたのだからね。」 「でも、 いまでも、 夜は駄目だね。とても、 歩けまい。

「さう、 私たちは真面目な顔をしてそんな事を言ひ、尚もせつせと歩い 夜は駄目だ。 義経でも弁慶でも駄目だ。」

た。

「うん、

未だ老いずだ。」

「疲れないか。」N君は振返つて言つた。「案外、 健脚だね。

二時間ほど歩いた頃から、あたりの風景は何だか異様に凄くな 風景で

なかつた。 れ形容せられ、謂はば、人間の眼で舐められて軟化し、 つて来た。凄愴とでもいふ感じである。それは、 風景といふものは、永い年月、いろんな人から眺めら もはや、 人間に飼

る。ゴンチヤロフであつたか、大洋を航海して時化に遭つた時、 老練の船長が、 されてしまふ。絵にも歌にもなりやしない。ただ岩石と、水であ さきのジャンパーを着たにやけ男などは、一も二も無くはねかへ アツシを着たアイヌの老人でも借りて来なければならない。むら 端の海岸は、てんで、 昔から絵にかかれ歌によまれ俳句に吟ぜられた名所難所には、す ぱり檻の中の猛獣のやうな、人くさい匂ひが幽かに感ぜられる。 の存在もゆるさない。強ひて、点景人物を置かうとすれば、白い べて例外なく、人間の表情が発見せられるものだが、この本州北 れてなついてしまつて、高さ三十五丈の華厳の滝にでも、やつ 「まあちよつと甲板に出てごらんなさい。この大 風景にも何も、なつてやしない。点景人物

津軽 210 きい波を何と形容したらいいのでせう。あなたがた文学者は、 つとこの波に対して、 素晴らしい形容詞を与へて下さるに違ひな

い。」ゴンチヤロフは、

波を見つめてやがて、

溜息をつき、ただ

一言、「おそろしい。」

竜飛の宿に、

竜飛に着くといふ頃に、私は幽かに笑ひ、

ただ自分の足もとばかり見て歩いた。もう三十分くらゐで

「こりやどうも、やつぱりお酒を残して置いたはうがよかつたね。

お酒があるとは思へないし、どうもかう寒くてはね

石や水も、ただ、おそろしいばかりで、

私はそれらから眼をそら

も思ひ浮ばないのと同様に、この本州の路のきはまるところの岩

大洋の激浪や、砂漠の暴風に対しては、どんな文学的な形容詞

。」と思ばず愚痴をこぼした。

昔の知合ひの家があるんだが、ひよつとするとそこに配給のお酒 「いや、僕もいまその事を考へてゐたんだ。も少し行くと、 僕の

「当つてみてくれ。」

があるかも知れない。そこは、

お酒を飲まない家なんだ。

「うん、やつぱり酒が無くちやいけない。」

子を脱いでその家へはひり、しばらくして、笑ひを噛み殺してゐ 竜飛の一つ手前の部落に、その知合ひの家があつた。N君は帽

るやうな顔をして出て来て、

「悪運つよし。水筒に一ぱいつめてもらつて来た。 五合以上はあ

Ž

「燠が残つてゐたわけだ。行かう。」」

津軽

うにして竜飛に向つて突進した。路がいよいよ狭くなつたと思つ もう少しだ。 私たちは腰を曲げて烈風に抗し、 小走りに走るや

何やら、わけがわからなかつた。 てゐるうちに、不意に、鶏小舎に頭を突込んだ。一瞬、私は何が 「竜飛だ。」とN君が、変つた調子で言つた。

ち竜飛の部落なのである。兇暴の風雨に対して、小さい家々が、 「ここが?」落ちついて見廻すと、鶏小舎と感じたのが、すなは

ある。ここは、本州の極地である。この部落を過ぎて路は無い。 ひしとひとかたまりになつて互ひに庇護し合つて立つてゐるので

あとは海にころげ落ちるばかりだ。

路が全く絶えてゐるのである。

0) とN君も言つてゐた。 さかのぼれば、すぽりとこの鶏小舎に似た不思議な世界に落ち込 よその台所へはひつてしまつた、と思つてひやりとしたからね。」 み、そこに於いて諸君の路は全く尽きるのである。 いてゐる時、その路をどこまでも、さかのぼり、さかのぼり行け 「誰だつて驚くよ。僕もね、はじめてここへ来た時、や、これは 部落に就いて、これ以上語る事は避けなければならぬ。 けれども、ここは国防上、ずいぶん重要な土地である。 必ずこの外ヶ浜街道に到り、路がいよいよ狭くなり、さらに 本州の袋小路だ。 読者も銘肌せよ。諸君が北に向つて歩

213 とほつて私たちは旅館に着いた。お婆さんが出て来て、私たちを

露路を

私はこ

津軽 部屋に案内した。この旅館の部屋もまた、おや、と眼をみはるほ

ど小綺麗で、さうして普請も決して薄つぺらでない。まづ、どて

り、やつと、どうやら、人心地を取かへした。 らに着換へて、私たちは小さい囲炉裏を挟んであぐらをかいて坐 「ええと、お酒はありますか。」N君は、思慮分別ありげな落ち

ついた口調で婆さんに尋ねた。答へは、案外であつた。

「へえ、ございます。」おもながの、上品な婆さんである。

答へて、

平然としてゐる。N君は苦笑して、

「いや、おばあさん。僕たちは少し多く飲みたいんだ。」

「どうぞ、ナンボでも。」と言つて微笑んでゐる。

私たちは顔を見合せた。このお婆さんは、このごろお酒が貴重

品になつてゐるといふ事実を、知らないのではなからうかとさへ

りますから、そんなのを集めて、」と言つて、集めるやうな手つ 疑はれた。 「けふ配給がありましてな、近所に、飲まないところもかなりあ

て、「さつき内の者が、こんなに一ぱい持つてまゐりました。」 きをして、それから一升瓶をたくさんかかへるやうに腕をひろげ

「それくらゐあれば、たくさんだ。」と私は、やつと安心して、 「この鉄瓶でお燗をしますから、お銚子にお酒をいれて、四、五

いや、めんだうくさい、六本、すぐに持つて来て下さい。」

いと思つた。「お膳は、あとでもいいから。」 お婆さんの気の変らぬうちに、たくさん取寄せて置いたはうがい

持つて来た。一、二本、飲んでゐるうちにお膳も出た。 お婆さんは、言はれたとほりに、お盆へ、お銚子を六本載せて

津軽

「ありがたう。」

「どうぞ、まあ、ごゆつくり。」

六本のお酒が、またたく間に無くなつた。

「もう無くなつた。」私は驚いた。「ばかに早いね。早すぎるよ

「そんなに飲んだかね。」とN君も、 いぶかしさうな顔をして、

からのお銚子を一本づつ振つて見て、「無い。何せ寒かつたもの 無我夢中で飲んだらしいね。」

「どのお銚子にも、こぼれるくらゐ一ぱいお酒がはひつてゐたん

217 ないぢやない。既にひどく酔つてしまつた様子である。「こりや、

津軽 218 いかん。今夜は、僕は酔ふぞ。いいか。酔つてもいいか。」 ゚ 僕も今夜は酔ふつもりだ。ま、ゆつくりやら

「かまはないとも。

つてもいいたらう。」 めつたにやらないんだ。でも、今夜は一つ歌ひたい。ね、君、歌 「歌を一つやらかさうか。僕の歌は、君、 聞いた事が無いだらう。

いくう、山河あ、と、れいの牧水の旅の歌を、N君は眼をつぶ

「仕方がない。拝聴しよう。」私は覚悟をきめた。

て聞いてゐると、身にしみるものがあつた。 つて低く吟じはじめた。想像してゐたほどは、ひどくない。黙つ

「どう? へんかね。」

「いや、ちよつと、ほろりとした。」

「それぢや、もう一つ。」

大になつたのか、仰天するほどのおそろしい蛮声を張り上げた。 こんどは、ひどかつた。彼も本州の北端の宿へ来て、気宇が広

だが、その声の荒々しく大きい事、外の風の音も、彼の声のため とうかいのう、小島のう、磯のう、と、啄木の歌をはじめたの

「ひどいなあ。」と言つたら、

に打消されてしまつたほどであつた。

「ひどいか。それぢや、やり直し。」大きく深呼吸を一つして、

219 歌つたり、また、どういふわけか突如として、今もまた昔を書け さらに蛮声を張り上げるのである。東海の磯の小島、と間違つて

津軽 ば増鏡、なんて増鏡の歌が出たり、呻くが如く、喚くが如く、お

らぶが如く、実にまづい事になつてしまつた。私は、

奥のお婆さ

襖がすつとあいて、お婆さんが出て来て、

んに聞えなければいいが、とはらはらしてゐたのだが、果せる哉、

言つて、お膳をさげ、さつさと蒲団をひいてしまつた。さすがに、

歌コも出たやうだし、そろそろ、お休みになりせえ。」と

₹ `

N君の気宇広大の蛮声には、度胆を抜かれたものらしい。 私はま

らしい事になつてしまつた。 だまだ、これから、大いに飲まうと思つてゐたのに、 実に、馬鹿

「まづかつた。歌は、まづかつた。一つか二つでよせばよかつた

のだ。あれぢやあ、誰だつておどろくよ。」と私は、ぶつぶつ不

平を言ひながら、 泣寝入りの形であつた。

風もをさまり、 翌る朝、 私は寝床の中で、童女のいい歌声を聞いた。 部屋には朝日がさし込んでゐて、童女が表の路で 翌る日は

手毬歌を歌つてゐるのである。

私は、

頭をもたげて、

耳をすまし

せツせツせ

夏もちかづく

八十八夜

野にも山にも

新緑の 風に藤波

さわぐ時

美

しい発音の爽やかな歌を聞かうとは思はなかつた。

かの佐藤理

0) 土地と思ひ込まれて軽蔑されてゐる本州の北端で、 私 は、 たまらない 気持になつた。 いまでも中央の人たちに このやうな 蝦 夷

ば、 学士の言説の如く、 たる擡頭力を、 まづ文芸復興直前のイタリヤに於いて見受けられたあの鬱勃 この奥州の地に認めなければならぬ。 「人もし現代の奥州に就いて語らんと欲すれ 文化に於い

は たまた産業に於いて然り、 かしこくも明治大帝の教育に関

州 の原始的状態に沈淪した蒙昧な蛮族の居住地に教化の御光を与 人特有の聞きぐるしき鼻音の減退と標準語の進出とを促し、

大御心はまことに神速に奥州の津々浦々にまで浸透して、

奥

する

蝦夷を以て唐の天子に示す。

随行の官人、

光に似たものを、 而して、 いまや見よ云々。」といふやうな、 その可憐な童女の歌声に感じて、 希望に満ちた曙 私はたまらな

几 津軽平野

い気持であつた。

渟^ヌ 代ロ 国司 坂合部連石布、 の初見なり。 津軽」本州の東北端日本海方面の古称。 (今の能代)津軽に到り、 阿倍比羅夫出羽方面の蝦夷地を経略して齶田(今の秋田) 乃ち其地の酋長を以て津軽郡領とす。 遂に北海道に及ぶ。 斉明天皇の御代、 此際、 これ津軽の名 遣 唐使 越^ュ の

津軽 護 海 前 将 夷 0) 種 『連博徳 道 青森県沿革」 蝦 の下に附せし以来の事なるべし。 代未だ嘗て帰附せざるも 軍 の称は、 あり近きを熟蝦夷、ニギェゾ 一美は、 な 藤原保則、 ij° 元慶二年出羽の夷反乱の際にも、 津軽の陸奥に属 おのづから別種として認められしものの如し。 下問に応じて蝦夷の種 本県の地は、 乱を平げて津軽より 次を麁蝦夷、 せし Ŏ, 明治の初年に到るまで岩手・宮城 ば、 悉く内属すとあり。 遠きを都加留と名くと。 源頼朝奥羽を定め、 渡^{ワタリジマ} 類を説いて云はく、 に至り、 屡々散見す。 渡島は今 雑 陸奥の守 種 類に三 の夷 津 0) 時 軽 其 北 他

0)

蝦

福島 此地に弘前 諸県の地と共に一個国を成し、 ・黒石・八戸・ 七 戸 および斗南の五藩ありしが、 陸奥といひ、 明治の初年 には

明

主武田重信の女なり。

県を置き、 四年七月列藩を廃して悉く県となし、 時みな弘前県に合併せしが、 前記の各藩を以て其管下とせしも、後二戸郡を岩手 同年十一月弘前県を廃し、 同年九月府県廃合の事あ

県に附

以て今日に到れり。

孫 康 津軽を氏とす。 為 津 和 ·軽氏」 信に到りて大に著はる。 の頃陸奥津軽郡の地を領し、 藤原氏より出でたる氏。 明応年中、 近衛尚通の子政信、 其子孫わかれて弘前・黒石の旧藩 後に津軽十三の湊に城きて居り、 鎮守府将軍秀郷より八世秀栄、 家を継ぐ。 政信の

津 .軽為信」 戦国時代の武将。 父は大浦甚三郎守信、 母 は堀 越城

天文十九年正月生る。

幼名扇。

永禄十年三

たりし

諸家等となる。

津軽 津軽 併せ、 な の徽章を用ふるを許さる。 されば十八年の小田原征伐にも早く秀吉の軍に応じたりしを以て、 を遮り果さずして還る。十七年、 五年豊臣秀吉に謁せんとして発途せしも、 を斬り、 れ ij 文禄二年四月上洛して秀吉に謁し、 及合浦・外ヶ浜一円を安堵せり。十九年の九戸 十八歳の時、 尋で近傍の諸邑を略し、十三年には凡そ津軽を一統 天正六年七月二十七日、 妻は為則の女なり。 伯父津軽為則の養子となり、 尋で使を肥前名護屋に遣はし、 元亀二年五月、 鷹、 波岡城主北畠顕村を伐ち其領を 馬等を秀吉に贈り好を通ず。 又近衛家に謁え、 秋田城介安倍実季、 南部高信と戦ひこれ 近衛前久の猶子と 乱にも兵を出 牡丹花 秀吉の

陣

を犒ひ、

三年正月には従四位下右京大夫となり、

慶長五年関ケ

北するに随つて幅は縮小し、木造・五所川原の線にて三里、十三

海に入る。

平野の広袤、

南北約十五里、

東西の幅約五

原 の役には、 野国大館二千石を加増す。十二年十二月五日、 兵を出して徳川家康の軍に従ひ、 西上して大垣に戦 京都にて卒

す。

年五十八。

らる。 劃し、 る す山脈を限とし、 0) 津 河谷なり。 軽 | | | | | | 西は岩木山塊と海岸一帯の砂丘(屛風山と称す)に擁蔽せ |木川は其本流西方よりし、 川と弘前市の北にて会合し、 東は十和田湖の西より北走する津軽半島の脊梁をな 陸奥国、 南は羽後境の矢立峠・立石越等により分水線を 南・中・北、 南より来る平川及び東より来 三津軽郡に亘る平野。 正北に流れ、 十三潟に 注

津軽

青森県産米は、

大部分此平

・野より出づ。

此間土地低平、

支流溝渠網の如

228 潟の岸に到れば僅かに一里なり。

あまり人に知られてゐない。 陸奥も青森県も津

(以上<u>、</u>

日本百科大辞典に拠る)

と同じものだと思つてゐる人さへあるやうである。 津 軽の歴史は、 私たちの学校で習つた日本歴史の教科書には、 たつた一箇所に、 ちらと出てゐるだけであつた。すなは 津軽といふ 無理もない

政をお輔けになり、 平げしめられた。」といふやうな文章があつて、 斉明天皇がお立ちになるや、中大兄皇子は、 阿倍比羅夫の蝦夷討伐のところに、 阿倍比羅夫をして、今の秋田・津軽の地方を 「幸徳天皇が崩ぜられて、 引続き皇太子として 津軽の名前も出

うで、 軽の名前はも早や出て来ない。 0) 将 の 切り沈んで、 夷征伐に依つて、 から約五百五十年くらゐ経つて大化改新があり、 から約二百年後の日本武尊の蝦夷御平定も北は日高見国までのや 中学校の教科書にも、 秋 他には津軽なんて名前は出て来ない。 来るが、 田市)を築いて蝦夷を鎮められたと伝へられてゐるだけで津 の派遣も、 日高見国といふのは今の宮城県の北部あたりらしく、それ 本当にもう、 奈良時代には多賀城(今の仙台市附近) 北方は今の福島県あたり迄だつたやうだし、 はじめて津軽の名前が浮び上り、 高等学校の講義にも、その比羅夫のところ それつきり、小学校の教科書にも、 平安時代になつて、 皇紀五百七十三年の四道 阿倍比羅夫の蝦 また、 坂上田村麻呂 秋田城(今 それつ それ また

津軽 230 ある 県水 0) 0) だつて、 三年 征 その次には約二百五十年ばかり飛んで源平時代初期 平定に赴き、 7 蝦 所謂熟蝦夷が活躍するばかりで、 が 来なかつたやうである。 遠く北へ進んで蝦夷の根拠地をうち破り、 が、 あり、 夷の動静に就いては、 の役を教へられてゐるばかりである。 沢町附近) 舞台は今の岩手県・秋田県であつて、 専門家でもない私たちは、 また元慶二年には出羽蝦夷の叛乱があり藤原保則その その叛乱には津軽蝦夷も荷担してゐたとかいふ事で を築いて鎮所となしたとあるが、 私たちの教科書には少しも記されてゐ その後、 都加留などといふ奥地の純粋ッガル 蝦夷征伐といへば田村麻呂、 弘仁年間には文室綿麻呂 この前九年後三年 胆沢城(今の岩手いざはじゃう 安倍氏清原氏など 津軽 の、 まではや 前 九 年後 [の遠 Ó)

役

まあ、 ゐたのか。ただ、 0) なところがある。結局、 州諸藩は、 ふのは、 けの形で、 たちの教科書はいよいよ東北地方から遠ざかり、 治五年、 なかつた。それから藤原氏三代百余年間の平泉の栄華があり、 個 事は申すもかしこし、 所に於いて「津軽」 大過なく時勢に便乗した、と言はれても、仕方の無いやう まことに心細い。いつたい、その間、 源頼朝に依つて奥州は平定せられ、もうその頃から、 薩長土の各藩に於けるが如き積極性は認められない。 ただちよつと立つて裾をはたいて坐り直したといふだ 裾をはたいて坐り直し、また裾をはたいて坐り もう、 の名前を見つける事が出来るだけだとい 神武天皇以来現代まで、 何も無い。 私たちの教科書、 津軽では何をして 阿倍比羅夫ただ 明治維新にも奥 神代

私

文

はせると、 といふやうなところらしい。 「奥羽とは奥州、出羽の併称で、奥州とは陸奥州の略称である。 「かう見えても、これでなかなか忙がしくてねえ。」

陸奥とは、 『道の奥』 で、略されて『みちのく』となつた。その『みち』の もと白河、勿来の二関以北の総称であつた。 名義は

異民族住居の国であつたから、漠然と道の奥と呼んだに他ならぬ。 となつた。この地方は東海東山両道の末をうけて、一番奥にある 国の名を、 古い地方音によつて『むつ』と発音し、 『むつ』の国

漢字『陸』 は『道』の義である。

僻 れを出端と言つたのであらう。 田博士は、さらに奥羽の沿革を説き、 7 解説は簡単で明瞭なるに越した事はない。出羽奥州すでに化外の してゐる。」といふのは、喜田博士の解説であるが、 もと久しく王化の外に置かれた僻陬であつたことを、 も奥の方は、 中部から東北の日本海方面地方を、 は熊や猿の住む土地くらゐに考へられてゐたかも知れない。 陬 次 その統治に当り自然他と同一なること能はず、 と見なされてゐたのだから、 に出羽は『いでは』で、 陸奥と同じく、久しく異民族住居の化外の地で、こみちのく 出端の義と解せられる。 即ち太平洋方面なる陸奥と共に、 その極北の津軽半島などに到つ 漠然と越の国と呼んだ。これ 「頼朝の奥羽平定以後と雖 『出羽陸奥に 簡明である。 その名に示 古は本州

津軽 まあ、 。」といふやうな事を記してゐる。 土豪 安 東 氏を代官に任じ、 **倉武士を以てしては、これを統治し難い事情があつたと見えて、** け 於いては夷の地たるによりて』との理由のもとに、一旦実施しか いま北海道に残つてしよんぼりしてゐるアイヌとは、 アイヌは、 アイヌがうろうろしてゐただけの事かも知れない。しかし、この 軽地方の如きは、住民まだ蝦夷の旧態を存するもの多く、直接鎌 ふべきことを命ずるのやむを得ざる程であつた。 た 田制改革の処分をも中止して、すべて秀衡、 少しは津軽の事情もわかつて来る。その前は、 ばかに出来ない。 所謂日本の先住民族の一種であるが、 蝦夷管領としてこれを鎮撫せしめた この安東氏の頃あたりから、 随つて最北の津 泰衡の旧規に従 何が何やら、 根本的にた

にも、 やうに論断してゐるやうである。 羽 と独自の文化を誇り、 近世は、 の文化に触れること少く、 ゆる石器時代の土器に比して優位をしめてゐる程であるとも言は ちが違つてゐたものらしい。その遺物遺跡を見るに、 になってしまった。それに就いて理学博士小川琢治氏も、 へ盛んに入り込んで来て、 今の北海道アイヌの祖先は、古くから北海道に住んで、 奥羽地方の同族に見るが如き発達を遂げるに到らず、 堕落の極に達してゐるのに反し、奥羽のアイヌは、 松前藩以来、 或いは内地諸国に移住し、 内地人の圧迫を被ること多く、甚しく去勢 土地隔絶、 次第に他の地方と区別の無い大和民 「続日本紀には奈良朝前後に粛 天恵少く、 また内地人も奥 随つて石器時代 世界のあら 溌剌 次の 殊に 本州

俗学 神社 との間に行はれたことを推測せしめる。今昔物語に、 から五銖銭が出土したことがあり、 地方と交通が頗る自由に行はれたのは想像し難くない。 余人の多人数が、それぞれ今の秋田地方に来着した事実で、 天皇の宝亀二年(一四三一年)の如く渤海人千余人、つぎに三百 ち特に著しいのは聖武天皇の天平十八年(一四○六年)及び光仁 :洲に渡つて見聞したことを載せたのは、これらの考古学及び土 上の資料と併せ考へて、決して一場の説話として捨てるべき があつたらしいのは、いづれも直接の交通が大陸とこの 東北には漢文帝武帝を祀つた 安倍頼時が 秋田附近 満洲 地

ものでない。

われわれは、更に一歩を進めて、

当時の東北蕃族は

猛 義家などの武将が、これを緩服するに頗る困難であつたの 皇化東漸以前に、大陸との直接の交通に依つて得たる文華の程度 味もあつたのではなからうかと考へてみるのも面白いではないか、 たと考へて、はじめて氷解するのである。」 手が単に無智なるがために精悍なる台湾生蕃の如き土族でなかつ かつたことを同時に確信し得られるのである。 東 人、毛人などと名乗つたのは、一つには、あづまびと けびと またはその異国的なハイカラな情緒にあやかりたいといふ意 不充分なる中央に残つた史料から推定する如く、 田村麻呂、 奥羽地方人の勇 低級ではな 頼義、

敵

といふやうな事も言ひ添へてゐる。かうして見ると、

津軽人の祖

津軽 238 先も、 か、 郡 氏は自ら安倍貞任の子 高 星 の後と称し、その遠祖は 長 髄 彦 の はがすねひこ 津軽の様子が、 のである。いづれにしても鎌倉時代以前よりの、 兄安日は奥州外ヶ浜に流されて、 兄安日なりと言つてゐる。 つたやうでもあるが、 は御内裏様御領で、 つたに相違ない。 さつぱり出て来ない。わづかに、 本州の北端で、 ほのかに分明して来る。 津軽に於いて、口三郡は鎌倉役であり、奥三 天下の御帳に載らざる無役の地だつたと伝 けれども、 決してただうろうろしてゐたわけでは無か 長髄彦、 その子孫安倍氏となつたといふ 中央の歴史には、どういふもの 神武天皇に抗して誅せられ、 前述の安東氏あたりから、 喜田博士の日く、 北奥の大豪族で

へられてゐるのは、

鎌倉幕府の威力もその奥地に及ばず、

安東氏

たものであらう。 自由に委して、 謂はゆる守護不入の地となつてゐたことを語つ

蝦 これを鎮撫せしめたが、鎌倉武士の威力を以てしてこれに勝つ能 夷 の騒乱となるに到つて、幕府の執権北条高時、 倉時代の末、 津軽に於いて安東氏一族の間に内訌あり、 将を遣はして

しないらしい。ただ、この北端の国は、 のなささうな口振りである。まつたく、 さすがの喜田博士も津軽の歴史を述べるに当つては、 他国と戦ひ、 津軽の歴史は、 負けた事が 少し自信 はつきり

はず、

結局和談の儀を以て引き上げたとある。」

239 無いといふのは本当のやうだ。服従といふ観念に全く欠けてゐた 他国の武将もこれには呆れて、見て見ぬ振りをして勝手

S

格闘をはじめる。

安東氏一族の内訌に端を発した津軽蝦夷の騒

合

津軽 240 れ は 振 ともかく、 舞はせてゐたらしい。 他国が相手にせぬので、 昭和文壇に於ける誰かと似てゐる。 仲間同志で悪口を言 V

れば、 か や 擾などその一例である。津軽の人、竹内運平氏の青森県通史に拠 したのは、 ない。 は が 北 その御大業の遠因の一つに数へられてしかるべきもの ては元弘の変となり、 条九代記の『是ぞ天地の命の革むべき危機の初め』となつて 「この安東一族の騒乱は、 まことならば、 実にこれ一つといふ事になつて、この安東氏一族の 津軽が、ほんの少しでも中央の政局を動 建武の中興となつた。」とある 引いて関八州の騒動となり、 か : も 知 所

内

江は、

津軽の歴史に特筆大書すべき光栄ある記録とでも言はな

津軽一 争ひ、 南 れ 昭 武 衛関白尚通の後裔と称してゐる。 で 室町時 は藩籍を謹んで奉還したといふのが、 部 に触れて、 田 糠部と称する蝦夷地であつたが、ぬかのぶ ればならなくなる。 る。 氏と境を接して長く相敵視するの間柄となつた。 氏の一族南部氏が移り住み、 代を経て、 国を安堵し、 津軽に於いては安東氏のかはりに津軽氏が立ち、どうやら この津軽氏の遠祖に就いては諸説がある。 「津軽に於いては、 秀吉の全国統一 津軽氏は十二代つづいて、 いまの青森県の太平洋寄りの地方は古くか しかし一方では南部氏の分れで 安東氏没落し、 に到るまで、 その勢ひ頗る強大となり、 鎌倉時代以後、 まあ、 津軽はこの南部と 津軽の歴史の大略 明治維新、 津軽氏独立して 喜田博士もそ ここに甲州 津軽氏は近 藩主承 吉

津軽 242 事等 為信のために亡ぼされ、 家を以て祖先の敵であり旧領を押領せるものと見做す事、 知らぬ。 東 軽家はもと南部の一族であり、 しく感情の疎隔を有しつつ終始した。 のやうに述べてゐる。 あるといひ、 世に於いても近衛家の血統の加はれるものである、 たと称し、 氏 の から起つて居るらしい。 族であるか 」と言つてゐる。 また一方、 或ひは藤原基衡の次男秀栄の後だとも、 の如くにも伝へ、 「南部家と津軽家とは江戸時代を通じ、 津軽郡中の南部方の諸城は奪取せられて 津軽家にては、 また、 勿論、 被官の地位にあつたのに其主に背 竹内運平氏もその事に就い 事実に於いて南部高信は津軽 右の原因は、 諸説紛々適従するところを わが遠祖は藤原氏であり、 南部氏が津軽 と主張する 或ひは安 及び津 7 次

る。 無理 家の支族とし、 どに求めてゐるが、 南 居 族)として居る事に対し、それを否定すべき確実なる資料は、今 と云ひ、 の立場を取つて居る可足記の如きも、 る根本証拠を伴うて居るものではない。 の女であり、 部 るのみならず、 古くは津軽に於いても高屋家記の如きは、 のない事と思ふ。 氏の津軽家に対し一族の裏切者として深怨を含んで居る事も 近来出版になつた読史備要等も為信を久慈氏(南部氏一 以後数代南部信濃守と称して居る家柄であつたから、 木立日記にも『南部様津軽様御家は御一体なり』 為信数代の祖大浦光信の母は、 現在より見ては、 なほ、 津軽家はその遠祖を藤原、 甚だ力弱い論旨を示して居 必ずしも吾等を首肯せしむ 南部氏に非ず、 大浦氏を以て南部 南部久慈備前守 との弁護 近衛家な

津軽 244 のところ無いやうに思ふ。しかし津軽には過去にこそ南部の血統 また被官ではあつても、 血統の他の一面にはどんな由緒

以上くだくだしく述べて来たが、考へてみると、 津軽といふの

載せて置いた。

科

避けてゐる。それを簡明直截に疑はず規定してゐるのは、日本百

大辞典だけであつたから、一つの参考としてこの章のはじめに

のものもないとは云へない。」と喜田博士同様、

断乎たる結論は

細道」 端に過ぎない。 は、 りて」と書いてあるが、それだつて北は平泉、いまの岩手県の南 日本全国から見てまことに渺たる存在である。 には、 その出発に当り、「前途三千里のおもひ胸にふさが 青森県に到達するには、その二倍歩かなければな 芭蕉の「奥の

らぬ。 本海 翌る日、やつぱりまだ船が出さうにも無いので、 まあ弘前迄といつていいだらう。分家の黒石藩が南にあるが、こ これでは、 て、さうして、 た所謂文化的な気風も育成せられてゐるやうだから、これは除い の辺にはまた黒石藩としての独自の伝統もあり、 てひらけた津軽平野を中心に、 軽なのである。 て来る。 々岸を北から下つてせいぜい深浦あたり迄、さうして南は、 さうして、その青森県の日本海寄りの半島たつた一つが津 中央の歴史に相手にされなかったのも無理はない 私は、その「道の奥」の奥の極点の宿で一夜を明し、 北端は竜飛である。 昔の津軽は、全流程二十二里八町の岩木川に沿う 東は青森、 まことに心細いくらゐに狭い。 浅虫あたり迄、 津軽藩とちがつ 前日歩いて来た 西は日 · と 思

か

津軽 ので、 ぬのである。 生 所 船 路をまた歩いて三厩まで来て、三厩で昼食をとり、 田 から奥羽線で川部まで行き、川部で五能線に乗りかへて五時頃五 でまつすぐに蟹田のN君の家へ帰つて来た。 梵珠山脈があつて山中には路らしい路も無いやうな有様らしい と金木と相隔たる事、 川原に着き、それからすぐ津軽鉄道で津軽平野を北上し、 でひとり蟹田を発ち、 た土地の金木町に着いた時には、 津軽もそんなに小さくはない。 仕方なく四角形の他の三辺を大迂回して行かなければなら 金木の生家に着いて、まづ仏間へ行き、 青森の港に着いたのは午後の三時、それ 四角形の一辺に過ぎないのだが、 その翌々日の昼頃、 もう薄暗くなつてゐ 歩いてみると、 それからバス 嫂がついて 私は定期 そ た。 私の の間

247 真をしばらく眺め、ていねいにお辞儀をした。それから、常居と 知つてゐる筈だつた。 のN君には、ずいぶんお世話になりました。」N君の事は、 します、といふやうな葉書を嫂に差上げてゐたのである。 ていただきたいと思つてゐますから、その折にはよろしくお願ひ と思つてゐますが、ついでに金木にも立寄り、父母の墓参をさせ いふ家族の居間にさがつて、改めて嫂に挨拶した。 来て仏間の扉を一ぱいに開いてくれて、私は仏壇の中の父母の写 「一週間ほど前です。東海岸で、手間どつてしまひました。 「いつ、 私は東京を出発する数日前、こんど津軽地方を一周してみたい 東京を?」と嫂は聞いた。

嫂も

蟹田

248 「さう。こちらではまた、お葉書が来ても、なかなかご本人がお

光ちやんなどは、とても待つて、毎日交代に停車場へ出張してゐ^^

陽子や

津軽 言つてゐた人もありました。」 たのですよ。おしまひには、怒つて、もう来たつて知らない、と 見えにならないので、どうしたのかと心配してゐました。

の家へお嫁に行き、その新郎と一緒にちよいちよい金木へ遊びに 陽子といふのは長兄の長女で、 半年ほど前に弘前の近くの地主

やんといふのは、私たちの一ばん上の姉の末娘で、 木の家へいつも手伝ひに来てゐる素直な子である。その二人の姪 来るらしく、その時も、お二人でやつて来てゐたのである。光ち まだ嫁がず金

からみ合ひながら、えへへ、なんておどけた笑ひ方をして出

て来て、酒飲みのだらしない叔父さんに挨拶した。陽子は女学生

みたいで、まだ少しも奥さんらしくない。

「をかしい恰好。」と私の服装をすぐに笑つた。

「ばか。これが、東京のはやりさ。」

「よく来た。ああ、よく来た。」と大声で言ふ。元気な人だつた 嫂に手をひかれて、祖母も出て来た。八十八歳である。

が、でも、さすがに少し弱つて来てゐるやうにも見えた。

「どうしますか。」と嫂は私に向つて、「ごはんは、ここで食べ

ますか。二階に、みんなゐるんですけど。」

子のお婿さんを中心に、長兄や次兄が二階で飲みはじめてゐ

249 る様子である。

津軽

250 兄弟の間では、どの程度に礼儀を保ち、またどれくらゐ打ち解

「お差支へなかつたら、二階へ行きませうか。」ここでひとりで、

けて無遠慮にしたらいいものか、私にはまだよくわかつてゐない。

ビールなど飲んでゐるのも、いぢけてゐるみたいで、いやらしい

事だと思つた。 「どちらだつて、かまひませんよ。」嫂は笑ひながら、

や、二階へお膳を。」と光ちやんたちに言ひつけた。

いい日本間で、兄たちは、ひつそりお酒を飲んでゐた。 私はジヤンパー姿のままで二階に上つて行つた。金襖の一ばん 私はどた

ばたとはひり、

「修治です。はじめて。」と言つて、まづお婿さんに挨拶して、

251

津軽

は蟹田の蟹を少しお土産に持つて来たのだ。 '蟹は、どうしませう。あとで?」と嫂は小声で私に言つた。 私

をいやしくする傾きがあるので私はちよつと躊躇した。嫂も同じ 「さあ。 」蟹といふものは、どうも野趣がありすぎて上品のお膳

気持だつたのかも知れない。 「蟹?」と長兄は聞きとがめて、 「かまひませんよ。 持つて来な

さい。ナプキンも一緒に。」

今夜は、長兄もお婿さんがゐるせゐか、 機嫌がいいやうだ。

蟹が出た。

自身まつさきに蟹の甲羅をむいた。 「おあがり、なさいませんか。」と長兄はお婿さんにもすすめて、

私は、ほつとした。

私に言つた。はつと思つた。 「失礼ですが、どなたです。」お婿さんは、無邪気さうな笑顔で 無理もないとすぐに思ひ直して、

ら答へたが、しよげてしまつて、これあ、英治さんの名前を出し つたが、次兄は知らん顔をしてゐるので、取りつく島も無かつた。 てもいけなかつたかしら、と卑屈に気を使つて、次兄の顔色を伺 「はあ、 いいや、と私は膝を崩して、光ちやんに、こんどはビールを あのう、英治さん(次兄の名)の弟です。」と笑ひなが

くからいけないのだ。肉親を書いて、さうしてその原稿を売らな 金木の生家では、気疲れがする。また、私は後で、かうして書

253 くカらりにない

お酌させた。

津軽 254 ければ生きて行けないといふ悪い宿業を背負つてゐる男は、

から、そのふるさとを取りあげられる。

所詮、

私は、

東京のあば

神様

らやで仮寝して、生家のなつかしい夢を見て慕ひ、 あちこちうろ

つき、さうして死ぬのかも知れない。

翌る日は、雨であつた。起きて二階の長兄の応接間へ行つてみ

長兄はお婿さんに絵を見せてゐた。金屛風が二つあつて、

かれてゐる。 一つには山桜、一つには田園の山水とでもいつた閑雅な風景が画 私は落款を見た。が、読めなかつた。

「誰です。」と顔を赤らめ、おどおどしながら聞いた。

「スイアン。」と兄は答へた。 「スイアン。」まだわからなかつた。

「知らないのか。」兄は別に叱りもせず、おだやかにさう言つて、

「百穂のお父さんです。」

て知つてゐたが、そのお父さんが 穂 庵 といふ人で、こんないい 「へえ?」百穂のお父さんもやつぱり画家だつたといふ事は聞い

知らなかつたとは、大失態であつた。屏風をひとめ見て、おや? 絵をかくとは知らなかつた。私だつて、絵はきらひではないし、 いや、きらひどころか、かなり通のつもりでゐたのだが、穂庵を

なかつたのに、 ぬ事になつてしまつた、と身悶えしたが、兄は、そんな私を問題 穂庵、 と軽く言つたなら、長兄も少しは私を見直したかも知れ 間抜けた声で、誰です、は情ない。取返しのつか

255 にせず、

津軽 256 「津軽の 綾 足 はどうでせう。」名誉恢復と、それから、 秋田には、 偉い人がゐます。」とお婿さんに向つて低く言つた。 お世辞

津軽の画家といへば、 0) もらつて、はじめて、 つもりもあつて、私は、おつかなびつくり出しやばつてみた。 この前に金木へ来た時、兄の持つてゐる綾足の画を見せて 津軽にもこんな偉い画家がゐたといふ事を まあ、綾足くらゐのものらしいが、実はこ

風の絵を眺めてゐたのだが、兄が坐つたので、 うな口調で呟いて、椅子に腰をおろした。私たちは皆、立つて屏 「あれは、 また、べつのもので。」と兄は全く気乗りのしないや お婿さんもそれと

知つた次第なのである。

向ひ合つた椅子に腰をかけ、

私は少し離れて、

入口の傍のソフア

に腰をおろした。

りお婿さんのはうを向いて言つた。兄は前から、私には、 「この人などは、まあ、これで、ほんすぢでせうから。」とやは あまり

さう言へば、綾足のぼつてりした重量感には、 もう少しどうか

直接話をしない。

するとゲテモノに落ちさうな不安もある。

を見つめ、 「文化の伝統、といひますか、」兄は背中を丸めてお婿さんの顔 「やつぱり、秋田には、 根強いものがあると思ひます

_

私はあきらめて、笑ひながらひとりごとを言つた。 「津軽は、だめか。」何を言つても、ぶざまな結果になるので、

津軽 258 「こんど、 津軽の事を何か書くんだつて?」と兄は、突然、

私に

向つて話しかけた。

「ええ、でも、何も、

どろもどろになり、「何か、いい参考書でも無いでせうか。」

津軽の事なんか知らないので、」と私はし

「さあ、」と兄は笑ひ、「わたしも、どうも、郷土史にはあまり

興味が無いので。」

「津軽名所案内といつたやうな極く大衆的な本でも無いでせうか。

首を振つて、それから立ち上つてお婿さんに、 まるで、 「無い、 もう、何も知らないのですから。」 無い。」と兄は私のずぼらに呆れたやうに苦笑しながら

「それぢやあ、わたしは農会へちよつと行つて来ますから、そこ

らにある本でも御覧になつて、どうも、けふはお天気がわるくて

。」と言つて出かけて行つた。

ねた。 「農会も、いま、いそがしいのでせうね。」と私はお婿さんに尋

「ええ、いま、ちやうど米の供出割当の決定があるので、たいへ

事はよく知つてゐる。いろいろこまかい数字を挙げて説明してく んなのです。」とお婿さんは若くても、地主だから、その方面の

私には、半分もわからなかつた。

たやうなものなのですが、でも、こんな時代になつて来ると、や |僕などは、いままで米の事などむきになつて考へた事は無かつ

259 はり汽車の窓から水田をそれこそ、わが事のやうに一喜一憂して

260

津軽 眺めてゐるのですね。ことしは、いつまでも、こんなにうすら寒

くて、

田植ゑもおくれるんぢやないでせうか。」私は、れいに依

「大丈夫でせう。このごろは寒ければ寒いで、対策も考へて居り

つて専門家に向ひ、半可通を振りまはした。

ものなのですが、馬耕といふんですか、あの馬に挽かせて田を打 ますから。苗の発育も、まあ、普通のやうです。」 の知識は、きのふ汽車の窓からこの津軽平野を眺めて得ただけの 「さうですか。」と私は、もつともらしい顔をして首肯き、 (僕

のでも何でも、全部、馬で、牛を使役するといふ事は、 ですね。僕たちの子供の頃には、馬耕に限らず、荷車を挽かせる ほとんど

ちかへすあれを、牛に挽かせてやつてゐるのがずいぶん多いやう

荷車を挽いてゐるのを見て、奇怪に感じた程です。」 無かつたんですがね。僕なんか、はじめて東京へ行つた時、牛が

関係もあるでせうね。でも、仕事の能率の点では、牛は馬の半分、 たのです。それから、牛は飼養するのに手数がかからないといふ 「さうでせう。馬はめつきり少くなりました。たいてい、出征し

「出征といへば、もう、――」

もつともつと駄目かも知れません。」

ない笑顔はいいものだ。「こんどは、かへされたくないと思つて 途中でかへされて、面目ないんです。」健康な青年の、くつたく 「僕ですか?'もう、二度も令状をいただきましたが、二度とも

ゐるんですが。」自然な口調で、軽く言つた。

津軽 262 た大人物がゐないものでせうか。」 「この地方に、これは偉い、としんから敬服出来るやうな、

隠れ

はれてゐる人の中に、ひよつとしたら、あるんぢやないでせうか 「さあ、 僕なんかには、よくわかりませんけど、篤農家などと言

ません。しかし、篤農家も、篤農家としてあまり大きいレツテル きたいと思つてゐるのですが、どうも、つまらぬ虚栄などもあつ は下手だし、まあ篤文家とでもいつたやうな痴の一念で生きて行 て、常識的な、きざつたらしい事になつてしまつて、ものになり 「さうでせうね。」私は大いに同感だつた。「僕なんかも、 理窟

をはられると、だめになりはしませんか。」

ます。」 な男になつてしまふのです。有名になつてしまふと、駄目になり ぱり出して講演をさせたり何かするので、せつかくの篤農家も妙 「さう。さうです。新聞社などが無責任に矢鱈に騒ぎ立て、ひつ

れなものですからね。名声には、もろいものです。ジヤアナリズ とたんに、たいてい腑抜けになつてゐますからね。」私は、へん もので、いい加減なものですからね。毒薬ですよ。有名になつた ムなんて、もとをただせば、アメリカあたりの資本家の発明した 「まつたくですね。」私はそれにも同感だつた。「男つて、あは

かし、さうは言つても、内心では有名になりたがつてゐるといふ

なところで自分の一身上の鬱憤をはらした。こんな不平家は、し

注意を要する。

津軽 ちは学校で、どんな説明を与へられてゐたか。 け 蛙が飛び込んだのである。つまらない、あさはかな音である。 のほとりに立つてゐたら、チヤボリと小さい音がした。見ると、 かつた。 の句がわからなかつた。どこがいいのか、さつぱり見当もつかな たんに私は、 ま保持してゐる兄の努力も並たいていではなからうと察した。 木一草も変つてゐない感じであつた。かうして、古い家をそのま た教育が悪かつたせゐであつた。あの古池の句に就いて、 ひるすぎ、 名物にうまいものなし、と断じてゐたが、それは私の受 あの、芭蕉翁の古池の句を理解できた。 私は傘さして、 雨の庭をひとりで眺めて歩いた。 森閑たる昼なほ暗 私には、 私た 池

津軽 266 してゐる。 いい句だ。 当時の檀林派のにやけたマンネリズムを見事に蹴飛ば 謂はば破格の着想である。 月も雪も花も無い。 風流

な

ただ、

まづしいものの、まづしい命だけだ。

当時の

風流宗

も

在来

なくつちや嘘だ、とひとりで興奮して、その夜、 の風流の概念の破壊である。革新である。いい芸術家は、 旅の手帖にかう かう来

「いた。

匠たちが、この句に愕然としたわけも、それでよくわかる。

「山吹や蛙飛び込む水の音。 れと来て遊べや親の無い雀。すこし近い。でも、 古池や、 無類なり。」 其角、 ものかは。 なんにも知らない。 あけすけでい

翌る日は、

上天気だつた。

姪の陽子と、そのお婿さんと、

私と、

津軽

が

ある様子である。

姪とアヤは、

お弁当や何かで手間取つてゐる

郷土学の妙味

よい天気であ

ので、

268 :家の諸説が紛々として帰趨の定まらぬところに、

る。 津軽の旅行は、五、六月に限る。れいの「東遊記」にも、

お婿さんと私とだけ、一足さきに家を出た。

.昔より北地に遊ぶ人は皆夏ばかりなれば、草木も青み渡り、 風

と覚ゆ。 も南風に変り、海づらものどかなれば、 恐ろしき名にも立ざる事 途中にて

我北地に到りしは、 九月より三月の頃なれば、

旅人には絶えて逢ふ事なかりし。我旅行は医術修行の為なれば、

格別の事なり。 以後に行くべき国なり。」としてあるが、旅行の達人の言として、 只名所をのみ探らんとの心にて行く人は必ず四月 梅、

読者もこれだけは信じて、覚えて置くがよい。 津軽では、

色の丘陵を指差して言つた。「この辺で、少しぶらぶらして、ア ね。」と私は、前方に見える、への字形に盛りあがつた薄みどり どう行けばいいのか、わからなくなりました。あの山なんですが の様子が、幼い頃の記憶とまるで違つてゐる。私は当惑して、 ヤたちを待つ事にしませう。」とお婿さんに笑ひながら提案した。 のだから、 く路がわからない。小学校の頃に二、三度行つた事があるきりな ありげに、私が先に立つて町はづれまで歩いて来たが、高流へ行 「さうしませう。」とお婿さんも笑ひながら、「この辺に、青森 「停車場や何か出来て、この辺は、すつかり変つて、高流には、 林檎、 忘れるのも無理はないとも思つたが、しかし、その辺 梨、すもも、一度にこの頃、花が咲くのである。自信

津軽 てゐる。 「さうですか。 捜してみませう。」

あつた。 修錬農場は、 農村中堅人物の養成と拓士訓練の為に設立せられたもの その路から半丁ほど右にはひつた小高い丘の上に もつたいないくらゐ

積所、 厳 ならず御助勢下されたとか、 ばされていらつしやつた折に、かしこくも、この農場にひとかた の堂々たる設備である。 のやうであるが、この本州の北端の原野に、 の建物になつて、その他、 寄宿舎、 私は、 ただ、 秩父の宮様が弘前の八師団に御勤務あそ 眼を丸くして驚くばかりであつた。 作業場あり、家畜小屋あり、 講堂もその御蔭で、 地方稀に見る荘 肥料蓄

八月、 金木町の人たちは、 秩父宮様ならびに同妃宮様の御成、 れてゐるものらしい。 ないですか。」さう言ひながら、私は、へんに嬉しくて仕方が無 たたび御成、といふ幾重もの光栄を謹んで記してゐるのである。 かつた。やつぱり自分の生れた土地には、ひそかに、力こぶをい 「へえ? ちつとも、 農場の入口に、大きい石碑が立つてゐて、それには、 朝香宮様の御成、 この農場を、 知らなかつた。金木には過ぎたるものぢや 同年九月、 もつともつと誇つてよい。 高松宮様の御成、 昭和十三年八月に秩父宮様ふ 同年十月、 昭和十年 金 木

とでもいふのか、

津軽の各部落から選ばれた模範農村青年たちの

津軽平野の永遠の誇りであらう。 実習地

だけではない、これは、

実に

津軽 眺め、 美しく展開してゐた。

のであらう。 主だから、私などより、ずいぶんいろいろ、わかるところがある ー や ! 富士。いいなあ。」と私は叫んだ。 富士ではなかつた。

「たいしたものだなあ。」と溜息をついて言つた。

お婿さんは地

と女らしく、十二単衣の裾を、 津軽富士と呼ばれてゐる一千六百二十五メートルの岩木山が、 んでゐる感じなのである。したたるほど真蒼で、富士山よりもつ 目の水田の尽きるところに、ふはりと浮んでゐる。 銀杏の葉をさかさに立てたやうにいてふ 実際、軽く浮

ぱらりとひらいて左右の均斉も正しく、静かに青空に浮んでゐる。 決して高い山ではないが、けれども、なかなか、透きとほるくら

うな口調で言つた。「わるくないよ。」口をとがらせて言つてゐ 「金木も、どうも、 わるくないぢやないか。」私は、 あわてたや

ゐに嬋娟たる美女ではある。

「いいですな。」お婿さんは落ちついて言つた。

る。

弘前から見るといかにも重くどつしりして、岩木山はやはり弘前 のものかも知れないと思ふ一方、また津軽平野の金木、五所川原、 私はこの旅行で、さまざまの方面からこの津軽富士を眺めたが、

木造あたりから眺めた岩木山の端正で華奢な姿も忘れられなかつ

津軽 もはや美人の面影は無い。 西海岸から見た山容は、まるで駄目である。崩れてしまつて、

よくみのり、

美人のはうは、どうも、心細いやうに、私には見受けられたが、

ともかく、この北津軽地方は、こんなにお山が綺麗に見えながら、

美人も多いといふ伝説もあるさうだが、米のはうは

岩木山の美しく見える土地には、

米も

これは或いは私の観察の浅薄なせゐかも知れない。 「アヤたちは、どうしたでせうね。」ふつと私は、 その事が心配

農場 ら。」アヤたちの事を、つい忘却してゐるほど、私たちは、 もとの路に引返して、あちこち見廻してゐると、アヤが、思ひが になり出した。「どんどんさきに行つてしまつたんぢやない の設備や風景に感心してしまつてゐたのである。 私たちは、 修錬 かし

せ、一本道ですから。」 遠くまで行つてしまつたらうね。おうい。」と前方に向つて大声 ヤは、この辺の野原を捜し廻り、姪は、高流へ行く路をまつすぐ けない傍系の野路からひよつこり出て来て、わしたちは、いまま で呼んだが、何の返辞も無い。 にどんどん後を追つかけるやうにして行つたといふ。 であなたたちを手わけしてさがしてゐた、と笑ひながら言ふ。ア 「まゐりませう。」とアヤは背中の荷物をゆすり上げて、「どう 「そいつあ気の毒だつたな。陽ちやんは、それぢやあ、ずいぶん 空には雲雀がせはしく囀つてゐる。かうして、故郷の春の野路

を歩くのも、二十年振りくらゐであらうか。一面の芝生で、とこ

津軽 276 地の起伏もゆるやかで、一昔前だつたら都会の人たちは、 ろどころに低い灌木の繁みがあつたり、小さい沼があつたり、

金木も発展して、 あれが更生部落、 の原野にも着々と開墾の鍬が入れられ、人家の屋根も美しく光り、 ゴルフ場とでも言つてほめたであらう。 賑やかになつたものだと、しみじみ思つた。そ あれが隣村の分村、とアヤの説明を聞きながら、 しかも、 見よ、 いまはこ 絶好の

ろそろ、 「どうしたのでせうね。」私は、 山の登り坂にさしかかつても、まだ姪の姿が見えない。 母親ゆづりの苦労性である。

見せた。 「とにかく、 「いやあ、どこかにゐるでせう。」新郎は、 聞いてみませう。」私は路傍の畑で働いてゐるお百 てれながらも余裕を

宝庫らしい。秋には、 初 茸 、土かぶり、なめこなどのキノコ類 えない。この辺は、ワラビ、ウド、アザミ、タケノコなど山菜の 思つて、ここでワラビを取つてゐたといふ。別に疲れた様子も見 登つて行くと、並木の落葉松の蔭に姪が笑ひながら立つてゐた。 を着た若いアネサマがとほりませんでしたか。」と尋ねた。とほ ここまで追つかけて来てもゐないから、あとから来るのだらうと つて行く姪の姿を想像して、わるくないと思つた。しばらく山を とほつたといふ。春の野路を、走るやうにいそいで新郎の後を追 つた、といふ答へである。何だか、走るやうに、ひどくいそいで 姓さんに、スフの帽子をとつてお辞儀をして、「この路を、 アヤの形容に依れば「敷かさつてゐるほど」一ぱい生えて、 洋服

津軽 278 五所川原、 木造あたりの遠方から取りに来る人もあるといふ。

「陽ちやまは、きのこ取りの名人です。」と言ひ添へた。また、

山を登りながら、

ヤは、改まつた口調で、はい、と答へた。

「金木へ、宮様がおいでになつたさうだね。」と私が言ふと、ア

「はい。 「ありがたい事だな。」

」と緊張してゐる。

「よく、 金木みたいなところに、おいで下さつたものだな。

「はい。

「自動車で、おいでになつたか。」

「はい。 自動車でおいでになりました。」

「はい。 拝ませていただきました。」

「アヤも、

拝んだか。」

「アヤは、 仕合せだな。」

「はい。」と答へて、首筋に巻いてゐるタオルで顔の汗を拭いた。 鶯が鳴いてゐる。スミレ、タンポポ、野菊、ツツジ、白ウツギ、

生に明るく咲いてゐる。背の低い柳、カシハも新芽を出して、さ

アケビ、野バラ、それから、私の知らない花が、山路の両側の芝

うして山を登つて行くにつれて、笹がたいへん多くなつた。二百

軽平野全部、隅から隅まで見渡す事が出来ると言ひたいくらゐの メートルにも足りない小山であるが、見晴しはなかなかよい。津

ものであつた。私たちは立ちどまつて、平野を見下し、アヤから

津軽 280 説明を聞いて、また少し歩いて立ちどまり、 いつのまにやら、小山の頂上に到達した。 津軽富士を眺めてほ

「なあんだ。」とは言つたものの、 「はい、さうです。」 「これが頂上か。」私はちよつと気抜けして、アヤに尋ねた。 眼前に展開してゐる春の津軽

有三の派流、この地に落合ひて大湖となる。しかも各河川固有の の遠方に模糊と煙るが如く白くひろがつてゐるのは、十三湖らし の鏡のやうに鈍く光つてゐるのは、 平野の風景には、うつとりしてしまつた。岩木川が細い銀線みた 十三湖あるいは十三潟と呼ばれて、「津軽大小の河水凡そ十 キラキラ光つて見える。その銀線の尽きるあたりに、 田光沼であらうか。さらにそたっぴ 古代

前からひらけて、 魚と両方宿り住んでゐるといふ。 最 周 岩木川をはじめ津軽平野を流れる大小十三の河川がここに集り、 米穀を積出し、 十三といふ小さい部落がある。 少くないので、その河口のあたりは淡水で、 水の流入によつて鹹水であるが、岩木川からそそぎ這入る河 色を失はず。」と「十三往来」に記され、 も深 拼 は約八里、しかし、 また江戸時代には、その北方の小泊港と共に、 いところでも三メートルくらゐのものだといふ。 殷盛を極めたとかいふ話であるが、 津軽の豪族、 河川の運び来る土砂の為に、 この辺は、 安東氏の本拠であつたといふ説も 湖が日本海に開いてゐる南口に、 津軽平野北端の湖で、 いまから七、八百年も 魚類も淡水魚と鹹水 いまはその一 津軽の木材、 湖底は浅く、 水は、 ...水も

海

津軽 片の面影も無いやうである。その十三湖の北に権現崎が見える。 転じて、 しかし、 前方の岩木川のさらに遠方の青くさつと引かれた爽やか この辺から、 国防上重要の地域にはひる。 私たちは眼

北は権現崎より、 な一線を眺めよう。日本海である。七里長浜、一眸の内である。 南は大戸瀬崎まで、眼界を遮ぎる何物も無い。

「これはいい。 僕だつたら、ここへお城を築いて、」と言ひかけ

「冬はどうします?」と陽子につつ込まれて、ぐつとつまつた。

たら、

「これで、雪が降らなければなあ。」と私は、

幽かな憂鬱を感じ

て歎息した。

Щ 「の陰の谷川に降りて、 河原で弁当をひらいた。 渓流にひやし 流されるやうにして長々と水面にからだを浮かせたままこちらの そのうちに、ふと私は見つけた。 たビールは、わるくなかつた。姪とアヤは、リンゴ液を飲んだ。 十回ほどそれを試みて、さすがに疲れてあきらめたか、流れに押 と落ちる。また、するすると登りかけては、落ちる。執念深く二 と出して、見る見る一尺ばかり岩壁によぢ登りかけては、はらり 「あの岩壁に這ひ上らうとしてゐるのです。」奔湍から首をぬつ 「大丈夫、大丈夫。」と私は谷川の対岸の岩壁を指差して言つた。 蛇! お婿さんは脱ぎ捨てた上衣をかかへて腰をうかした。

283

岸に近づいて来た。アヤは、この時、立ち上つた。一間ばかりの

津軽

ぶりとやつた。 木の枝を持ち、 私たちは眼をそむけ、 黙つて走つて行つて、ざんぶと渓流に突入し、ず

「片附けました。」アヤは、木の枝も一緒に渓流にはふり投げた。 「死んだか、死んだか。」私は、あはれな声を出した。

「まむしぢやないか。」私は、それでも、まだ恐怖してゐた。

むしの生胆は薬になります。」 「まむしなら、生捕りにしますが、いまのは、青大将でした。

ま

「まむしも、この山にゐるのかね。

「はい。」

私は、 浮かぬ気持で、ビールを飲んだ。

アヤは、 誰よりも早くごはんをすまして、それから大きい丸太

ウドやアザミなど、山菜を取り集めてゐる様子である。 を引ずつて来て、それを渓流に投げ入れ、足がかりにして、ひよ いと対岸に飛び移つた。さうして、対岸の山の絶壁によぢ登り、

て、わざとあんな危いところへ行き、僕たちにアヤの勇敢なとこ しながらアヤの冒険を批評した。「あれはきつと、アヤは興奮し て、他のところにもたくさん生えてゐるのに。」私は、はらはら 「あぶないなあ。わざわざ、あんな危いところへ行かなくつたつ

ろを大いに見せびらかさうといふ魂胆に違ひない。」

「アヤあ!」と私は大声で呼びかけた。「もう、いい。あぶない 「さうよ、さうよ。」と姪も大笑ひしながら、賛成した。

285 から、もう、いい。」

286

津軽

つとした。 「はい。」とアヤは答へて、するすると崖から降りた。 帰りは、 アヤの取り集めた山菜を、 陽子が背負つた。この姪は、 私は、

外ヶ浜に於ける「いまだ老いざる健脚家」も、さすがに疲れて、

もとから、なりも振りも、あまりかまはない子であつた。帰途は、

ある。 。 めつきり無口になつてしまつた。山から降りたら、郭公が鳴いて 町はづれの製材所には、材木がおびただしく積まれ てゐて、

トロツコがたえず右往左往してゐる。ゆたかな里の風景である。

「金木も、しかし、活気を呈して来ました。」と、私はぽつんと

言つた。

「さうですか。」お婿さんも、少し疲れたらしい。もの憂さうに、

さう言つた。 私は急にてれて、

さびれて行くばかりの町のやうに見えました。いまのやうぢやな 年前の金木は、かうぢやなかつたやうな気がします。だんだん、 かつた。いまは何か、もりかへしたやうな感じがします。」 「いやあ、僕なんかには、何もわかりやしませんけど、でも、十

土地の景色が、京都よりも奈良よりも、佳くはないか、と思はれ しました、と言つたら、兄は、としをとると自分の生れて育つた 家へ帰つて兄に、金木の景色もなかなかいい、思ひをあらたに

て来るものです、と答へた。

287 翌る日は前日の一行に、兄夫婦も加はつて、金木の東南方一里

津軽 288 すぎると、 けた。 道をてくてく歩いた。軌道の枕木の間隔が、一歩には狭く、 半くらゐの、鹿の子川溜池といふところへ出かけた。 は疲れて、早くも無口になり、汗ばかり拭いてゐた。お天気がよ には広く、ひどく意地悪く出来てゐて、甚だ歩きにくかつた。 ての事かも知れない。その日も上天気で、前日よりさらに暖かか くも遠くへ出歩くなどは、嫂にとつて、金木へお嫁に来てはじめ 兄のところへお客さんが見えたので、私たちだけ一足さきに出か モンペに白足袋に草履といふいでたちであつた。二里ちか 私たちは、アヤに案内されて金木川に沿うて森林鉄道の軌 旅人はぐつたりなつて、かへつて意気があがらぬもの 出発真際に、 半歩 私

のやうである。

「この辺が、大水の跡です。」アヤは、立ちどまつて説明した。

の八十八歳の祖母も、とんと経験が無い、 川の附近の田畑数町歩一面に、 巨大の根株や、 丸太が散乱してゐる。 激戦地の跡もかくやと思はせるほ その前のとし、 と言つてゐるほどの大 私の家

洪水がこの金木町を襲つたのである。

「この木が、みんな山から流されて来たのです。」と言つて、ア

ヤは悲しさうな顔をした。

「ひどいなあ。」私は汗を拭きながら、 「まるで、 海のやうだつ

たらうね。」 「海のやうでした。」

金木川にわかれて、こんどは鹿の子川に沿うてしばらくのぼり、

津軽 290 やつと森林鉄道の軌道から解放されて、ちよつと右へはひつたと 周囲半里以上もあるかと思はれる大きい溜池が、それこ

そ一鳥啼いて更に静かな面持ちで、 蒼々満々と水を湛へてゐる。

和十六年、 の底の鹿の子川をせきとめて、この大きい溜池を作つたのは、 この辺は、 つい最近の事である。 荘右衛門沢といふ深い谷間だつたさうであるが、谷間 溜池のほとりの大きい石碑には、

な人為の成果といふものも、また、快適な風景とせざるを得ない、 はゐるが、しかし、金木といふ一部落の力が感ぜられ、このやう 兄の名前 まだ生々しく露出してゐるので、 も彫り込まれてゐた。 溜池の周囲に工事の跡の絶壁の赤 所謂天然の荘厳を欠いて

おつちよこちよいの旅の批評家は、 立ちどまつて煙草を

私は自信ありげに、一同を引率し、溜池のほとりを歩いて、

四方八方を眺めながら、いい加減の感想をまとめてゐた。

ふかし、

ないだらうな。」ウルシにかぶれては、私はこのさき旅をつづけ ろした。「アヤ、ちよつと調べてくれ。これは、ウルシの木ぢや るのに、憂鬱でたまらないだらう。ウルシの木ではないと言ふ。 「ここがいい。この辺がいい。」と言つて池の岬の木蔭に腰をお

みんなは笑つてゐたが、私は真面目であつた。それも、ウルシの 木ではないと言ふ。私は全く安心して、この場所で弁当をひらく 「ぢやあ、その木は。なんだか、あやしい木だ。調べてくれ。」

りをした。私は小学校二、三年の時、遠足で金木から三里半ばか 事にきめた。ビールを飲みながら、私はいい機嫌で少しおしやべ

津軽 社 服 か 海 ふ 私 時 だけ身軽にして草鞋、 装 靴下に編上の靴をはいて、なよなよと媚を含んで出かけたのだ 離れた西海岸の高山といふところへ行つて、はじめて海を見た の焼印の綺麗に幾つも押されてある白木の杖、 な の子白波の騒ぐ磯辺の松原に、 唱歌を合唱させたが、生れてはじめて海を見たくせに、わ たちを海に向けて二列横隊にならばせ、 の興奮を話した。 に凝つて、 い気持であつた。さうして、 うのは、 いかにも不自然で、 鍔のひろい麦藁帽に兄が富士登山の時に使 その時には引率の先生がまつさきに興奮 と言はれたのに私だけ不要の袴を着 私はその遠足の時には、 私は子供心にも恥かしく落ちつ とかいふ海岸生れの子供の歌を 「われは海の子」とい 先生から出来る つた 奇妙に れは 神

のビールをみな飲んでしまつてゐたので、甚だ具合がわるかつた。

ら、 た。やがて、兄は、ピツケルをさげて現はれた。私はありつたけ やがて帽子も取り上げられ、杖もおあづけ、たうとう病人用とし 杖にすがり、などと私は調子づいて話して皆を笑はせてゐると、 て学校で傭つて行つた荷車に載せられ、家へ帰つた時の恰好つた 履といふ、片ちんばの、すり切れたみじめな草履をあてがはれ、 「おうい。」と呼ぶ声。兄だ。 「おうい。」と私たちも口々に呼んだ。アヤは走つて迎へに行つ 出て行く時の輝かしさの片影も無く、靴を片手にぶらさげ、 草履、といつても片方は赤い緒の草履、片方は藁の緒の草 里も歩かぬうちに、もうへたばつて、まづ袴と靴をぬがせ

津軽 私とお婿さんとは顔を見合せ、意味も無く、うなづき合つた。 て行つた。バサツと大きい音がして、水鳥が池から飛び立つた。 すぐにごはんを食べ、それから皆で、溜池の奥の方へ歩い

幽 やうなふうなのだ。とにかく、野生の水鳥には違ひなかつた。 谷の精気が、ふつと感ぜられた。兄は、背中を丸くして黙つ

だか鴨だか、口に出して言へるほどには、お互ひ自信がなかつた

らうか。十年ほど前、東京の郊外の或る野道を、兄はやはりこの て歩いてゐる。兄とかうして、一緒に外を歩くのも何年振りであ

やうに背中を丸くして黙つて歩いて、それから数歩はなれて私は 兄のそのうしろ姿を眺めては、ひとりでめそめそ泣きながら歩い

た事があつたけれど、あれ以来はじめての事かも知れない。

私は

縁に沿うた幅一尺くらゐの心細い小路を歩いてゐるのであつて、 び兄と一緒に外を歩く機会は、無いのかも知れないとも思つた。 びを忘れない種族である。この後、 うしたつて、もとのとほりにはならない。 だめかも知れない。ひびのはひつた茶碗は、どう仕様も無い。ど てゐて、その谷底に滝壺がいかにも深さうな青い色でとぐろを巻 右手はすぐ屛風を立てたやうな山、左手は足もとから断崖になつ といふ、この地方の名所がある。ほどなく、その五丈ばかりの細 水の落ちる音が、次第に高く聞えて来た。溜池の端に、鹿の子滝 兄から、 い滝が、 私たちの脚下に見えた。つまり私たちは、 あの事件に就いてまだ許されてゐるとは思はない。一生、 もう、これつきりで、 津軽人は特に、 荘右衛門沢の ふたた

津軽

言つて、 「これは、どうも、 陽子の手にすがりついて、おつかなさうに歩いてゐる。 目まひの気味です。」と嫂は、 冗談めかして

肩にかついで、ツツジの見事に咲き誇つてゐる箇所に来るたんび 右手の山腹には、ツツジが美しく咲いてゐる。兄はピツケルを

路は次第に下り坂になつて、私たちは滝口に降りた。一間ほどの 少し歩調をゆるめる。藤の花も、そろそろ咲きかけてゐる。

るやうになつてゐる。ひとりひとり、ひよいひよいと飛び越した。 幅 てあり、それを足がかりにして、ひよいひよいと二歩で飛び越せ の小さい谷川で、流れのまんなかあたりに、木の根株が置かれ

嫂が、ひとり残つた。

「だめです。」空言つて笑ふばかりで飛び越さうとしない。足が

すくんで、前に出ない様子である。

ざんぶとばかり滝口に投じた。まあ、どうやら、橋が出来た。嫂 は、ちよつと渡りかけたが、やはり足が前にすすまないらしい。 中を歩いて渡つてしまつた。モンペの裾も白足袋も草履も、びし も浅いので、即席の橋から川へ飛び降りて、じやぶじやぶと水の アヤの肩に手を置いて、やつと半分くらゐ渡りかけて、あとは川 この時、アヤは怪力を発揮し、巨大の根つこを抱きかかへて来て、 へ寄つても、嫂は、ただ笑つて、だめだめと手を振るばかりだ。 「おぶつてやりなさい。」と兄は、アヤに言ひつけた。アヤが傍

よ濡れになつた様子である。

津軽

りかへつて、

ながらさう言つて、陽子もお婿さんも、どつと笑つたら、兄は振 へ遠足してみじめな姿で帰つた話をふと思ひ出したらしく、 「まるで、もう、高山帰りの姿です。」嫂は、私のさつきの高山 、笑ひ

をしてゐるので、説明してあげようかな、とも思つたが、あまり 馬鹿々々しい話なので、あらたまつて「高山帰り」の由来を説き 「え? 何?」と聞いた。みんな笑ふのをやめた。兄がへんな顔

五. 西海岸

でも孤独である。

起す勇気は私にも無かつた。兄は黙つて歩き出した。

兄は、いつ

0)

画も前から私にあつたのである。

鹿の子川溜池へ遊びに行つたそ

津軽 の翌日、 私は金木を出発して五所川原に着いたのは、

頃、 木 造 駅に着いた。ここは、まだ津軽平野の内である。 五所川原駅で五能線に乗りかへ、十分経つか経たぬかのうち 午前十一時

が、 町 0) 歴史は古いらしい。 精米所の機械の音が、どつどつと、

古びた閑散な町である。人口四千余りで、金木町より少いやうだ

この町もちよつと見て置きたいと思つてゐたのだ。

降りて見ると、

私は、

鳩が鳴いてゐる。ここは、

私の父が生れた土地なのである。金木の私の家では代々、女ばか だるげに聞えて来る。どこかの軒下で、

たいてい婿養子を迎へてゐる。父はこの町のMといふ旧家

の三男かであつたのを、 私の家から迎へられて何代目かの当主に まれたひろい米蔵に入つて面白く遊んでゐると、父が入口に立ち 談中の父へ低く呼びかけた事があつたけれど、勿論それは父の耳 を得ない。また自作の「思ひ出」の中の一節を借りるが、「私の 私はこの父の「人間」に就いては、ほとんど知らないと言はざる にも心にもはひらなかつたらしい。私と弟とが米俵のぎつしり積 言のふりして、まんねんひつ、まんねんひつ、と隣部屋で客と対 とり色々と思ひ悩んだ末、或る晩に床の中で眼をつぶつたまま寝 た。父の万年筆をほしがつてゐながらそれを言ひ出せないで、ひ にゐても子供らと一緒には居らなかつた。私は此の父を恐れてゐ 父は非常に忙しい人で、うちにゐることがあまりなかつた。うち つたのである。この父は、私の十四の時に死んだのであるから、

津軽 名も新聞に出てゐた。 くの新聞社は父の訃を号外で報じた。 惟ふと今でも、いやな気がする。 る は 月光を受けつつ滑つて出て来たのを眺めて私は美しいと思つた。 まで迎へに行つた。やがて森の蔭から幾台となく続いた橇の幌が ふセンセイションの方に興奮を感じた。 く積つてゐた頃、 故 ので父の大きい姿がまつくろに見えた。 だかつて、坊主、出ろ、 郷へ帰つて来た。 私の父は東京の病院で血を吐いて死んだ。ちか 父の死骸は大きい寝棺に横たはり橇に乗つ 私は大勢のまちの人たちと一緒に隣村近く 出ろ、と叱つた。光を背から受けてゐ (中略)その翌春、 私は父の死よりも、かうい 遺族の名にまじつて私の 私は、 あの時の恐怖を 雪のまだ深

つぎの日、

私のうちの人たちは父の寝棺の置かれてある仏間に集

だのではなくて或る政治上の意味で姿をかくしてゐたのだといふ

男だつたのだらう、などと無礼な忖度をしてみるやうになつて、 を感じ、 私は皆の泣声を聞き、さそはれて涙を流した。」まあ、だいたい つた。 いから淋しいなどと思つた事はいちども無かつたのである。しか こんな事だけが父に関する記憶と言つていいくらゐのもので、父 眠つてゐるやうであつた。高い鼻筋がすつと青白くなつてゐた。 死んでからは、私は現在の長兄に対して父と同様のおつかなさ だんだんとしを取るにつれて、いつたい父は、どんな性格の の草屋に於ける私の仮寝の夢にも、父があらはれ、実は死ん 棺の蓋が取りはらはれるとみんな声をたてて泣いた。父は またそれゆゑ安心して寄りかかつてもゐたし、父がゐな

津軽

その姿をひどくなつかしく思つたり、

夢の話はつまらないが、

私は

事業をしたのかも知れん、などと生意気な事など考へてゐる。そ 死んで、 少し父を生かして置いたら、津軽のためにも、もつともつと偉い 頽齢の大往生どころか、ひどい若死にと考へるやうになつた。 はり何か呼吸器の障りで吐血などして死んだのである。五十三で ある。父の兄弟は皆、肺がわるくて、父も肺結核ではないが、や にかく、父に対する関心は最近非常に強くなつて来たのは事実で まづ大往生と思つてゐたのだが、いまは五十三の死歿を 私は子供心には、そのとしがたいへんな老齢のやうに感

の父が、どんな家に生れて、どんな町に育つたか、

私はそれを一

しいが、もう一方の、美人の件は、どうであらう。これも、金木

津軽 けの、 るほど木造の建築物、と首肯き、 くのこのこ歩いてゐるうちに春の温気にあてられ、 だまつすぐの一本街のコンクリート路の上には薄い春霞のやうな ないかも知れない。その日も、ひどくいい天気で、 岩木山の美しく見える土地には、いや、もう言ふまい。 だけは、 んやりして来て、木造警察署の看板を、木造警察署と読んで、 ものが、もやもや煙つてゐて、ゴム底の靴で猫のやうに足音も無 地方と同様にちよつと心細いのではあるまいか。その件に関して えてして差しさはりの多いものだから、ただ町を一巡しただ ひやかしの旅人のにはかに断定を下すべき筋合のものでは あの伝説は、 むしろ逆ぢやないかとさへ私には疑はれた。 はつと気附いて苦笑したりなど 何だか頭がぼ 停車場からた こんな話

家との聯絡に便利なやうに、各々の軒をくつつけ、長い廊下を作 は 的に作つてあるのが、 幕なんかでなく、家々の軒を一間ほど前に延長させて頑丈に永久 を涼しさうな顔をして歩いたらう、さうして、これはまるで即席 そんな、しやれたものではない。冬、雪が深く積つた時に、家と の長い廊下みたいだと思つたらう、つまり、あの長い廊下を、天 よけの天幕を張つたらう、さうして、 し銀座で午後の日差しが強くなれば、 き無い。 木 造 は、また、コモヒの町である。コモヒといふのは、むかきづくり しかも之は、 北国のコモヒだと思へば、たいして間違ひ 日ざしをよけるために作つたのではない。 各商店がこぞつて店先に日 読者諸君は、その天幕の下

津軽 あ、 歩いてゐたら、M薬品問屋の前に来た。 などと考へてひとりで悦にいつてゐる次第である。そのコモヒを であると一般に信じられてゐるやうだが、私は、隠瀬あるいは隠 店に坐つてゐる人達からじろじろ見られるのは少し閉口だが、 遊び場としても東京の歩道のやうな危険はなし、 日とでもいふ漢字をあてはめたはうが、早わかりではなからうか、 春の温気にまゐつた旅人も、ここへ飛び込むと、ひやりと涼しく、 い廊下は通行人にとつて大助かりだらうし、また、私のやうに、 つて置くのである。吹雪の時などには、 とにかく有難い廊下である。コモヒといふのは、 気楽に買ひ物に出掛けられるので、 私の父の生れた家だ。立 風雪にさらされる恐れも 最も重宝だし、子供の 雨の日もこの長 小店の訛り

るまいか。いよいよ木造は、コモヒの町にきまつた。しばらく歩 0) も残つてゐない。Mの家の当主は、私よりも四つ五つ年上の、に て遊びに来た事はあつたかも知れないが、いまの私の記憶には何 木造町へ来た事も無い。或いは私の幼年時代に、誰かに連れられ いて引返した。私は今まで、Mの家に行つた事は、いちども無い。 いて、やうやくコモヒも尽きたところで私は廻れ右して、溜息つ に依つて貫通せられてゐるといつたやうなところは少いのではあ いて行きながら、どうしようかなあ、と考へた。この町のコモヒ ち寄らず、そのままとほり過ぎて、やはりコモヒをまつすぐに歩 があるらしいけれども、この木造町みたいに、町全部がコモヒ 実に長い。津軽の古い町には、たいていこのコモヒといふも

310 ぎやかな人で、昔からちよいちよい金木へも遊びに来て私とは顔

馴染である。私がいま、たづねて行つても、まさか、いやな顔は

津軽

な薄汚いなりをして、Mさんしばらく、などと何の用も無いのに なさるまいが、どうも、しかし、私の訪ね方が唐突である。こん

卑屈に笑つて声をかけたら、Mさんはぎよつとして、こいついよ

思やすまいか。死ぬまへにいちど、父の生れた家を見たくて、と いよ東京を食ひつめて、金でも借りに来たんぢやないか、などと

いふのも、おそろしいくらゐに気障だ。男が、いいとしをして、

などと悶えて歩いてゐるうちに、またもとのM薬品問屋の前に来 そんな事はとても言へたもんぢやない。いつそこのまま帰らうか、

た。もう二度と、来る機会はないのだ。恥をかいてもかまはない。

ゐでせう。 」 た。ああ、これ、お酒、とお家の人たちに言ひつけて、二、三分 げるやうに座敷へ上げて、床の間の前に無理矢理坐らせてしまつ さあさあ、とたいへんな勢ひで私には何も言はせず、引つぱり上 奥のはうに声をかけた。Mさんが出て来て、やあ、ほう、これは、 も経たぬうちに、もうお酒が出た。実に、素早かつた。 はひらう。私は、とつさに覚悟をきめて、ごめん下さい、と店の 「さあ、もし子供の時に来た事があるとすれば、三十年振りくら 「木造は何年振りくらゐです。」 「久し振り。久し振り。」とMさんはご自分でもぐいぐい飲んで、

311 「さうだらうとも、さうだらうとも。さあさ、飲みなさい。木造

金

津軽 312 どこやら似てゐる。 微笑ましかつた。さう思つて見ると、 へ立寄つた甲斐があつたと思つた。Mさんは、 死んだ父の「人間」に触れたやうな気がして、 は金木へ来て自分の木造の生家と同じ間取りに作り直しただけの で大改築したものだといふ話を聞いてゐるが、 木のいまの家は、 へ来て遠慮する事はない。よく来た。実に、よく来た。」 な この家の間取りは、 いのだ。 私には養子の父の心理が何かわかるやうな気がして、 私の父が金木へ養子に来て間もなく自身の設計 私はそんなつまらぬ一事を発見しただけでも、 金木の家の間取りとたいへん似てゐる。 お庭の木石の配置なども、 何かと私をもてな このMさんのお家 何の事は無い、父

、」とMさんは、少しもこだはるところがなく、「まづ第一に、 ないのです。」 相手に興覚めさせるやうな事は言へなかつた。 「ええ、それもあるんだけど、」いつ死ぬかわからんし、などと 「ぢやあ、木造の事も書くんだな。木造の事を書くんだつたらね 「書くのか?」 「べつに、どうつてわけも無いけど、いちど見て置きたいのです 「いや、もういいんだ。一時の汽車で、深浦へ行かなければいけ 深浦へ? 何しに?」

313

米の供出高を書いてもらひたいね。警察署管内の比較では、この

314 木造署管内は、全国一だ。どうです、日本一ですよ。これは、

津軽

たちの努力の結晶と言つても、差支へ無いと思ふ。この辺一帯の

田の、 水が枯れた時に、僕は隣村へ水をもらひに行つて、つひに

僕たちも、地主だからつて、遊んでは居られない。僕は脊髄がわ

大成功して、大トラ変じて水虎大明神といふ事になつたのです。

るいんだけど、でも、 田の草取りをしましたよ。まあ、こんどは

東京 のあんた達にも、 おいしいごはんがどつさり配給されるでせ

気性のひとであつた。 子供つぽいくりくりした丸い眼に魅力があ 」たのもしい限りである。Mさんは、小さい頃から、闊達な

つて、この地方の人たち皆に敬愛せられてゐるやうだ。 私は、心

の中でMさんの仕合せを祈り、なほも引きとめられるのを汗を流

ぎ、 来た。 する。この辺の岩石は、すべて角稜質凝灰岩とかいふものださう 海岸に沿うて走り、 Щ 々を見ながら一時間ほど経つと、右の窓に大戸瀬の奇勝が展開 木造 その辺で津軽平野もおしまひになつて、それから列車 いから、 五能線に依つて約三十分くらゐで鳴沢、 右に海を眺め左にすぐ出羽丘陵北端の余波の 鰺ヶ沢を過 は日本

期 て催す事が出来るほどのお座敷になつたので、 にお化けみたいに海上に露出して、 その海蝕を受けて平坦になつた斑緑色の岩盤が江戸時代の末 数百人の宴会を海浜に於い これを千畳敷と名

315 附け、 またその岩盤のところどころが丸く窪んで海水を湛へ、あ

津軽 る。 かづきぬま なつてしまつてゐて、 書けば、さうもなるのだらうが、外ヶ浜北端の海浜のやうな異様 濤 たかもお酒をなみなみと注いだ大盃みたいな形なので、これを盃 れいの竹内運平氏は「青森県通史」に於いて、この辺以南は、 にとつて特に難解の雰囲気は無い。つまり、ひらけてゐるのであ な物凄さは無く、 みが名附けたものに違ひない。この辺の海岸には奇岩削立し、 くさんの大穴をことごとく盃と見たてるなど、よつぽどの大酒飲 にその脚を絶えず洗はれてゐる、と、まあ、名所案内記ふうに 人の眼に、 と称するのださうだけれど、直径一尺から二尺くらゐの 舐められて、明るく馴れてしまつてゐるのである。 謂はば全国到るところにある普通の「風景」 津軽独得の佶屈とでもいふやうな他国の者 怒 昔

る。 あ 瀬 津軽特有の「要領の悪さ」は、もはやこの辺には無い。山水を眺 な気がするのである。津軽の不幸な宿命は、ここには無い。あの、 ふのだが、やはり、 ると言つてゐる。 竹氏と談合の上、これを津軽領に編入したといふやうな記録もあ せぬつつましい温和な表情、悪く言へばお利巧なちやつかりした めただけでも、わかるやうな気がする。すべて、充分に聡明であ からの津軽領ではなく、秋田領であつたのを、慶長八年に隣藩佐 たりの漁村によく見受けられるやうな、決して出しやばらうと から約四十分で、 所謂、 文化的である。 私などただ旅の風来坊の無責任な直感だけで言 深浦へ着くのだが、この港町も、 もうこの辺から、 ばかな傲慢な心は持つてゐない。大戸 何だか、 津軽ではないやう 千葉の海岸

津軽 津軽 がないのだ。 津軽の奥の人たちには、本当のところは、 切 表情をして、旅人を無言で送迎してゐる。つまり、 いのではないかとも思つてゐる。これは、成長してしまつた大人 うな雰囲気を深浦の欠点として挙げて言つてゐるのでは決してな は全く無関心のふうを示してゐるのである。 表情なのかも知れない。何やら自信が、奥深く沈潜してゐる。 .i. 軽 つてゐる。ああ、さうだ。かうして較べてみるとよくわ そんな表情でもしなければ、人はこの世に生きて行き切れな の北部は、生煮えの野菜みたいだが、ここはもう透明に煮え の北部に見受けられるやうな、子供つぽい悪あがきは まるつきりないのだ。だから、 歴史の自信といふもの 私は、 矢鱈に肩をいからし 旅人に対して 深浦のこのや かる。 無

319

信じて、しばらく努力を続けて行かうではないか。

津軽 320 ある。 置かれたところで、 深浦町は、 江戸時代、 現在人口五千くらゐ、 青森、 津軽藩の最も重要な港の一つであつた。 鯵ケ沢、十三などと共に四浦の町奉行の 旧津軽領西海岸の南端の港で

てゐる。 の家の庭には、大きい立派な潜水服が、さかさに吊されて干され 岬など一とほり海岸の名勝がそろつてゐる。しづかな町だ。 に一小湾をなし、水深く波穏やか、吾妻浜の奇巌、 何かあきらめた、底落ちつきに落ちついてゐる感じがす 弁天嶋、 漁師 行合 丘間

る。 上げようかと思つた。完成されてゐる町は、また旅人に、わびし の仁王門がある。この寺の薬師堂は、 駅からまつすぐに一本路をとほつて、町のはづれに、円覚寺 私は、それにおまゐりして、もうこれで、この深浦から引 国宝に指定せられてゐると

ない気持がして私は行きあたりばつたりの宿屋へ這入り、 さうして、その母は、二番目の子供を近く生むのである。たまら 守宅へ短いたよりを認めた。子供は百日咳をやつてゐるのである。 私は立ち上つて町の郵便局へ行き、葉書を一枚買つて、 心の空虚の隙をねらつて、ひよいと子供の面影が胸に飛び込む。 し救はれた。 屋に案内され、ゲートルを解きながら、 しようかと大いに迷つた。まだ日は高い。 感じを与へるものだ。 お膳とお酒が出た。意外なほど早かつた。私はその早さに、少 ふと思つた。なるべく思ひ出さないやうにしてゐるのだが、 部屋は汚いが、お膳の上には鯛と鮑の二種類の材料 私は海浜に降りて、岩に腰をかけ、どう お酒を、と言つた。すぐ 東京の草屋の子供の事 東京の留 汚い部

は早い。

津軽へやつてきて以来、人のごちそうにばかりなつてゐ

津軽 322 この港の特産物のやうである。お酒を二本飲んだが、 でいろいろに料理されたものが豊富に載せられてある。 まだ寝るに 鯛と鮑が

とつまらぬ考へを起し、さつきお膳を持つて来た十二、三歳の娘 たが、けふは一つ、自力で、うんとお酒を飲んで見ようかしら、

せん、といふ。どこか他に飲むところは無いかと聞くと、ござい さんを廊下でつかまへ、お酒はもう無いか、と聞くと、ございま と言下に答へた。ほつとして、その飲ませる家はどこだ、

軽塗の食卓に向つて大あぐらをかき、酒、酒、と言つた。お酒だ であつた。二階の十畳くらゐの、海の見える部屋に案内され、 と聞いて、その家を教はり、行つて見ると、意外に小綺麗な料亭 かつたので、 ないと思つた。しかるに、その座敷に、ぶつてり太つた若い女が たをばさんが、お銚子だけ持つてすぐに来た。私は、そのをばさ あらはれて、妙にきざな洒落など飛ばし、私は、いやで仕様が無 このをばさんから、 んから深浦の伝説か何か聞かうかと思つた。 取つて、客をぽつんと待たせるものだが、四十年配の前歯の欠け 「観音さん? あ、 「観音さんへおまゐりなさいましたか。」 深浦の名所は何です。」 すぐに持つて来た。これも有難かつた。たいてい料理で手間 男子すべからく率直たるべしと思ひ、 何か古めかしい話を聞く事が出来るかも知れ 円覚寺の事を、観音さんと言ふのか。さう。」

323

ない。

私は、ひどいめに逢つた。その若い女中が、ふくれて立ち

つた。ひとりが部屋から追ひ出されたのに、もうひとりが黙つて 上ると、をばさんも一緒に立ち上り、二人ともゐなくなつてしま

0) 坐つてゐるなどは、朋輩の仁義からいつても義理が悪くて出来な 燈台の灯を眺め、さらに大いに旅愁を深めたばかりで宿へ帰つ ものらしい。私はその広い部屋でひとりでお酒を飲み、 翌る朝、 私がわびしい気持で朝ごはんを食べてゐたら、主人 深浦港

「あなたは、

津島さんでせう。」と言つた。

お銚子と、

小さいお皿を持つて来て、

「ええ。」私は宿帳に、筆名の太宰を書いて置いたのだ。

かりませんでしたが、どうも、あんまりよく似てゐるので。 んとは中学校の同期生でね、太宰と宿帳にお書きになつたからわ 「さうでせう。どうも似てゐると思つた。私はあなたの英治兄さ

「ええ、ええ、それも存じて居ります、お名前を変へて小説を書

あれは、偽名でもないのです。」

いてゐる弟さんがあるといふ事は聞いてゐました。どうも、ゆう

鮑のはらわたの塩辛ですが、酒の肴にはいいものです。」 べは失礼しました。さあ、お酒を、めし上れ。この小皿のものは、

325 ごちそうになつた。塩辛は、おいしいものだつた。実に、いいも 私はごはんをすまして、それから、塩辛を肴にしてその一本を

津軽 0) 来ないのだと自覚して、 のだつた。かうして、 余波 要するに、私がこの津軽領の南端の港で得たものは、 のおかげをかうむつてゐる。 津軽の端まで来ても、やつぱり兄たちの力 珍味もひとしほ腹綿にしみるものが 結局、 私の自力では何一つ出 自分の · あつ

鰺ケ沢。 私は、 深浦からの帰りに、この古い港町に立寄 た。

た汽車に乗つた。

兄たちの勢力の範囲を知つたといふ事だけで、

私は、

ぼんやりま

大阪廻りの和船の発着所でもあつたやうだし、 ん栄えた港らしく、 この町あたりが、 津軽の西海岸の中心で、 津軽の米の大部分はここから積出され、また 江戸時代には、ずいぶ 水産物も豊富で、

ここの浜にあがつたさかなは、 御城下をはじめ、ひろく津軽平野 方がむしろ本場のやうである。東京の人たちは、あれを油つこく 0) もご存じの事と思ふが、 タは、このごろ東京にも時たま配給されるやうであるから、 ふからには、きつと昔の或る時期に、見事な鰺がたくさんとれた ただいたら大過ないのではあるまいか。西海岸の特産で、秋田地 はちつとも聞かず、ただ、ハタハタだけが有名であつた。ハタハ ところかとも思はれるが、私たちの幼年時代には、ここの鰺の話 いまは、人口も四千五百くらゐ、木造、深浦よりも少いやうな具 の各地方に於ける家々の食膳を賑はしたものらしい。けれども、 無い五、六寸くらゐのさかなで、まあ、海の鮎とでも思つてい 往年の隆々たる勢力を失ひかけてゐるやうだ。鰺ヶ沢とい **鰰、または**などといふ字を書いて、 読者

328 ていやだと言つてゐるやうだけれど、私たちには非常に淡泊な味

津軽 るし、 時記などにも、ハタハタが出てゐるやうだし、また、 多く食べた人には賞品、などといふ話もしばしば聞いた。東京へ る人は決して珍らしくない。ハタハタの会などがあつて、一ばん 0) 味は淡いといふ意味の江戸時代の俳人の句を一つ読んだ記憶もあ うから、ことさらまづいものに感ぜられるのであらう。 来るハタハタは古くなつてゐるし、それに料理法も知らないだら ま薄醤油で煮て片端から食べて、二十匹三十匹を平気でたひらげ ものに感ぜられる。 あるいは江戸の通人には、 津軽では、 珍味とされてゐたものかも知れ あたらしいハタハタを、そのま ハタハタの 俳句の歳

ない。

いづれにもせよ、このハタハタを食べる事は、

津軽の冬の

があるけれども、少し崩れかかつてゐる、木造町のコモヒのやう 匂ひや、 だが、その町を見るのは、いまがはじめてであつた。 避けて、コモヒを歩いてゐても、へんに息づまるやうな気持がす な涼しさが無い。その日も、ひどくいい天気だつたが、日ざしを 甘酸つぱい匂ひのする町である。川の水も、どろりと濁つてゐる。 片方はすぐ海の、 炉辺のたのしみの一つであるといふ事には間違ひない。 のハタハタに依つて、幼年時代から鰺ヶ沢の名を知つてはゐたの 飲食店が多いやうである。昔は、ここは所謂銘酒屋のやうな 疲れてゐる。 とかいふ凡兆の句を思ひ出させるやうな、 おそろしくひよろ長い町である。 木造町のやうに、ここにも長い「コモヒ」 妙によどんだ 市中はものの 山を背負ひ、

私は、

津軽 ある。 でも、 つた。 が二皿ついて、四十銭であつた。おそばのおつゆも、まづくなか ばやの一軒にはひつて、休ませてもらつた。おそばに、焼ざかな 時代には珍らしく「やすんで行きせえ。」などと言つて道を通る のはづれに出て、また引返した。町の中心といふものが無いので いてゐるのである。私は、一里歩いたやうな気がした。やつと町 こ迄行つても、 ものが、ずいぶん発達したところではあるまいかと思はれる。今 に呼びかけてゐる。ちやうどお昼だつたので、私は、そのおそ それにしても、この町は長い。海岸に沿うた一本街で、ど たいていの町には、その町の中心勢力が、ある箇所にかた そのなごりか、おそばやが四、五軒、軒をつらねて、今の 同じやうな家並が何の変化もなく、だらだらと続

らに、 鰺ヶ沢こそ、津軽の粋である、と感激の筆致でもつて書きかねま くれたならば、私はまた、たわいなく、自分の直感を捨て、深浦、 来したほど、どこか、かなめの心細い町であつた。かう書きなが たごたあるのではなからうかと、れいのドガ式政談さへ胸中に往 と言つてよろこんで迎へてくれて、あちこち案内し説明などして この辺がクライマツクスだな、と感じさせるやうに出来てゐるも これでも私の好きな友人なんかがゐて、ああよく来てくれた、 私は幽かに苦笑してゐるのであるが、深浦といひ鰺ヶ沢とい 町の重になつてゐて、その町を素通りする旅人にも、ああ、 ほどけてゐる感じだ。これでは町の勢力あらそひなど、ご | 鰺ヶ沢にはそれが無い。扇のかなめがこはれて、ばらば

津軽

ら。 的に、 だから軽く笑つて見のがしてほしい。 ものである。 ものでもないのだから、 君たちの故土を汚すほどの権威も何も持つてゐないのだか 深浦、 鰺ヶ沢の人は、 実際、 旅の印象記などあてにならない もしこの私の本を読んでも、 私の印象記は、 決して本質

さんのお宅へ伺つた。 鰺 たのは、 ケ沢の町を引上げて、また五能線に乗つて五所川原町に帰り その日の午後二時。 中畑さんの事は、 私は駅から、 私も最近、「帰去来」 まつすぐに、 中畑

鱈の後仕末を、少しもいやな顔をせず引受けてくれた恩人である。 にはくどく繰り返さないが、私の二十代に於けるかずかずの不仕

「故郷」など一聯の作品によく書いて置いた筈であるから、ここ

。」と中畑さんは、 自分で立つて箪笥から上等の靴下を一つ出して私に寄こした。 うである。 ゐた。昨年、病気をなさつて、それから、こんなに痩せたのださ たる姿をつくづく眺め、「や、靴下が切れてゐるな。」と言つて、 になつたものなう。」と、それでも嬉しさうに、私の乞食にも似 しばらく振りの中畑さんは、いたましいくらゐに、ひどくふけて 「これから、ハイカラ町へ行きたいと思つてるんだけど。」 「時代だぢやあ。あんたが、こんな姿で東京からやつて来るやう 「あ、それはいい。行つていらつしやい。それ、けい子、 めつきり痩せても、気早やな性格は、

333

往年のままである。五所川原の私の叔母の家族が、そのハイカラ

やはり

御案内

津軽 334 といふ名前であつたのだけれども、 町 に住んでゐるのである。 私の幼年の頃に、その街がハイカラ町 いまは大町とか何とか、 別な

私は五所川原の或る新聞に次のやうな随筆を発表した。

が、

ここには私の幼年時代の思ひ出がたくさんある。

名前のやうである。

五所川原町に就いては、

序編に於いて述べた

四

五年前、

の頃だつたと思ひます。 きました。 叔 母が五所川原にゐるので、小さい頃よく五所川原へ遊びに行 旭座の舞台開きも見に行きました。 たしか、左右衛門だつた筈です。 生れてはじめて見て、 小学校の三、 梅 四年 0) 由

間 思はず立ち上つてしまつた程に驚きました。 兵衛に泣かされました。 ...もなく火事を起し、 全焼しました。その時の火焔が、金木から、 廻舞台を、その時、 あの旭座は、その後

落ちました。かなり深くて、水が顎のあたりまでありました。三 焼けたのだといふ噂も聞きました。二十年も前の事です。 来ませんでした。旭座といふ名前が『火』の字に関係があるから 罪に問はれました。過失傷害致死とかいふ罪名でした。子供心に を差し出してくれたので、それにつかまりました。ひき上げられ 尺ちかくあつたのかも知れません。夜でした。上から男の人が手 も、どういふわけだか、その技師の罪名と、運命を忘れる事が出 はつきり見えました。映写室から発火したといふ話でした。さう 七つか、八つの頃、五所川原の賑やかな通りを歩いて、どぶに 映画見物の小学生が十人ほど焼死しました。映写の技師が、

て衆人環視の中で裸にされたので、実に困りました。ちやうど古

津軽 着屋のまへでしたので、その店の古着を早速着せられました。 の子の浴衣でした。帯も、緑色の兵児帯でした。ひどく恥かしく

らかはれて、ひとりでひがんでゐましたが、叔母だけは、私を、 いい男だと言つてくれました。他の人が、私の器量の悪口を言ふ 叔母は、本気に怒りました。みんな、遠い思ひ出になりまし

愛がられて育ちました。私は、男ぶりが悪いので、

何かと人にか

思ひました。

叔母が顔色を変へて走つて来ました。私は叔母に可

中畑さんのひとり娘のけいちやんと一緒に中畑さんの家を出て、

僕は岩木川を、ちよつと見たいんだけどな。ここから遠いか。」

すぐそこだといふ。

「ええ、さう。」

「いぬゐばし、と言つたかしら。」

遠く思はれたのだらう。橋がある。 外出の時には目まひするほど緊張してゐたものだから、なほさら それに私は、家の中にばかりゐて、外へ出るのがおつかなくて、 は、これくらゐの道のりでも、ひどく遠く感ぜられたのであらう。 があるが、もつと町から遠かつたやうに覚えてゐる。子供の足に ある。子供の頃、 けいちやんの案内で町を五分も歩いたかと思ふと、もう大川で いま見てもやつぱり同じ様に、 叔母に連れられて、この河原に何度も来た記憶 これは、 長い橋だ。 記憶とそんなに違は

「それぢや、連れて行つて。」

津軽 338 「いぬゐ、つて、どんな字だつたかしら。方角の乾だつたかな?」 「さあ、さうでせう。」笑つてゐる。

「自信無し、か。どうでもいいや。渡つてみよう。」

私は片手で欄干を撫でながらゆつくり橋を渡つて行つた。

景色だ。 一面の緑の草から陽炎がのぼつて、 東京近郊の川では、荒川放水路が一ばん似てゐる。 何だか眼がくるめくやうだ。 河原

さうして岩木川が、 両岸のその緑の草を舐めながら、 白く光つて

流れてゐる。

「夏には、ここへみんな夕涼みにまゐります。他に行くところも

五所川原の人たちは遊び好きだから、 それはずいぶん賑はふ事

のはうを指差して教へて、「父の自慢の招魂堂。」と笑ひながら 「あれが、こんど出来た招魂堂です。」けいちやんは、川の上流

小声で言ひ添へた。

幹部なのである。この招魂堂改築に就いても、れいの侠気を発揮 して大いに奔走したに違ひない。橋を渡りつくしたので、私たち な かなか立派な建築物のやうに見えた。中畑さんは在郷軍人の

は橋 の袂に立つて、しばらく話をした。

林檎はもう、 間 伐といふのか、少しづつ伐つて、かんばつ 伐つたあと

に馬鈴薯だか何だか植ゑるつて話を聞いたけど。」

339 「土地によるのぢやないんですか。この辺では、まだ、そんな話

津軽

ある。 私は林檎の花を見ると、おしろいの匂ひを感ずる。

大川の土手の陰に、林檎畑があつて、白い粉つぽい花が満開で

「けいちやんからも、ずいぶん林檎を送つていただいたね。こん

ど、おむこさんをもらふんだつて?」 「ええ。」少しもわるびれず、真面目に首肯いた。

「いつ? もう近いの?」

「あさつてよ。」

「へえ?」私は驚いた。けれども、けいちやんは、まるでひと事

のやうに、けろりとしてゐる。「帰らう。いそがしいんだらう?」 「いいえ、ちつとも。」ひどく落ちついてゐる。ひとり娘で、さ

の若さでも、やつぱりどこか違つてゐる、と私はひそかに感心し うして養子を迎へ、家系を嗣がうとしてゐるひとは、十九や二十

「あした小泊へ行つて、」引返して、また長い橋を渡りながら、

私は他の事を言つた。「たけに逢はうと思つてゐるんだ。」

「たけ。あの、小説に出て来るたけですか。」

「うん。さう。」

「よろこぶでせうねえ。」

「どうだか。逢へるといいけど。」

このたび私が津軽へ来て、ぜひとも、逢つてみたいひとがゐた。

私はその人を、自分の母だと思つてゐるのだ。三十年ちかくも逢

342 はないでゐるのだが、

私は、そのひとの顔を忘れない。

私の一生

津軽 は、 その人に依つて確定されたといつていいかも知れない。

自作「思ひ出」の中の文章である。

は、

女中から本を読むことを教へられ二人で様々の本を読み合つた。

「六つ七つになると思ひ出もはつきりしてゐる。

私がたけといふ

たけは私の教育に夢中であつた。 私は病身だつたので、 寝ながら

読む本がなくなれば、 たけは村の日曜学校

することを覚えてゐたので、いくら本を読んでも疲れないのだ。 などから子供の本をどしどし借りて来て私に読ませた。 たくさん本を読んだ。 私 は黙読

楽の御絵掛地を見せて説明した。火を放けた人は赤い火のめらめ たけは又、私に道徳を教へた。お寺へ屡々連れて行つて、 地獄極

344 から、 又からんと逆に廻れば地獄へ落ちる、とたけは言つた。

津軽 のだ。 故郷 私がそのあとを追ふだらうといふ懸念からか、私には何も言はず りした日があつたのである。 輪のどれを廻して見ても皆言ひ合せたやうにからんからんと逆廻 けが廻すと、いい音をたててひとしきり廻つて、かならずひつそ いつの間にかゐなくなつてゐた。或漁村へ嫁に行つたのであるが、 へつつ何十回となく執拗に廻しつづけた。日が暮れかけて来たの りと止るのだけれど、私が廻すと後戻りすることがたまたまある の小学校へ入つたが、追憶もそれと共に一変する。たけは、 私は絶望してその墓地から立ち去つた。(中略)やがて私は 秋のころと記憶するが、私がひとりでお寺へ行つてその金 私は破れかけるかんしやくだまを抑

やうだ。 れ なつた頃、 なかつた。」 はいつも、 とすぐ乳母に抱かれ、三つになつてふらふら立つて歩けるやうに 成績を聞いた。私は答へなかつた。 ちへ遊びに来たが、なんだかよそよそしくしてゐた。 に突然ゐなくなつた。その翌年だかのお盆のとき、たけは私のう たのが、 私 の母は病身だつたので、私は母の乳は一滴も飲まず、生れる たけは、 たけと一緒に暮したのである。三つから八つまで、 たけである。 乳母にわかれて、その乳母の代りに子守としてやとは 油断大敵でせえ、と言つただけで格別ほめもし 私は夜は叔母に抱かれて寝たが、その他 ほかの誰かが代つて知らせた 私に学校の

345

はたけに教育された。さうして、或る朝、

ふと眼をさまして、た

私

津軽 346 ある。 何のたよりも無かつた。そのまま今日に到つてゐるのであるが、 れつきり、たけと逢つてゐない。 たのだ。 けを呼んだが、たけは来ない。 中のたけの箇所を朗読した。故郷といへば、たけを思ひ出すので る言葉」のラジオ放送を依頼されて、その時、 んによそよそしくしてゐるので、私にはひどく怨めしかつた。そ から、一年ほど経つて、ひよつくりたけと逢つたが、たけは、 かりゐた。いまでも、その折の苦しさを、忘れてはゐない。それ 腸の思ひで泣いて、それから、二、三日、私はしやくり上げてば たけは、あの時の私の朗読放送を聞かなかつたのであらう。 私は大声挙げて泣いた。たけゐない、 はつと思つた。 四、 五年前、 何か、 たけゐない、 あの「思ひ出」の 私は「故郷に寄せ 直感で察し と断

には、いよいよ東京へ帰る時に途中でちよつと立寄らうといふ具

津軽 348 合に予定を変更して、けふは五所川原の叔母の家に一泊させても

家へ行つてみると、叔母は不在であつた。叔母のお孫さんが病気 で弘前の病院に入院してゐるので、それの附添に行つてゐるとい と思ひ立つたのである。けいちやんと一緒にハイカラ町の叔母の あす、 五所川原からまつすぐに、小泊へ行つてしまはう

「あなたが、こつちへ来てゐるといふ事を、 母はもう知 ぜ

ふのである。

をとつて家を嗣がせてゐるのである。 と従姉が笑ひながら言つた。叔母はこの従姉にお医者さんの養子いとこ ひ逢ひたいから弘前へ寄こしてくれつて電話がありましたよ。」

「あ、

弘前には、

東京へ帰る時に、ちよつと立ち寄らうと思つて

んきに私たちと遊んでゐる。 「あすは小泊の、たけに逢ひに行くんださうです。」けいちやん 何かとご自分の支度でいそがしいだらうに、家へ帰らず、の

たけを、どんなにいままで慕つてゐたか知つてゐるやうであつた。 たけも、なんぼう、よろこぶか、わかりません。」従姉は、私が 「たけに。」従姉は、真面目な顔になり、「それは、いい事です。 逢へるかどうか。」私には、それが心配であつた。もち

349 「小泊行きのバスは、一日に一回とか聞いてゐましたけど、」と

津軽 350 昔から固有名詞みたいに、さう呼んでゐた)が病院を引上げて来 家へ帰つたのと入違ひに、 けるといふ見込みがついた。 素通りして、 番の八時の汽車で五所川原を立つて、津軽鉄道を北上し、金木を バスに間に合ひませんよ。大事な日に、 泊行きのバスに乗つて約二時間。 あ いちやんは立つて、台所に貼りつけられてある時間表を調べ、 」ご自分の大事な日をまるで忘れてゐるみたいであつた。一 したの一番の汽車でここをお立ちにならないと、 それからお酒を飲んで、 津軽鉄道の終点の中里に九時に着いて、それから小 先生(お医者さんの養子を、 日が暮れて、けいちやんがやつとお 私は何だかたわいない話ばかりし あすのお昼頃までには小泊へ着 朝寝坊をなさらないやう 中里 私たちは からの

験しながら、未だに酒を断然廃す気持にはなれないのである。こ お 汽車の中に射込んで、私ひとりが濁つて汚れて腐敗してゐるやう 気である。 の酒飲みといふ弱点のゆゑに、私はとかく人から軽んぜられる。 で、どうにも、かなはない気持である。このやうな自己嫌悪を、 たのである。脂汗が、じつとりと額に涌いて出る。爽かな朝日が イカラ町の家には、こはい人もゐないので、前夜、少し飲みすぎ けつけ、やつと一番の汽車に間に合つた。けふもまた、よいお天 酒を飲みすぎた後には必ず、おそらくは数千回、 翌る朝、 私の頭は朦朧としてゐる。二日酔ひの気味である。ハ 従姉に起こされ、大急ぎでごはんを食べて停車場に駈 繰り返して経

351

津軽 352 0) は ぼんやり窓外の津軽平野を眺め、やがて金木を過ぎ、 な 世の中に、 口に走つて来て、 大きい風呂敷包みを二つ両手にさげて切符を口に咥へたまま改札 ましも久留米絣の着物に同じ布地のモンペをはいた若い娘さんが、 三十分も調べさせ、 からの帰りに上野で芦野公園の切符を求め、そんな駅は無いと言 逸事を思ひ出し、 ふ踏切番の小屋くらゐの小さい駅に着いて、金木の町長が東京 れ憤然として、津軽鉄道の芦野公園を知らんかと言ひ、 れたのではなからうか、 酒といふものさへなかつたら、私は或いは聖人にでも 眼を軽くつぶつて改札の美少年の駅員に顔をそ 窓から首を出してその小さい駅を見ると、 たうとう芦野公園の切符をせしめたといふ昔 と馬鹿らしい事を大真面目で考へて、 芦野公園と

はぬ。 ートを一艘寄贈した筈である。すぐに、中里に着く。人口、四千 松の林の中を走る。この辺は、金木の公園になつてゐる。 あまり類例が無いに違ひない。金木町長は、こんどまた上野駅で、 もつと大声で、芦野公園と叫んでもいいと思つた。汽車は、 のを待つてゐたやうに思はれた。こんなのどかな駅は、全国にも とたんに、ごとんと発車だ。まるで、機関手がその娘さんの乗る てある赤い切符に、まるで熟練の歯科医が前歯を抜くやうな手つ つと差し出し、美少年も心得て、その真白い歯列の間にはさまれ 芦の湖といふ名前である。この沼に兄は、むかし遊覧のボ 当り前の事のやうに平然としてゐる。少女が汽車に乗つた 器用にぱちんと鋏を入れた。少女も美少年も、ちつとも笑 沼が見 落葉

津軽 354 の 内 潟、 くらゐの小邑である。この辺から津軽平野も狭小になり、この北 相^あひうち 脇 元 などの部落に到ると水田もめつきり少やきもと

ない。 遊びに来た事があるが、四つくらゐの時であらうか、 の滝の他には、 くなるので、まあ、ここは津軽平野の北門と言つていいかも知れ 私は幼年時代に、ここの 金 丸といふ親戚の呉服屋さんへかなまる 何も記憶に残つてゐない。 村のはづれ

笑ひながら立つてゐる。 「修つちやあ。」と呼ばれて、 私より一つ二つ年上だつた筈であるが、 振り向くと、その金丸の娘さんが

「乀ノ長)だなう。ごこへ。」あまり老けてゐない。

「久し振りだなう。どこへ。」 「いや、小泊だ。」私はもう、早くたけに逢ひたくて、

他の事は

みな上の空である。「このバスで行くんだ。それぢやあ、失敬。」 「さう。帰りには、うちへも寄つて下さいよ。こんどあの山の上

に、あたらしい家を建てましたから。」

との奇遇をよろこび、あの新宅にもきつと立寄らせていただき、

家が一軒立つてゐる。たけの事さへ無かつたら、私はこの幼馴染

指差された方角を見ると、駅から右手の緑の小山の上に新しい

たいに意味も無く気がせいてゐたので、 ゆつくり中里の話でも伺つたのに違ひないが、何せ一刻を争ふみ

とバスに乗つてしまつた。バスは、かなり込んでゐた。 「ぢや、 また。」などと、いい加減なわかれかたをして、さつさ 私は小泊

355 まで約二時間、立つたままであつた。中里から以北は、

全く私の

356

津軽 この辺に住んでゐて、十三港の繁栄などに就いては前にも述べた 生れてはじめて見る土地だ。 津軽の遠祖と言はれる安東氏一族は、

が、 津軽平野の歴史の中心は、 この中里から小泊までの間に在つ

たものらしい。バスは山路をのぼつて北に進む。路が悪いと見え

軽だ。 背中を丸めてバスの窓から外の風景を覗き見る。 かなり激しくゆれる。 深浦などの風景に較べて、どこやら荒い。 私は網棚の横の棒にしつかりつかまり、 やつぱり、 人の肌の匂 北津 ひが

て、

無 に生きてゐる。 いのである。 東海岸の竜飛などに較べると、ずつと優しいけれ 山の樹木も、いばらも、笹も、人間と全く無関係

少しも旅人と会話をしない。 でも、この辺の草木も、 やがて、十三湖が冷え冷えと白く目 やはり「風景」の一歩手前のもので、

私 れいに依つて以後は、 か を中心にして、柱時計の振子のやうに、 ここでおしまひになつてゐるのだ。 この北は、 ぬといふやうな感じだ。十三湖を過ぎると、 水たまりである。 は ない感じの湖である。 に出る。この辺からそろそろ国防上たいせつな箇所になるので、 に展開する。浅い真珠貝に水を盛つたやうな、 小泊港に着いた。ここは、 てゐて、さうして、 山を越えてすぐ東海岸の竜飛である。 流れる雲も飛ぶ鳥の影も、 こまかい描写を避けよう。 なかなかひろい。人に捨てられた孤独の 波一つない。 本州の西海岸の最北端の港である。 つまり私は、 船も浮んでゐない。ひつそ 旧津軽領の西海岸南端の まもなく日本海 この湖の面には写ら お昼すこし前に、 気品はあるがは 五所川原あたり 西海岸の部落は、 の海

津軽 うで、ソイ、アブラメ、イカ、イワシなどの魚類の他に、コンブ、 れ 0) 千五百くらゐのささやかな漁村であるが、中古の頃から既に他国 0) 深浦港からふらりと舞ひもどつてこんどは一気に同じ海岸の北端 村のはづれに、ほんの少しあるだけだが、水産物は相当豊富なや この村の築港だけは、村に不似合ひなくらゐ立派である。水田は、 には必ずこの港にはひつて仮泊する事になつてゐたといふ。江戸 代には、近くの十三港と共に米や木材の積出しがさかんに行は 船舶の出入があり、殊に蝦夷通ひの船が、 た事など、前にもしばしば書いて置いたつもりだ。 小泊港まで来てしまつたといふわけなのである。ここは人口二 強い東風を避ける時 いまでも、

ワカメの類の海草もたくさんとれるらしい。

「越野たけ、といふ人を知りませんか。」私はバスから降りて、

その辺を歩いてゐる人をつかまへ、すぐに聞いた。

なからうかと思はれるやうな中年の男が、首をかしげ、 「こしの、たけ、ですか。」国民服を着た、役場の人か何かでは 越野といふ苗字の家がたくさんあるので。」

「前に金木にゐた事があるんです。さうして、いまは、 五十くら

あのひとなんです。」

私は懸命である。

「ああ、 わかりました。その人なら居ります。」

「ゐますか。どこにゐます。家はどの辺です。」

359 間くらゐの小ぢんまりした金物屋である。 東京の私の草屋よりも 私は教へられたとほりに歩いて、たけの家を見つけた。

津軽 360 めだ。 をかけてみたが、いづれも固くしまつてゐる。留守だ。私は途方 南京錠が、ぴちりとかかつてゐるのである。他のガラス戸にも手 思つて入口のガラス戸に走り寄つたら、果して、その戸に小さい へ、ちよつと外出したのか。いや、東京と違つて、田舎ではちよ にくれて、汗を拭つた。引越した、なんて事は無からう。どこか 十倍も立派だ。店先にカアテンがおろされてある。いけない、と

私は、ガラス戸をたたき、越野さん、越野さん、と呼んでみたが、 家さへわかつたら、もう大丈夫と思つてゐた僕は馬鹿であつた。 ふ事は無い。二、三日あるいはもつと永い他出か。こいつあ、だ つとの外出に、店にカアテンをおろし、戸じまりをするなどとい たけは、どこか他の部落へ出かけたのだ。あり得る事だ。

少し歩いて筋向ひの煙草屋にはひり、越野さんの家には誰もゐな たおばあさんは、運動会へ行つたんだらう、と事もなげに答へた。 いやうですが、行先きをご存じないかと尋ねた。そこの痩せこけ もとより返事のある筈は無かつた。溜息をついてその家から離れ、

すか、それとも。」 「それで、その運動会は、どこでやつてゐるのです。この近くで

私は勢ひ込んで、

れから学校があつて、運動会はその学校の裏でやつてゐるといふ。 「けさ、重箱をさげて、子供と一緒に行きましたよ。」 すぐそこだといふ。この路をまつすぐに行くと田圃に出て、そ

「さうですか。ありがたう。」

呆然とした。こんな気持

まで筵で一つ一つきちんとかこんだ小屋を立て、さうしていまはむしろ 所が足りなくなつたと見えて、運動場を見下せる小高い丘の上に こちに白昼の酔つぱらひ。さうして運動場の周囲には、 小屋がぎつしりと立ちならび、いや、 まづ、万国旗。着飾つた娘たち。 運動場の周囲だけでは場 百に近い

津軽 364 る。 小さい赤いほくろがあつた。 眼の大きい頬ぺたの赤いひとであつた。右か、左の眼蓋の上 私はそれだけしか覚えてゐない

運動場 そをかいた。どうにも、手の下しやうが無いのである。 のまはりを、うろうろ歩くばかりである。 私はただ、

から捜し出す事は、むづかしいなあ、と私は運動場を見廻してべ

のである。

逢へば、

わかる。その自信はあつたが、この群集の中

越野たけといふひと、どこにゐるか、ご存じぢやありませんか

私は勇気を出して、ひとりの青年にたづねた。「五十くらゐ

識の全部なのだ。 のひとで、金物屋の越野ですが。」それが私のたけに就いての知

金物屋の越野。」 青年は考へて、 「あ、 向うのあのへんの小屋

にゐたやうな気がするな。」

「さうですか。あのへんですか?」

するんだが、まあ、捜してごらん。」 「さあ、はつきりは、わからない。何だか、見かけたやうな気が

たが、そんな事でわかる筈は無かつた。たうとう私は、昼食さい お礼を言ひ、その漠然と指差された方角へ行つてまごまごしてみ 年にきざつたらしく打明け話をするわけにも行かぬ。 私は青年に その捜すのが大仕事なのだ。まさか、三十年振りで云々と、

ちゆうの団欒の掛小屋の中に、ぬつと顔を突き入れ、

の越野さんは、こちらぢやございませんか。」 「おそれいります。あの、失礼ですが、越野たけ、あの、金物屋

津軽 366 めて言ふ。 「ちがひますよ。」ふとつたおかみさんは不機嫌さうに眉をひそ

「さうですか。失礼しました。どこか、この辺で見かけなかつた

「さあ、わかりませんねえ。何せ、おほぜいの人ですから。」 私 は更にまた別の小屋を覗いて聞いた。わからない。

でせうか。」

別の小屋。 まるで何かに憑かれたみたいに、たけはゐませんか、

金物屋のたけはゐませんか、と尋ね歩いて、 運動場を二度もまは

つたが、 運動場へ引返して、砂の上に腰をおろし、ジヤンパーを脱いで汗 てたまらなくなり、学校の井戸へ行つて水を飲み、それからまた わからなかつた。二日酔ひの気味なので、のどがかわい

苦労も何も知らず、 その辺の宿屋で寝ころんで、たけの帰宅を待つてゐたつていいぢ ふざけみたいな事までして無理に自分の喜びをでつち上げるのは そんな暴力的な手段は何としてもイヤだつた。そんな大袈裟な悪 けさん、 を拭き、 つて歩き、村へ出た。運動会のすむのは四時頃か。 イヤだつた。 であらう。 帰らう。 あるのだ。

たしかに、

あるのだ。

いまごろは、 御面会。」とでも叫んでもらはうかしら、とも思つたが、 老若男女の幸福さうな賑はひを、ぼんやり眺めた。この いつそ、学校の先生にたのんで、メガホンで「越野た 縁が無いのだ。神様が逢ふなとおつしやつてゐるの 私は、ジヤンパーを着て立ち上つた。 重箱をひろげて子供たちに食べさせてゐるの もう四時間、 また畦道を伝 私のこんな

津軽 さはしい出来事なのかも知れない。私が有頂天で立てた計画は、 すぐそこに、いまゐるといふ事がちやんとわかつてゐながら、 ない。つまり、縁が無いのだ。はるばるここまでたづねて来て、 腹立たしい気持になりやしないだらうか。私は、いまのこの気持 やないか。さうも思つたが、その四時間、宿屋の汚い一室でしよ には、そんな具合のわるい宿命があるのだ。帰らう。考へてみる いつでもこのやうに、かならず、ちぐはぐな結果になるのだ。私 へずに帰るといふのも、 のままでたけに逢ひたいのだ。しかし、どうしても逢ふ事が出来 んぼり待つてゐるうちに、もう、たけなんかどうでもいいやうな、 いかに育ての親とはいつても、 私のこれまでの要領の悪かつた生涯にふ 露骨に言へば使用人だ。女中

あとは無いといふ事であつた。一時三十分のバスで帰る事にきめ 間を聞いた。一時三十分に中里行きが出る。もう、それつきりで、 うしてこんなにだらしなく、きたならしく、いやしいのだらう。 思ふのも無理がないのだ。お前は兄弟中でも、ひとり違つて、ど だめだといふのだ。兄たちがお前を、下品なめめしい奴と情無く ぢやないか。お前は、女中の子か。男が、いいとしをして、昔の めしを食べたいのですが。」と言ひ、また内心は、やつぱり未練 しつかりせんかい。私はバスの発着所へ行き、バスの出発する時 女中を慕つて、ひとめ逢ひたいだのなんだの、それだからお前は 私は発着所の近くの薄暗い宿屋へ這入つて、「大急ぎでひる もう三十分くらゐあひだがある。少しおなかもすいて来てゐ

津軽 四時頃まで休ませてもらつて、などと考へてもゐたのであるが、 のやうなものがあつて、もしこの宿が感じがよかつたら、ここで

断られた。けふは内の者がみな運動会へ行つてゐるので、何も出 かせて冷い返辞をしたのである。いよいよ帰ることにきめて、バ 来ませんと病人らしいおかみさんが、奥の方からちらと顔をのぞ

スの発着所のベンチに腰をおろし、十分くらゐ休んでまた立ち上

り、ぶらぶらその辺を歩いて、それぢやあ、もういちど、たけの

留守宅の前まで行つて、ひと知れず 今 生 のいとま乞ひでもし 口の南京錠がはづれてゐる。さうして戸が二、三寸あいてゐる。 て来ようと苦笑しながら、金物屋の前まで行き、ふと見ると、入

天のたすけ! と勇気百倍、グワラリといふ品の悪い形容でも使

はなければ間に合はないほど勢ひ込んでガラス戸を押しあげ、

「ごめん下さい、ごめん下さい。」

り思ひ出した。もはや遠慮をせず、土間の奥のその子のそばまで 子が顔を出した。私は、その子の顔によつて、たけの顔をはつき 「はい。」と奥から返事があつて、十四、五の水兵服を着た女の

「金木の津島です。」と名乗つた。

寄つて行つて、

知 たけは、 れない。もうそれだけで、私とその少女の間に、一切の他人行 少女は、あ、と言つて笑つた。津島の子供を育てたといふ事を、 自分の子供たちにもかねがね言つて聞かせてゐたのかも

371 儀が無くなつた。ありがたいものだと思つた。私は、 たけの子だ。

372 女中の子だつて何だつてかまはない。

私は大声で言へる。

私は、

津軽

だ、 やうだいだ。 たけの子だ。 「ああ、よかつた。」私は思はずさう口走つて、「たけは? 運動会?」 兄たちに軽蔑されたつていい。私は、 この少女とき ま

いて首肯き、 「さう。」少女も私に対しては毫末の警戒も含羞もなく、 「私は腹がいたくて、いま、薬をとりに帰つたの。」 落ちつ

気の毒だが、その腹いたが、よかつたのだ。腹いたに感謝だ。

う何が何でもこの子に縋つて、離れなけれやいいのだ。 の子をつかまへたからには、もう安心。大丈夫たけに逢へる。も

「ずいぶん運動場を捜し廻つたんだが、見つからなかつた。」

「うん。」と大きく首肯いた。

「さう。」と言つてかすかに首肯き、おなかをおさへた。

「まだ痛いか。」

「すこし。」と言つた。

「薬を飲んだか。」

黙つて首肯く。

「ひどく痛いか。」

笑つて、かぶりを振つた。

「それぢやあ、たのむ。僕を、これから、たけのところへ連れて

ら来たんだ。歩けるか。」 行つてくれよ。お前もおなかが痛いだらうが、僕だつて、遠くか

津軽

「偉い、

偉い。ぢやあ一つたのむよ。」

うん、うんと二度続けて首肯き、すぐ土間へ降りて下駄をつつ

からだをくの字に曲げながら家を出た。

かけ、 「運動会で走つたか。」 おなかをおさへて、

「走つた。」

「賞品をもらつたか。」 もらはない。」

おなかをおさへながら、とつとと私の先に立つて歩く。また畦

を横切つて、それから少女は小走りになり、一つの掛小屋へはひ 道をとほり、砂丘に出て、学校の裏へまはり、運動場のまんなか

すぐそれと入違ひに、たけが出て来た。たけは、うつろな眼

「修治だ。」私は笑つて帽子をとつた。

る。でも、すぐにその硬直の姿勢を崩して、さりげないやうな、 へんに、あきらめたやうな弱い口調で、「さ、はひつて運動会を 「あらあ。」それだけだつた。笑ひもしない。まじめな表情であ

。」と言つて、たけの小屋に連れて行き、「ここさお坐りになり

せえ。」とたけの傍に坐らせ、たけはそれきり何も言はず、きち

ちの走るのを熱心に見てゐる。けれども、私には何の不満もない。 んと正座してそのモンペの丸い膝にちやんと両手を置き、子供た

まるで、もう、安心してしまつてゐる。足を投げ出して、ぼんや

り運動会を見て、胸中に、一つも思ふ事が無かつた。もう、何が

375

津軽 376 どうなつてもいいんだ、といふやうな全く無憂無風の情態である。 平和とは、こんな気持の事を言ふのであらうか。 もし、さうなら、

あつたが、このやうな不思議な安堵感を私に与へてはくれなかつ 世の中の母といふものは、 皆、その子にこのやうな甘い放心

先年なくなつた私の生みの母は、

気品高くおだやかな立派な母で

私はこの時、生れてはじめて心の平和を体験したと言つてもよい。

れは、 の憩ひを与へてやつてゐるものなのだらうか。さうだつたら、こ 何を置いても親孝行をしたくなるにきまつてゐる。そんな

してゐるやつの気が知れない。 有難い母といふものがありながら、病気になつたり、 親孝行は自然の情だ。 倫理ではな なまけたり

かつた。

は、 は、 出 聞いたが、たけが私の家へ奉公に来て、 まじつてゐるが、でも、 見るこのたけと寸分もちがはない老成した人であつた。これもあ 三つで、たけが十四の時だつたといふ。それから六年間ばかり私 小さい罌粟粒ほどの赤いほくろが、ちやんとある。髪には白髪も の中のたけは、決してそんな、若い娘ではなく、 たけの頬は、やつぱり赤くて、さうして、右の眼蓋の上には、 たけに育てられ教へられたのであるが、けれども、 私 たけから聞いた事だが、その日、たけの締めてゐたアヤメ の幼い頃の思ひ出のたけと、少しも変つてゐない。 いま私のわきにきちんと坐つてゐるたけ 私をおぶつたのは、 いま眼の前に 私の思ひ あとで 私が

の模様の紺色の帯は、

私の家に奉公してゐた頃にも締めてゐたも

津軽 ので、 はき、 物は、 たけは、 をもらした。たけも平気ではないのだな、と私にはその時はじめ つてゐる。私も、いつまでも黙つてゐたら、しばらく経つてたけ かりしてゐる。おろかしくない。全体に、何か、強い雰囲気を持 たちとは、まるで違つた気位を持つてゐるやうに感ぜられた。 屓目であらうが、たけはこの漁村の他のアバ(アヤの Femme) つたものだといふ事である。そのせゐもあつたのかも知れないが、 まつすぐ運動会を見ながら、肩に波を打たせて深い長い溜息 また、薄い紫色の半襟も、やはり同じ頃、 その縞柄は、まさか、いきではないが、でも、 縞の新しい手織木綿であるが、それと同じ布地のモンペを 私の思ひ出とそつくり同じ匂ひで坐つてゐる。だぶん贔 私の家からもら 選択がしつ

てわかつた。でも、やはり黙つてゐた。

たけは、ふと気がついたやうにして、

「何か、たべないか。」と私に言つた。

「要らない。」と答へた。本当に、何もたべたくなかつた。

「餅があるよ。」たけは、小屋の隅に片づけられてある重箱に手

をかけた。

たけは軽く首肯いてそれ以上すすめようともせず、

「いいんだ。食ひたくないんだ。」

年ちかく互ひに消息が無くても、 「餅のはうでないんだものな。」と小声で言つて微笑んだ。三十 私の酒飲みをちやんと察してゐ

るやうである。不思議なものだ。私がにやにやしてゐたら、たけ

379

は眉をひそめ、

津軽 たけは、 「たばこも飲むなう。さつきから、立てつづけにふかしてゐる。 お前に本を読む事だば教へたけれども、たばこだの酒だ

のは、

教へねきやなう。」と言つた。

油断大敵のれいである。

私

は笑ひを収めた。 私が真面目な顔になつてしまつたら、こんどは、 たけのはうで

笑ひ、 竜 神 様 の桜でも見に行くか。どう?」と私を誘つた。 立ち上つて、

私は、 たけの後について掛小屋のうしろの砂山に登つた。 砂山

「ああ、

行かう。」

には、スミレが咲いてゐた。背の低い藤の蔓も、 這ひ拡がつてゐ

歩きながらその枝の花をむしつて地べたに投げ捨て、それから立 たけは、 森があつて、その森の小路のところどころに八重桜が咲いてゐる。 たみたいに能弁になつた。 ちどまつて、勢ひよく私のはうに向き直り、にはかに、堰を切つ てついて行つた。砂山を登り切つて、だらだら降りると竜神様の たけは黙つてのぼつて行く。私も何も言はず、ぶらぶら歩い 突然、ぐいと片手をのばして八重桜の小枝を折り取つて、

うちの子供は言つたが、まさかと思つた。まさか、来てくれると は思はなかつた。小屋から出てお前の顔を見ても、 「久し振りだなあ。はじめは、わからなかつた。金木の津島と、 修治だ、と言はれて、あれ、と思つたら、それから、口がき わからなかつ

382

津軽 あちこち歩きまはつて、庫の石段の下でごはんを食べるのが一ば 行つた時には、お前は、ぱたぱた歩いてはころび、ぱたぱた歩い は、どうでもいいぢや、 ありがたいのだか、うれしいのだか、かなしいのだか、そんな事 り考へて暮してゐたのを、こんなにちやんと大人になつて、たけ けなくなつた。運動会も何も見えなくなつた。三十年ちかく、た ん好きで、たけに 昔 噺 語らせて、たけの顔をとつくと見ながら てはころび、まだよく歩けなくて、ごはんの時には茶碗を持つて を見たくて、はるばると小泊までたづねて来てくれたかと思ふと、 けはお前に逢ひたくて、逢へるかな、逢へないかな、とそればか 匙づつ養はせて、手かずもかかつたが、愛ごくてなう、それが まあ、よく来たなあ、お前の家に奉公に

取つては捨ててゐる。 にしてゐる桜の小枝の花を夢中で、むしり取つては捨て、むしり ゐないかと、お前と同じ年頃の男の子供をひとりひとり見て歩い たものだ。よく来たなあ。」と一語、一語、言ふたびごとに、手 つたが、金木のまちを歩きながら、もしやお前がその辺に遊んで こんなにおとなになつて、みな夢のやうだ。金木へも、たまに行

「子供は?」たうとうその小枝もへし折つて捨て、両肘を張つて

モンペをゆすり上げ、「子供は、幾人。」

私は小路の傍の杉の木に軽く寄りかかつて、ひとりだ、と答へ

「男? 女?」

「女だ。」

津軽 得ぬ人は、青森に於けるT君であり、五所川原に於ける中畑さん りで、金持ちの子供らしくないところがあつた。見よ、私の忘れ つきり知らされた。私は断じて、上品な育ちの男ではない。だう いふ事に気附いた。私は、この時はじめて、私の育ちの本質をは つぱちのところがあるのは、この悲しい育ての親の影響だつたと てゐるのだと思つた。きやうだい中で、私ひとり、粗野で、がら くて不遠慮な愛情のあらはし方に接して、ああ、私は、たけに似 「いくつ?」 次から次と矢継早に質問を発する。私はたけの、そのやうに強

であり、

金木に於けるアヤであり、さうして小泊に於けるたけで

ある。 むかし一度は、 アヤは現在も私の家に仕へてゐるが、 私の家にゐた事がある人だ。私は、これらの人と 他の人たちも、その

友である。

ましはしなかつた。さらば読者よ、 り尽したやうにも思はれる。 どめて大過ないかと思はれる。まだまだ書きたい事が、あれこれ とあつたのだが、津軽の生きてゐる雰囲気は、以上でだいたい語 津軽風土記も、作者のこの獲友の告白を以て、ひとまづペンをと さて、古聖人の獲麟を気取るわけでもないけれど、 絶望するな。では、失敬。 私は虚飾を行はなかつた。 命あらばまた他日。 聖戦下の新 元気で行 読者をだ

底本:「太宰治全集第六巻」筑摩書房

1990(平成2)年4月27日初版第1刷発行

初出:「新風土記叢書7 津輕」小山書店

1944(昭和19)年11月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」(区点番号5-

86) を、大振りにつくっています。

入力:八巻美惠

1999年5月21日公開

2018年7月24日修正

387

388

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(https://w

津軽

のは、ボランティアの皆さんです。

ww.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたった

津軽太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks 青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/